
遊戯王に転生？そんな事より婚約者とイチャイチャしてたい。

無限の剣製作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王に転生？そんな事より婚約者とイチヤイチャしたい。

【Nコード】

N9002W

【作者名】

無限の剣製作者

【あらすじ】

「綾香、愛してる」

「私も、鏡夜の事を、愛してる……」

「お前達頼むから家でイチヤイチャしろ！！砂糖吐かせるつもりか！！」

原作なんて関係ないし興味なんてさらっさらない。俺は、こっちの世界で出来た彼女とイチヤイチャするだけだ。今日も明日も。そんな感じの主人公の物語です。ご都合主義、チートドロ、ガチ成分が多分に入っていたりしますが、良ければ読んでいって下さい。

※70000ユニク、50000PV突破しました。こんな駄作を読んでいただいている皆様、ありがとうございます。

チートドロ―？ええ、事実ですが何か？（前書き）

何本連載抱える気なんだよ、俺は……

というわけで見切り発車で始まったこの駄文。どうなるのかわかりませんが楽しんでいって下さい！！

チートドロロー？ええ、事実ですが何か？

「フレイム・ウィングマンで攻撃！！スカイスクレイパー・シュート！！！」

「ペーペロンチーノーッ！！」

お、やってるやってる。原作の名シーンを見逃したのは痛いけどな。はい、皆様の予想通り転生者の夜光鏡夜です。なんか気がついたらGXの世界に転生してました。

まあ、他の転生者とは違う所が一つだけある。それは――

「鏡夜……行かなくていいの……？」

可愛い婚約者がいるんだよ！！

しかも転生者。マジ俺得。

「おっ、悪いな、綾香」

「別に貴方の心配をしたわけじゃない……」
おうおう、ツンツンだな。

「でも……」

ん？

「負けたら……許さないんだから……！！」

そう言っって顔を真っ赤にして別の方向へと逃げていく我が婚約者。あのツンデレが本当に可愛いんだから。

――さて。

「受験番号零番、夜光鏡夜だ。ヤコウ・キョウヤ受験しに来てやった。感謝しろ」
とりあえず、まずは試験を受けるのが先かな？

「貴方の相手はこの私がすることになったノーネ」

「ああ、そうか。まあ、誰でもいいや。じゃあ、始めようぜ」

「生意気なドロップアウトボーイなノーネ……」

「決闘デュエル！！」

クロノス

LP4000

「私のターン、ドローによー！私、トロイホースを召喚！さらに、魔法カード二重召喚を発動！このカードは、通常に加えても一度だけ通常召喚を行う事が出来るノーネ。私は、トロイホースを生贄に捧げ、古代の機械巨人を召喚！カードを一枚伏せて、ターンエンドなノーネ」

クロノス

LP4000

場

古代の機械巨人（攻撃力3000）伏せカード一枚

うん。普通の光景だね。

にしても二重召喚って現環境では全く使われないカードなのに、良く使うなクロノス。

後ギャラー！。たかが攻撃力3000ごときで終わったとか言ってるんじゃない。今から本当の『終わった』攻撃力を見せてやるよ！

「俺のターン、ドロー。俺は強欲な壺を発動。デッキからカードを二枚ドローする」

来ました禁止カード。

たった一枚でハンドアドバンテージを一枚稼げるとかまじチート。そして手札は、

- ・未来融合―フューチャー・フュージョン―
- ・サイバネティック・フュージョン・サポート
- ・リミッター解除
- ・ハーフ・シャット
- ・サイバー・ジラフ
- ・大嵐
- ・パワーボンド

自重はしない！！とことんやってやる！！

「俺は魔法カード大嵐を発動！！フィールド上の全ての魔法・罠カードを破壊する！！」

破壊されたのは聖バリ。予想通りすぎて困る。

「サイバージラフを召喚して効果発動！！このカードをリリースする事でこのターンの効果ダメージを零にする！！さらに、永続魔法、未来融合―フューチャー・フュージョン―を発動！！俺が選択するのは、キメラテック・オーバー・ドラゴン！！俺はデッキからサイバードラゴンを含む機械族モンスター29枚を墓地に送る！！」

プレイミスか？なんてぼやいてる奴ら。これは悪夢の幕開け以外他

ならないぞ？

「さらに俺は、速攻魔法サイバネティック・フュージョン・サポートを発動！！このカードは、ライフを半分払うことで墓地のモンスターを融合素材として扱う事が出来る！！俺は、魔法カードパワーボンドを発動！！このカードは機械族専用の融合カード。この効果で融合召喚されたモンスターは、元々の攻撃力が倍になる。リスクとしてターン終了時に元々の攻撃力分だけダメージを受けるが、それはサイバージラフの効果で無効になっている」

鏡夜

LP4000↓2000

「さあ、表れろ！！キメラテック・オーバー・ドラゴン！！」

鏡夜

場キメラテック・オーバー・ドラゴン（攻撃力48000）

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの効果により、このカード以外のカードは全て墓地に送られるので、俺は未来融合ーフューチャー・フュージョンーを墓地に送る。俺は、速攻魔法リミッター解除を発動！！このカードは、自分の場の機械族モンスター全ての攻撃力を二倍にする！！代償としてターン終了時に破壊されるがな」

鏡夜

キメラテック・オーバー・ドラゴン（攻撃力48000↓96000）

「攻撃力、96000だと……？」

「馬鹿な……」

先程まで啞然としてたお馬鹿さん達が驚いている。ま、当然か。こんな攻撃力見た事ないだろうし。

「速攻魔法、ハーフ・シャットを発動!!このカードは、受けたモンスターに戦闘耐性を与えるかわりに、攻撃力を半分にする!!対象は、古代の機械巨人!!」

「な、なんでスート!!」

クロノス

場

古代の機械巨人(攻撃力3000↓1500)

「キメラテック・オーバー・ドラゴンで攻撃!!エヴォリユーション・レザルト・バースト!!イチレエンダァ!!」

「ペーペロンチーノッ!!」

クロノス

LP4000↓90500

「まだだ!!キメラテック・オーバー・ドラゴンの効果発動!!このモンスターは、融合素材にしたモンスターの数だけ相手モンスターに攻撃が可能!!その攻撃回数は――残り二十九回!!」

「ま、まさーカ、そのためーニ、ハーフ・シャットを!?!」

「その通りだ。さあ、オマケだ!!エヴォリユーション・レザルト・バースト!!ニジュウキュウレエンダァ!!」

「ペーペロンチーノッ!!」

クロノス

LP90500↓2831000

うわ。なんてオーバーキル。七桁のダメージなんて久し振りに見た。自分がやったんだけど。

「す、すげえ……」

「あのクロノス先生に、なんてオーバーキルだ……」

「七桁なんて、俺、初めて見たよ……」

観客共が驚いてる。まあ、普通は驚くと思うけど。

今回使用したデッキは、みんな大好き未来オーバーだ。ただまあ、原作オリジナルカードをいくつか入れてある。その中の一つがサイバネティック・フュージョン・サポート。本当強かったです。

「終わった……？」

「ん？来てたのか？」

振り返ると、そこには我が愛しき婚約者——桜野綾香サクラノ・アヤカの姿があった。

「帰ろ……今日は疲れた……」

そう言って、俺におぶさる綾香。もう、本当に可愛すぎる！！

「そうだな。そろそろ迎えも来てるだろうしな」

殆ど見れないオーバーキルに何も言えない観客を無視して、俺と綾香は試験会場を後にした。

チートドロロー？ええ、事実ですが何か？（後書き）

今回主人公が使ったデッキは未来オーバーです。サイバー・ラヴ
ア、ツヴァイ、エルタニンも当然のように入っています。今回は出
て来ませんでした。

なんでサイバネティク・フュージョン・サポートがOCG化しな
いのかって？強すぎるからだよ！！

では、次回投稿いつになるかわかりませんが、応援していただける
と嬉しいです。

主人公？はいはい、寒波寒波。(前書き)

寒波使いません(笑)

主人公？はいはい、寒波寒波。

「無事、合格したね……」

「そうだな」

あの後、普通に合格の知らせが届き、校長のともなく長い話を聞き終え、俺は今ライイエロー寮の前にいる。

はい、普通にライイエローでした。別に物語に介入する気もないし、ここでひたすら綾香と淫靡な生活を送れたら十分です。

「にしても、お前のデッキよく試験官に嫌われなかったな」

「嫌われたよ……でも勝ったから合格になった。負けてたら間違いなく不合格だったけどね……」

そう言って苦笑する綾香。本当に可愛い。

「それにしても……」

「そうね……」

「「暇だ（ね……）」」

あの試験での超絶オーバーキルが怖いのか、誰も俺に話しかけようとしてくれない。はあ……

「……暇ならオシリスレッドに行こ……？あそこなら、多分主人公がいるはずだから……」

「それはいい考えだ。さすが綾香！！」

「そ、そんなに誉められると……照れる……」

顔を真っ赤にしてそっぱを向く綾香。ああもう、本当に可愛すぎて生きてるのが辛い!!

「……鏡夜……?」

「ん? どうした綾香?」

「早く、行こ……」

「そうだな」

「お? お前はクロノス先生に超オーバーキルをした奴じゃないか!」
「?」

「ああ、そうだ。俺は夜光鏡夜。よろしくな、遊城十代」

「お? なんで俺の名前を知ってるんだ?」

「俺の前にクロノスを倒したのはお前だろ? その実力、見てみるか? HERO 使い」

「ああ、そうだな!! よし、デュエルしようぜ!!」

やばい。狙い通り過ぎて何も言えない。

「「決闘^{デュエル}!!」」

「先行は貰うぜ!! 俺のターン、ドロー!! 俺は、魔法カード融合を発動!! 手札のフェザーマンとバーストレディを融合し、表れる

！！マイフェイバリット、フレイム・ウィングマン！！」

いきなり融合ですか。流石はチートドロ。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

十代

LP4000

場

E・HEROフレイム・ウィングマン（攻撃力2100）

伏せカード二枚

手札6枚↓2枚

「俺のターン、ドロ」

さて……手札だが、これは酷い。

まあ、そういうデッキだからしょうがないんだけど。

「俺は未来融合―フューチャー・フュージョン―を発動！！F・G・Dを選択し、デッキから五枚のドラゴン族を墓地に送る！！俺は、デッキからホルスの黒炎竜LV4を二枚、LV6、ミンゲイドラゴン二枚を墓地に送る！！」

この世界未来融合制限かかってないから三積み出来るんだよ……なんてことはおいて。

「魔法カード、死者蘇生を発動！！墓地からホルスの黒炎竜LV6を特殊召喚！！」

鏡夜

場

ホルスの黒炎竜Lv6（攻撃力2300）

「手札から速攻魔法サイクロンを発動！！その伏せカードを破壊する！！」

「何！？」

破壊したのは攻撃の無力化。これでフレイム・ウィングマンを守る物は存在しない。

「バトルだ！！ホルスの黒炎竜Lv6でフレイム・ウィングマンに攻撃！！フォーサウザンド・ヒストリーLv6！！」

技名はとんでもなく適当。が、ホルスはしっかりとその責務を果たしてくれた。

「くっ……フレイム・ウィングマン！！」

十代

LP4000↓3800

「カードを二枚伏せて、ターンエンド！！そして、ターンエンド時にホルスの黒炎竜Lv6の効果発動！！このカードを墓地に送る事で、デッキからホルスの黒炎竜Lv8を特殊召喚する！！さあ、進化しろ黒炎竜！！」

鏡夜

LP4000

場

ホルスの黒炎竜Lv8（攻撃力3000）
伏せカード二枚

手札6枚↓1枚

「俺のターン、ドロー！！俺は、魔法カードミラクル・フュージョンを発動！！」

恐らくホルスの効果を知らないから発動したんだろう。だが、甘いぞ十代！！

「この瞬間、ホルスの黒炎竜Lv8の効果発動！！魔法カードの効果を無効にしそのカードを破壊する事が出来る！！ヒストリー・オブ・キャンセラー！！」

「何！？」

あえなく破壊されるミラクル・フュージョン。残念だったな、十代。

「そ、そんなカード卑怯っス！！」

外野が五月蠅いが、無視だ無視。

「くっ、俺はスパークマンを守備表示で召喚……ターンエンドだ」

十代

LP3800

場

スパークマン……まさかあの手札、融合……！？となるとあいつは、ミラクル・フュージョンでフレイム・ウィングマンを蘇生した後、融合でシャイニング・フレア・ウィングマンを出そうとしていたのか……？

チートドローもここまで来ると恐怖だな……

「俺のターン、ドロ―」

ふむ。いいカードが来たな。

「魔法カード、命削りの宝札を発動!! 手札が五枚になるまでドロ―する!!」

引いたカードは……これは勝ったな。

「手札からおろかな埋葬を発動!! デッキから真紅眼の黒竜を墓地に送る!! さらに、仮面竜を召喚し、それをゲームから除外し、表れる!! レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン!!」

鏡夜

場

ホルスの黒炎竜Lv8（攻撃力3000）

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻撃力2800）

伏せカード二枚

出ました、原作とは似ても似つかずどこがメタルか全くわからない竜!!

だが、出しやすくてとんでもなく強いんだよな、こいつは。

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果発動!! 一ターンに一度、手札か墓地からドラゴン族モンスター一体を特殊召喚出来る!! 表れる、真紅眼の黒竜!! さらに、このカードを墓地に送り、手札から真紅眼の闇竜を特殊召喚する!!」

まだだ!! まだ俺のメインフェイズは終了していない!!

「伏せておいた速攻魔法、飛龍天舞を発動！！デッキからドラゴン族モンスターカード四枚を墓地に送り、その数×300ポイント攻撃力を上昇させる！！さらに真紅眼の闇竜は、墓地のドラゴン族×300ポイント攻撃力を上昇させる！！」

鏡夜

場

ホルスの黒炎竜Lv8（攻撃力3000↓4200）

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻撃力2800↓4000）

真紅眼の闇竜（攻撃力2400↓3900↓6300）

ちなみに伏せておいたもう一枚のカードはお触れ、残り一枚の手札は寒波だったりする。

結局使わなかったけどね。さあ、派手に終わらそうか！！

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでスパークマンに攻撃！！ダークネスメタルフレア！！」

「くっ……スパークマン……」

守備力1400しかないスパークマンでは到底かなわず、一瞬で戦闘破壊される。

「さあ、派手に消し飛べ！！ホルスの黒炎竜Lv8、真紅眼の闇竜で攻撃！！フォーサウザンド・ヒストリーLv8！！ダークネス・ギガ・フレイム！！」

「う……うわあああああっ！！」

十代

LP3800↓400↓6700

「くっそー、負けちゃったぜ！！でも、ガッチャー！！楽しいデュエ

ルだったぜ!!」

負けた十代が近づいて来る。まさか、オーバーキルされたのに、気にしていないとは。

でも、そのへこたれない打たれ強さがコイツの強さなんだろう。そこは、こいつを素直に尊敬すべき点だ。それに比べて――

「なんなんスカあのデュエルは!! あんなリスペクトの欠片もないデュエル、認められないっス!!」

――こいつがカスすぎてうざい。

リスペクト? そんな物で勝てたら苦労しないよ。それにあの後攻サイドラ三枚パワボンはいいのか。あっちのほうがよっぽどリスペクトに反してゐるぞ?

「十代。付き合ってくれてありがとな。また後で俺の部屋に來い。

HEROに関するカードをいくつかやろう。ああ、そしてその屑」

「屑とはなんスカ!!」

「人のやっている事を批判しか出来ないのか? そんなんだからお前は兄貴にパワーボンドを封印されるんだよ」

「う……」

図星すぎて何も言えない屑。ああ、本当にうざかった。

「鏡夜……そろそろ戻ろ……? 今日は歓迎会があると思うし」

「ああ……そうだな。じゃあな、十代に屑。十代はまた後でな」

十代達に背を向け、俺はイエローの自分の寮に向けて歩き出した。

綾香の要望で彼女をお姫様抱っこしながら。

主人公？はいはい、寒波寒波。（後書き）

今回のデッキはドラゴン軸のお触れホルスです。初期十代のデッキではこれは多分倒せないかと思いついて使用してみました。

ミンゲイドラゴンを墓地に送った理由は保険です。このデッキ自体かなり重いので生贄要員として入れてみました。

実はサイコショッカーも入ってます。結局使いませんでした。

飛龍天舞が何故OCG化されないかって？強すぎるからだよ！！

では次回。いつになるかわかりませんが。

あれ？万丈目って……双子……？
(前) (前書き)

万丈目出番ありません (笑)

あれ？万丈目って……双子……？（前）

「……来たか」

「来たみたいね……」

歓迎会も終わり十代にいくつかカードを渡した後部屋で綾香と戯れていたら、その終わりを表すかのように俺のPDAが鳴り響いた。

「……よ、十代」

「お、鏡夜か！！さっきはありがとな！！」

「まあ、気にするな。俺の暇潰しに付き合ってくれた礼だ」

深夜。本当は綾香とイチャイチャといやらしい行為を夜まで続けたかったのだが綾香の進めにより万丈目主催のアンティデュエルに巻き込まれる事になった。

ちなみに十代には幾つか便利なカードを渡してある。主に前の世界で使われていたHERO関連のカードを。

「万丈目さん、俺にあの生意気な新入生をやらせて下さい！！」

「万丈目さん、俺はあの女です！！」

ほう、俺の相手は取り巻きか。こりゃなんてテンプレな。
でもまあどうでもいいし――

「さっさと部屋に戻ろうぜ」

「……そうね……」

面倒くさいからあのデッキでいこう。ワンキルデッキで。

「さっさと終わらせてやるよ。来い!!」

「これは互いのベストカードを賭けたアンティデュエルだ。その所、わかっているんだろうな？」

「別にデッキ丸ごと賭けてもいいぜ？」

「ぬかせ!!」

「「決闘^{デュエル}!!」」

「先攻は俺が貰う!! ドロー!! 俺は、ゴブリン突撃部隊を召喚!! さらに、装備魔法デーモンの斧を装備させる!! カードを一枚伏せてターンエンドだ!!」

取り巻き

LP 4000

場

ゴブリン突撃部隊（攻撃力2300↓3300）
伏せカード一枚、デーモンの斧手札6枚↓3枚

……いや、マジでテンプレ。どうせあの伏せカード最終突撃命令だろ？

ま、今回の俺のデッキには何も関係ないけど。

「俺のターン、ドロー。魔法カード、苦渋の選択を発動！！デッキから五枚のカードを指定し、相手にそのうち一枚を選ばせ、その一枚を手札に加え、それ以外を墓地に送る。俺が選択するのは、封印されしエクゾディア、封印されし者の右足、封印されし者の左足、封印されし者の右腕、封印されし者の左腕だ」

「エクゾディアパーツを墓地に送るだ……？」

もうこの時点で俺のデッキ、そして手札がわかってしまった方も多いだろう。それにしても、苦渋の選択って本当にチートだな。

「なら封印されし者の右腕を手札に加えろ！！」

「わかった。俺は魔法カード死者転生を発動！！手札を一枚捨て、墓地のモンスターカード一枚を手札に加える！！俺は封印されしエクゾディアを手札に加える！！」

「だがまだ三枚のパーツカードが墓地に送られている。どうするつもりだ？」「さあ、どうだろうな？俺は天使の施しを発動。カードを三枚引いて二枚捨てる。そしてカードを二枚伏せ、ターンエンドだ」

鏡夜

LP4000

場

伏せカード二枚

手札6枚↓3枚

この時点で俺の勝ちほぼ確定したな。

「俺のターン！！ド「ドローフェイズ時にリバース罠、補充要員を発動！！墓地にある封印されし者の左腕、封印されし者の左足、封印されし者の右足を手札に加える！！」…………へ…………？」

はい、エクゾディア完成。

ちなみにもう一枚の伏せカードは神の宣告。どう転んでも勝利は確定していた。

「お前はもう、死んでいる」

「うわあああああっ！！」

鏡夜

封印されしエクゾディアのカード効果で勝利

さて、あっちは…………っと、もう終わってたか。

side 綾香

…………はあ…………早くこんな終わらせて鏡夜とエッチな行為をしたい…………

せっかく私と鏡夜が（検閲されました）な行為に勤しんでいたって
いうのに…………

さっさと倒して鏡夜と部屋に戻ろ…………

「で、私の相手は……?」

「俺だ。このデュエルは」

「アンティデュエル、でしょ……?早く終わらせよ……」

「随分と大口叩くじゃねえか!!吠え面かくなよ!!」

「こっちの台詞……」

「^{デュエル}決闘!!(……)」

「先攻は貰う……私のターン、ドロ……魔法カード、強欲な壺を二枚発動……デッキからカードを二枚ドロ……カードを二枚伏せてから魔法カード天使の施し……カードを三枚引いて二枚捨てる……」

「おいおい、手札事故か?」

「……うるさい……魔法カード、昼夜の大火事を二枚発動……1600ダメージを受けてもらう……さらに、魔法カード御隠居の猛毒薬を二枚発動……800ダメージを二回受けて貰う……」

「な、なんだと!?!ぐわっ!!」

取り巻き

LP4000↓800

「……ターンエンド……」

「よし、俺のターン、ドロ「リバースカードオープン、仕込みマシガン……相手の手札、場のカード×200ダメージ、合計1200のダメージを受けて貰う……」……な、なんだと!?!?」

「絶望が、貴方のゴールよ……」

「うわああああっ!!」

取り巻き

$$\begin{array}{r} \text{L} \\ \text{P} \\ 8 \\ 0 \\ 0 \\ \downarrow \\ \hline 4 \\ 0 \\ 0 \end{array}$$

あれ？万丈目って……双子……？（前）（後書き）

主人公の使用したデッキは、苦渋エクゾです。いや、初手でこんな
んされてどう勝てという。

ヒロインは……原作オリジナルのドローカードを大量に入れたバー
ンデッキです。いや、こんなにどう（略）

ついでに主人公とヒロインの決め台詞募集中です！！感想欄に書い
て頂けると作者はとても喜びます！！

では次回。いつになるかわかりませんがまたお会いしましょう。

あれ？万丈目って……双子……？
（後）（前書き）

なんかワンキル（笑）

あれ？万丈目って……双子……？（後）

俺達のワンキルの後、ようやく十代と万丈目が舞台に上がった。
というより、俺達の近くで見ているあの万丈目に似ている奴は誰なんだ……？一応ブルーらしいけど、なんか溜め息をついてるし。

「さあ、始めようぜ、万丈目！！」

「ふん、いいだろう。ブルーの力を見るがいい！！」

「「決闘（デュエル！！）」」

あ、また溜め息ついた。さっきのかっこつけた台詞のせいかな？

「先攻は俺が貰う！！ドロー！！俺は地獄戦士を攻撃表示で召喚！！カードを二枚伏せてターンエンド！！」

万丈目

LP4000

場

地獄戦士（攻撃力1200）

伏せカード二枚

はい、出ました中二（笑）

というより明らかにアマゾネスの剣士の下位互換という。
使うんならそっち使おうぜと言いたい。

「俺のターン、ドロー！！」

お、俺が渡したカードの幾つかを使うな？

「俺は、魔法カード強欲な壺を発動！！デッキからカードを二枚ドローする！！さらに、E・HEROエアーマンを召喚！！さらに、効果を発動！！デッキから、HEROと名のつくモンスター一体を手札に加える！！俺は、フェザーマンを選択する！！」

出ました、明らかに空気を読まない男エアーマン。

入れないHEROデッキは無いと言っていいほどの使用率が高く、その使い勝手の良い二つの効果のおかげでHERO唯一の制限カード！！

ちなみに属性HEROの融合体は渡してません。あんなの渡したらアニメHEROの出番無くなるじゃん。

「さらに、魔法カード大嵐を発動！！フィールド場の全ての魔法、罠を破壊する！！」

「なんだと！？」

破壊されたのは、やはりと言っていいと思えるカード、ヘル・ポリマーと攻撃の無力化。

これで十代の融合を阻止する物は何も無い。

「魔法カード、融合を発動！！手札のフェザーマンとバーストレディを融合！！表れる、マイ・フェイバリット、E・HEROフレイム・ウィングマン！！」

あ、詰んだかな？これは。

「魔法カード、HERO・Sボンドを発動！！手札から、E・HEROザ・ヒートとE・HEROフォレストマンを特殊召喚！！」

十代

LP4000

場

E・HEROエアーマン（攻撃力1800）

E・HEROフレイム・ウィングマン（攻撃力2100）

E・HEROザ・ヒート（攻撃力1600↓2400）

E・HEROフォレストマン（攻撃力1000）

……終わったな。

にしても流石チートドロ！。初手でこの手札を揃えるとは、夢にも思ってたなかった。

と言うよりも、ワンキルとか。流石に酷くないか？

「バトルだ！！行け、フレイム・ウィングマン！！フレイム・シュート！！」「くっ……だが、地獄戦士の効果発動！！戦闘ダメージを貴様も受けろ！！」

「うっ……」

万丈目

LP4000↓3100

十代

LP4000↓3100

「だが、フレイム・ウィングマンの効果発動！！このモンスターが戦闘でモンスターを破壊した時、相手はそのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける！！」

「な、なんだと！？うわあああああっ！！」

万丈目

LP 3100 ↓ 1900

「エアーマン、ザ・ヒート、フォレストマンでダイレクトアタック
!!」

「ば、馬鹿な!! この俺様が、オシリスレッドごときにいいいい!!」

万丈目

LP 1900 ↓ 1000 ↓ 2100 ↓ 3100

「さあ、俺の勝ちだぜ!! アンティカードを渡して貰おうか!!」
「くっ……わかつ「ガードマンが来るわ!!」もし校則で禁止されているアンティデュエルがやっていたということがバレたら、退学になるかもしれないわよ!!」チイツ、今日の所はこれでお預けにし
といつやる!! 次こそは必ず、お前を倒してやるからな!!」

あ、逃げた。

「とりあえず、俺達もここから逃げようぜ」

「うん……それがいいね……」

「ああ、そうだな!!」

「……ふう……」

外に出て、一息つく。結構走ったので、疲れてしまったから。

「……先程は、我が愚弟が迷惑をかけたな。もし良ければアンティの代わりにはならないかもしれないが、貰って欲しくないだろうか」

そう言って、カードを渡して来る万丈目似の男。個人的には結構気に入った。

しかし……我が愚弟？となると、この男は――

「万丈目の、兄なのか？」

「ああ。俺は、万丈目順。不本意だが、あの愚弟の兄と言う事になっている」

会話を交わしてわかった。こいつは、漫画版の万丈目だ（……………）。

なんでもかは知らないが、おそらくこの世界はアニメと漫画が少しだけ融合した世界らしい。この明らかに凛々しい万丈目がその証拠だ。

「いや、アンティは要らない。それよりも一つ教えてくれ。お前は、自らに枷をしいて戦っているか？」

「……ッ！！何故その事を！！」

ビンゴ。やはりこいつは、光と闇の竜を封印している時の万丈目だ。となると、こいつは強くなるな。下手をすると、原作のカイザーなんか相手にならないくらい強くなるぞ？なんてったって、主人公を下しているんだから。

まあ、いいか。今はとりあえずさっさと帰って綾香と戯れよ。

「じゃあ、帰りに一つ忠告だ。さっさとそのくだらない枷を解け。お前の相棒はお前と共に戦いたがってるし――それに、今のお前では俺達どころか十代にすら勝てないだろうしな」

「――どこまで知っているかは知らんが、俺は自分の力だけでこの学校のトップをとると決めた。だから、俺はアイツを封印したまま、

十代も貴様も倒す!!」

「そうか。なら、楽しみに待ってるぜ、万丈目順」

俺のこの言葉を最後に、万丈目は静かに手を振って離れていった。にしても、いい奴だ。嫌々ながらもあの馬鹿のやらかした事を拭ったり、その心意気もあるが、何よりも気に入った。

今度あいつと決闘する時は、光と闇の竜をせおうと心に決め、俺は綾香といやらしい事をするために部屋に戻る事にした。

あれ？万丈目って……双子……？（後）（後書き）

部屋に戻った後（R15）

「ふっふあ、も、もう限界……お願い、指だけじゃ我慢できない……」

「で、どうして欲しい？しっかりと口で言わなきゃ伝わらないぜ？」

―以下検閲済み―

呼び出し？無視して綾香と戯れたいな。(前書き)

明日香涙目(笑)

呼び出し？無視して綾香と戯れたいな。

「……今日は翔のラブレター事件の日だけど……」

「無視する」

「……私の裸が、見られるかもしれないのに……？」

「よし、あの屑を退学させに行くか」

「……計算通り……」

あれ？何かがおかしい。

というわけで、俺達は今明日香達と対峙しています。

場所は原作で十代と明日香が戦った孤島。こんな無駄な時間があったら、少しでも綾香と戯れてたいのにな……

どうも綾香は原作キャラが俺に負けるのが見たいらしい。困ったもんだ。

「翔君を助けたかったら、私と貴方達のどちらかが戦って勝つことね」

「いや、待ってくれ。俺はあの屑を助ける為に来たんじゃない。むしろ退学させる為に来たんだ」

「……どういこと？」

「何、話は簡単だ。綾香はお前達と一緒に風呂に入ってたんだよね？」

「え、ええ」

「なら、俺の綾香の裸を見た可能性もあるんだよね？」

綾香の裸を見た可能性が少しでもある奴は殺す。主に社会的に。

「誤解ッス!! そんなことはしていないッス!!」

「黙れ。現在お前のせいで俺達はこんな所にいるんだ。その事を謝ろうともしない奴を助ける義理なんてない———とやりたい所だがどうも綾香は俺がお前を倒す所が見たいようだな。来い。闘つてやるよ」

「明日香様!! そんな大口叩く奴、ボッコボコにしてやって下さい!!」

何やら取り巻きが五月蠅いが無視だ。今回のデッキの前では明日香は何も出来ずに終わる。

「……いいわ。やってあげる。いくわよ!!」

「^{デュエル}決闘!!」

「先攻は譲ろう。レディファーストだ」

「そう?じゃ遠慮無く、ドロー!! 私は、エトワール・サイバーを攻撃表示で召喚!! カードを一枚伏せ、ターンエンド!」

明日香

LP4000

場

エトワール・サイバー（攻撃力1200）

伏せカード二枚

手札6枚↓3枚

やべえ、テンプレ乙。

「俺のターン、ドロー!! 俺は、ガガガマジシャンを守備表示で召喚!! さらに、このモンスターの効果でこのモンスターのレベルを

2とする！！魔法カード、孵化を発動！！フィールド場のモンスター1体をリリースし、デッキから、そのモンスターのレベルより1大きい昆虫族モンスター1体をフィールドに出す事が出来る！！現れる、アルティメットインセクトLv3！！さらに、速攻魔法地獄の暴走召喚を発動！！相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。俺はアルティメットインセクトLv3を二体攻撃表示で特殊召喚する！！」

鏡夜

LP4000

場

アルティメットインセクトLv3×3（攻撃力1400×3）

「だが、相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。さあ、エトワール・サイバーを限界まで出せ」
「……わかったわ」

明日香

LP4000

場

エトワール・サイバー×3（攻撃力1200×3）

「カードを二枚伏せてターンエンド」

鏡夜

LP4000

場

アルティメットインセクトLv3（攻撃力1400）

伏せカード二枚

手札6枚↓1枚

「私のターン、ドロー！！（くっ、融合が来ないわね）私は、ブレード・スケーターを攻撃表示で召喚！！このまま攻撃しても相打ちになるだけね……カードを一枚伏せてターンエンドよ」

明日香

場

エトワール・サイバー×3（攻撃力1200×3）

ブレード・スケーター（攻撃力1400）

伏せカード一枚

手札4枚↓2枚

「俺のターン、ドロー、スタンバイフェイズ時にアルティメットインセクトLv3の効果を発動。このカードを墓地へ送り、アルティメットインセクトLv5を特殊召喚する。進化しろ！！アルティメットインセクトLv3！！」

鏡夜

場

アルティメットインセクトLv5×3（攻撃力2300×3）

「さらに、魔法カード強欲な壺を発動。デッキからカードを二枚ドロー！！王虎ワンフーを攻撃表示で召喚！！永続魔法、強者の苦痛を発動！！相手モンスターは攻撃力がLvの数×100ポイントダウンする！！」

鏡夜

場

アルティメットインセクトLv5×3（攻撃力2300×3）

王虎ワンフー（攻撃力1700）

永続魔法強者の苦痛

「バトルだ！！アルティメットインセクトLv5でブレード・スクーターとエトワール・サイバー三体に攻撃！！」

「リバースカードオープン、カウンター罠、攻撃の無力化！！相手の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！！」

「ほう、防いだか。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

鏡夜

LP4000

場

アルティメットインセクトLv5×3（攻撃力2300×3）

王虎ワンフー（攻撃力1700）

永続魔法強者の苦痛

伏せカード3枚

手札2枚↓0枚

「私のターン、ドロー！！（くっ、はやくあの虫かワンフーをなんとかしないと……！！）私は、魔法カード融合を発動！！場のエトワール・サイバーと場のブレード・スクーターを融合！！現れる、サイバー・ブリーダー！！」

「この瞬間、王虎ワンフーの効果発動！！攻撃力1400以下のモンスターが召喚された時、そのモンスターを破壊する！！」

「でも、サイバー・ブリーダーの攻撃力は——まさか！？」

「アルティメットインセクトLv5の効果だ。アルティメット・インセクトLv3の効果で特殊召喚した場合、このカードがフィールド上に存在する限り、全ての相手モンスターの攻撃力は500ポイ

ントダウンする。俺の場には三体存在するから合計1500ポイントダウンする。さらに、強者の苦痛により、攻撃力はレベル×100ポイントダウンする。よって、サイバー・ブレーダーの攻撃力は「0……」

「そういうことだ。さらばだ、サイバー・ブレーダー」

無惨にも破壊されていくサイバー・ブレーダー。エースモンスターがこんな方法で破壊され、明日香の精神もかなりやられたみたいだ。

「……クッ!! 私は、モンスターをセット!! エトワール・サイバーを守備表示に変更し、カードを二枚伏せて、ターンエンドよ!!」

明日香

LP4000

場

エトワール・サイバー×2（守備力1500）×2

セットモンスター×1

伏せカード二枚

手札3枚↓1枚

それでも、まだその目は希望の光を宿している。まだ勝機があるのか、伏せた二枚のカードに希望を託したのか。

「俺のターン、ドロ」

だが、それもここまで。このターンで全て終わる。

「スタンバイフェイズ時にアルティメットインセクトLv5の効果発動。このカードを墓地に送り、アルティメットインセクトLv7を特殊召喚する。進化しろ、アルティメットインセクト達よ!!」

鏡夜

LP4000

場

アルティメットインセクトLv7×3（攻撃力2600×3）

王虎ワンフー（攻撃力1700）

永続魔法強者の苦痛

伏せカード三枚

さらに凶悪になった虫達が姿を表す。こいつらの効果は進化前の効果を遥かに凌ぐ。

「進化したアルティメットインセクトの効果は、相手モンスター全ての攻撃力と守備力を700ポイントダウンさせる。俺の場には三体いるから2100ポイントダウンだ」

明日香

LP4000

場

ブレード・スケーター（守備力1500↓0）

セットモンスター×1

伏せカード二枚

「魔法カード、天よりの宝札を発動。互いのプレイヤーは、デッキから手札が6枚になるようにカードをドローする」

お互いに手札を補充する。何かいいカードを引いたのか、明日香に顔に笑みが浮かぶ。

―――が。

「手札から、ハリケーンを発動。互いの魔法・罠ゾーンにあるカードを全て手札に戻す」

「そんな!？」

生憎だが、わざわざ次のターンにもっていく気はない。ここですとと終わらせる。

「それにチェーンして罠カード、メテオ・レイン。このターン、俺のモンスターは貫通能力を持つ」

「……私の負け、ね……」

「ああ。だが、まだ終わらん。魔法カード、抹殺の使徒。その伏せモンスターをゲームから除外しろ」

「……………」

無言のまま、明日香はセットモンスターをポケットに入れた。そのモンスターはマシユマロン。もし俺がメテオ・レインを使っていなかったら次のターンにもっていかれただろう。

「全モンスターでダイレクトアタック!!」

「キャアアアアアッ!!」

明日香

LP 4000 ↓ 1400 ↓ 1200 ↓ 3800 ↓ 5500

だが、これが現実だ。

「鏡夜……」

「綾香。どうだった、俺の決闘は？」

「今回も、凄く格好良かった……でででも、勘違いしないで……私が毎回、鏡夜の闘ってる姿を注視してるとか、そんなわけじゃ、

ないんだから……」

聞いてもないことを暴露してくれる我が婚約者。いつも思うが可愛すぎる。

「……ありがとな、お姫様」

「……馬鹿……」

でも、今は人が見ているので過ぎた事は出来ないから、欲望を無理やり抑えつけて頭を撫でるに留めておいた。

「ちよつと!!この決闘は無効よ!!」

だが、どんな世界にもいちゃもんをつけて来る奴はいるものだ。

「無効って、どういう意味だ?俺はルールに違反した記憶は無いが」

「あんな卑怯なカード使ってるんだから、無効に決まってるじゃない!!」

駄目だ。俺の話を聞く気はないようだ。

無視して綾香と帰ろうとした俺であったが、綾香の怒りのオーラを感じて止めた。

「……ふざけないで……。ルールを守ってるのに、反則呼ばわりされる覚えは鏡夜には……ない……」

「はあ?アンタ、そいつの肩を持つわけ?」

「私の婚約者だし……それに、枕田、アンタの言動にイラついた……ボコボコにしてあげる……」

「いいわ。私も、ちょうどイラついてたのよ。相手になってあげるわ!!」

「「決闘^{デュエル}!!」(……)」

……いつの間にか、当事者を無視して話が進んでる……
まあいっか。怒ってる綾香も可いし。

呼び出し？無視して綾香と戯れたいな。（後書き）

今回使用したデッキはアルティメットワンフーです。いや、本当に鬼畜デッキですね（笑）

アルティメットインセクト達わ強者の苦痛で相手の攻撃力を奪い、ワンフー先生による殲滅……いや、原作キャラでこのデッキに勝てる人いるんだろうか。

カイザー（笑）を除いて。

では次回、綾香の二つ目のデッキを披露したいと思うので、もし良ければお読み下さい。

大人しい女の子は怒らせると怖い。でも怒っている綾香は可愛い。(前書き)

……当然のようにワンキル(笑)

大人しい女の子は怒らせると怖い。でも怒っている綾香は可愛い。

「私のターン、ドロロー!!! 私は、バードフェイスを攻撃表示で召喚!!! カードを二枚伏せて、ターンエンドよ!!!」

枕田ジュンコ

LP 4000

場

バードフェイス（攻撃力1600）

伏せカード二枚

手札6枚↓3枚

あの伏せカード、恐らく攻撃反応型罠だろうな。なんか笑ってるし。でもな、綾香のデッキは、基本的に罠が関係ないぞ？

「私のターン、ドロロー……魔法カード、強欲な壺を発動……デッキから、カードを二枚ドロロー……魔法カード、天使の施し……三枚ドロローして二枚捨てる……」

「ちよっと!!! 大口叩いていたわりに手札交換ばかりなわけ？」

駄目だ、あの女墓地肥やしという物をわかってない。

それに引き換え綾香は薄く、俺以外の人間にはわからないくらい、しかし確実に笑っている。

「私は、マンジュ・ゴッドを召喚……効果で、儀式魔法高等儀式術を手札に加える……」

あ、詰んだなこれは。

「儀式魔法、高等儀式術を発動……手札の儀式モンスター1体を選択し、そのカードとレベルの合計が同じになるように自分のデッキから通常モンスターを墓地へ送る……私は、終焉の王デミスを選択し、デッキから甲虫装甲騎士とネオバグを墓地に送り、デミスを儀式召喚する……表れて、終焉の王よ……」

綾香

LP4000

場

終焉の王デミス（攻撃力2400）

「デミスの効果発動……ライフを2000払う事により、このカード以外のフィールド場全てのカードを破壊する……終焉の嘆き……」
「ちょ、そんなカードあり!？」

枕田ジュンコ

LP4000

場

なし

綾香

LP4000↓2000

場

終焉の王デミス（攻撃力2400）

破壊された罫は聖バリと攻撃の無力化か。全くもって無駄な事を。それにしても完全に詰んだな。あのデッキじゃ、ゴーズやバトルフエーダー、速攻のかかしが入っている様子もないし。
おまけに昆虫族が墓地に二体以上送られているからな。

「墓地の二体の昆虫族を除外して、デビルドーザーを特殊召喚……さらに、装備魔法巨大化をデビルドーザーに装備……元々の攻撃力を倍にする……」

こうなるわけだよ。

俺のアルティメットワンフーも酷いが、このデミスドーザーもえげつない。まあ、高等儀式術やデミスに制限かけてないこの世界が悪いんだけど。

「デミス、デビルドーザーでダイレクトアタック……」

「キャアアアアアッ!!」

枕田ジュンコ

LP4000↓1600↓4000

めでたくワンキル達成、って言った所か。

「そ、そんな……」

「カードが卑怯な訳じゃない……全てはそれを扱うプレイヤーの腕次第……それがわからないのなら、貴方は一生私や鏡夜に勝てない……」

そう吐き捨て、綾香は俺の方に駆け寄ってくる。その姿があまりに愛しくて、俺は抱き締めてしまった。

「ちょ……ここ、外……」

「見せつけてやればいいだろ？俺達がどれだけ愛しあっているかを。それに、俺の為に怒ってくれて、嬉しかった」

「……馬鹿……」

お馴染みの言葉と共に、綾香も俺の腰に手を回してくる。その間、隣で

「サンダー・ジャイアントでダイレクトアタック!! ボルテック・サンダー!!」

「きゃあああああっ!!」

十代と明日香の戦いが行われていた。

大人しい女の子は怒らせると怖い。でも怒っている綾香は可愛い。(後書き)

もはや説明不要なデミスドーザー。ワンキルデッキの代表格ですね
(笑)

感想や案の方を送って頂けると作者の更新スピードが上がります(笑)
なので送って頂けると嬉しいです。

では次回。『月一試験』の舞台でお会いしましょう。
いつになるかわかりませんが。
こんな駄作者で大丈夫か？

やはり漫画版万丈目は強い。(前書き)

今回は決め台詞は無しです(笑)

やはり漫画版万丈目は強い。

月一試験。BWDばかりの試験をとつと終わらせ、空き時間に今日の夜はどんなプレイで綾香と戯れようかと考えながらすごし、当然のように新パックなど買うわけもなく、綾香とダラダラ過ごし、実技試験。

十代の相手は原作通り万丈目。そして、俺の相手は――

「漸くだな、順」

「ああ。だが、遠慮はしない」

万丈目『兄』、つまりは漫画版万丈目であつた。

「俺を徹底的に叩き潰す気で来い。じゃないと――気がついたら負けていることになる」

「それくらいわかっている。俺は、今持てる全力で貴様を倒す!! 行くぞ!!」

「「決闘（デュエル!!）」」

「先行は貰う。俺のターン、ドロ―!! 永続魔法、未来融合―フューチャー・フュージョン―を発動!! F・G・Dを選択し、デッキからダークエンド・ドラゴン、ライトエンド・ドラゴン、真紅眼の飛竜、真紅眼の黒竜、ミンゲイドラゴンを墓地に送る!!」

この世界だとダークエンドとライトエンドは通常モンスターなんだよな。本当になんでシンクロモンスターになったんだろ。

「永続魔法、一族の結束を発動!! 墓地の種族が一種類である時、

俺のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする!!」

「だが、お前の場にモンスターは……なるほど、いいコンボだ」

ほう。俺の戦術を理解したか。別に構わないけど、コイツあの万丈目とは格が違う。

まあ、負けるなんて思っていないけど。

「カードを二枚伏せ、ターンエンド。この時、墓地の真紅眼の飛竜の効果発動。通常召喚を行っていない時、墓地のこのカードを除外する事でデッキからレッドアイズと名のつくモンスター一体を特殊召喚出来る。現れる、真紅眼の黒竜!!」

鏡夜

LP4000

場

真紅眼の黒竜（攻撃力2400↓3100）

伏せカード二枚

手札6枚↓2枚

「俺のターン、ドロー!!」

さあ、この布陣をどうやって崩す? 万丈目順!!

「俺は魔法カードクロス・ソウルを発動。相手モンスター一体を自らの生贄にすることが出来る。――が、そのターンバトルフェイズは行えない。俺は、お前の真紅眼の黒竜を生贄に捧げ、現れる!! タイガードラゴン!!」

なる程。考えたな。万丈目。

「タイガードラゴンの効果発動！！ドラゴン族モンスターをリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した時、相手の魔法＆罠カードゾーンにセットされたカードを2枚まで破壊する事ができる！！俺は、お前の未来融合と一族の結束を破壊する！！」

「だが甘い！！カウンター罠、天罰！！手札を一枚コストにし、相手モンスターの効果を無効にして破壊する！！」

天から落ちてきた雷が、効果を発動しようとしていたタイガードラゴンを容赦なく打った。

「くっ、俺は魔法カード早すぎた埋葬を発動！！ライフを800ポイント支払い、墓地のモンスター一体を特殊召喚する！！現れる、タイガードラゴン！！」

万丈目

LP 4000 ↓ 3200

場

タイガードラゴン（攻撃力2400）

「カードを二枚伏せ、ターンエンド！！」

万丈目

LP 4000 ↓ 3200

場

タイガードラゴン（攻撃力2400）

伏せカード二枚

手札6枚 ↓ 1枚

「俺のターン、ドロー……ほう」
手札がいい。しかけてみるか。

「スタンバイフェイズ時に墓地のミンゲイドラゴンの効果発動！！自分の場にモンスターがおらず、相手の場にモンスターがいる時、墓地から特殊召喚出来る！！現れる、ミンゲイドラゴン！！」

表れる生贄。手札もいいし、仕掛けるには持って来いだ。

「俺はミンゲイドラゴンを除外し、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！！さらに、効果で墓地の真紅眼の黒竜を特殊召喚する！！魔法カード、天よりの宝札を発動！！互いのプレイヤーは、手札が6枚になるようにカードをドローする！！」

原作最強のドローカード。使い勝手が良すぎて困る。

「真紅眼の黒竜をリリースし、真紅眼の闇竜を特殊召喚！！さらに、魔法カード手札抹殺を発動！！互いのプレイヤーは、手札を全て捨て、その数だけドローする！！」

これでまた墓地にカードがたまる。そして、手札には……ようやく来たか。

「魔法カード、コストダウンを発動！！手札を一枚捨て、手札のモンスターカードのレベルを2下げる！！さらに、魔法カードクロス・ソウル！！効果は説明不要だな。俺は、万丈目のタイガードラゴンをリリースし、我が場に姿を表せ！！光と闇の竜！！」

鏡夜

LP4000

場

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻撃力2800）
真紅眼の闇竜（攻撃力2400↓4800）

光と闇の竜（攻撃力2800）
手札4枚↓2枚

「ら、光と闇……」

呆然としているな。これだけでも召喚したかいがある。

「カードを二枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン、ドロロー!!」

この状況。逆転は難しいにも関わらず、まだ順は諦めていない。

さあ、手札は七枚。どうするんだ？万丈目!!

「俺は、魔法カード、強欲な壺を発動する!!」

「光と闇の効果、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にしてこのモンスターの攻撃力と守備力は500ポイント下がる。無効だ」

「それにチェインして速攻魔法、収縮を発動!!光と闇の元々の攻撃力を半分にする!!」

なる程。そう来たか。流石は相棒、対処の仕方もしっかりわかっていとうわけか。

「魔法カード、大嵐を発動!!」

「無効だ」

「魔法カード、聖水の弊害を発動!!」

「無効だ」

わざわざ強欲な壺を捨ててまで攻撃力を下げに来たか。これは少々拙いか？

「俺は、魔法カード二重召喚を発動！！」
「無効だ」

これで四回目の発動。守備力が500ポイントを切った為、無効効果が無くなった。

「手札から、天よりの宝札を発動！！」
「何いっ！！？」

このタイミングでそれを使うか！？なんてチートドローだよ！！

「俺はミンゲイドラゴンを召喚！！さらに、ミンゲイドラゴンを生け贄に捧げ、ダークエンド・ドラゴンを召喚！！」

ダークエンドって……不味い、不味すぎる！！

「リバースカードオープン！！神の宣告！！ライフを半分払い、モンスターの召喚、特殊召喚を無効にして破壊する！！」
「なんだと！？」

鏡夜

LP 4000 ↓ 2000

場

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻撃力3600）

真紅眼の闇竜（攻撃力5600）

光と闇の竜（攻撃力2000 ↓ 1200）

あ、危なかった……光と闇の竜のデメリット効果で負ける所だった

……

「…………くっ、カードを一枚伏せ、ターンエンドだ……」

万丈目

LP 3200

場

伏せカード一枚

手札7枚↓3枚

「俺のターン、ドロー」

さて。ダークエンドの登場には少し驚いたが、このターンで終わらせるか。

「スタンバイフェイズ時に未来融合の効果で、F・G・Dが融合召喚される。表れろ、F・G・D」

降臨する攻撃力5000の怪物。あの伏せカードが激流葬じゃなくて良かったよ、本当に。

「メインフェイズにリバーズ罠、あまのじゃくの呪いを発動。このターン、攻撃力、守備力を下げる効果は上げる効果へと変わる」

鏡夜

LP 2000

場

光と闇の竜（攻撃力4800↓4000）

真紅眼の闇竜（攻撃力5600↓0）

F・G・D（攻撃力5000↓4200）

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻撃力2800↓200）

00)

「なんだと!?(俺のミラーフォースが!!)」

あの様子だとあの伏せカードは聖バリか。最後まで油断ならない奴だ。

だが、これで終わりだ。

「バトルフェイズ、光と闇の竜で攻撃。ダーク・ハプティズム!!」
「く……そおそお!!」

万丈目

LP3200↓1600

デュエルが終わった瞬間、観客達から歓声が沸き上がる。俺自身、かなり危ない戦いだった。天罰、神の宣告。どちらか一つでも抜けていたら負けていただろう。特に神の宣告。

「……クッ!!夜光鏡夜、今回の敗北は俺の慢心による物だ。だが、次は必ず勝つ!!俺の光と闇と共に!!」

「ああ、その時を楽しみに待ってるよ、順」

俺の言葉には何も返さず、ただ無言のまま帰って行く順。次は、さらに強くなるんだろう。

まあ、今はそんな未来の事はどうでもいい。

「鏡夜、危なかったね……」 「ああ。凄く危なかった。心配してくれてたのか?」

「そんな事、するわけない……だって、私は鏡夜が必ず勝つって、信じてたから……」

今は強敵を倒した満足感があればいいと思い、綾香の番が来るまで彼女と戯れる事にした。

やはり漫画版万丈目は強い。(後書き)

番外編、綾香の実技試験

「私のターン、ドロ―…私は、連弾の魔術師を攻撃表示で召喚…
：魔法カード、昼夜の大火事を二枚、火炎地獄を一枚発動…：貴方
に2600と連弾の魔術師の効果で1200ダメージ…：さらに、
魔法カード強欲な壺…：デッキからカードを二枚ドロ―…：この瞬
間、連弾の魔術師の効果で400ダメージ…：」

「うわああああっ!!」

モブ

LP4000↓-200

うわ、バーン強い(笑)

今回のデッキは光と闇の竜と真紅眼の混合デッキです。

天罰がかなり多い理由は自分の光と闇の効果が無効化する為です。

実は、順の手札には飛竜天舞があったので、神の宣告がない場合負けてたという。

次回は決闘無しかもしれませんが、読んでいただくと駄作者は嬉しいです。

後感想も送っていただけると狂喜乱舞します!!

なんかウザい虫がついた。(前書き)

何時もよりクオリティが低いです。すみません。

この世界やタガラスって禁止でしたっけ？

なんかウザい虫がついた。

「鏡夜、話を聞いて欲しい……」

「ん？どうしたんだ？」

「最近、ストーカーらしい人がついた……」

「くわしく聞かせろ」

俺の綾香に虫がついた……だと……！？

「なる程……つまり、最近ずっと人に見られている感じがする、と」

「うん……」

許さん。綾香を注視していいのは俺だけなのに！！

「どう社会的にぶち殺してやろうか……」

「鏡夜、思考が漏れてる……」

「おっと、やってしまった」

つい、綾香関係だとなってしまうな……何時もはもう少し思考を隠したり出来るんだけどな。

まあ、綾香に隠す事なんて無いんだけど。俺は綾香を全身全霊で愛しているし。

「だ、だから思考が……」

「悪い。どうもお前との会話だと思いがだだ漏れになるみたいだ」

怒られてる最中に思うのもアレだが、怒っている綾香も焦っている綾香も額縁に入れて飾っておきたい位可愛いな。

「……馬鹿……馬鹿……馬鹿……」

ただそれだけを連呼しながら、俺をばかばかと殴りつける綾香。それを止めず、俺はただされるがままにする。

痛く無いし、真っ赤になって俺を殴りつける綾香の顔も可愛いし。

「……御免。つい、かっとなっちゃった……」

「気にするな。よし、俺も動くとするか」

俺の婚約者に手を出しかけたんだ。ただで済むと思うなよ!!

「一体どういうつもりなんだ!!」

「それはこっちの台詞だ。俺の綾香にストーキング行為をしゃがって……ただで済むと思うなよ!？」

「五月蠅い!!俺が聞きだいののは、どうして俺が退学の危機に陥っているのかということだ!!」

「当たり前だ。ストーキング行為は立派な犯罪だ。普通なら退学のところをあの手——もとい鮫島校長のおかげでチャンスが与えられたんだ。感謝しろ」

あれから僅か二日。俺は伝手を頼って一流のクラッカー集団と組み、

ストーカーを炙り出すことに成功した。

アカデミアは一応学校。多分隠しカメラくらいは設置してあると思っただけ――予想通り。その中にはしっかりとストーカーの姿が映っていた。

それが自称エリート（笑）のブルー生徒だったので、情報が手に入った日は俺と綾香で少し笑ってしまった。

それはともかく、その姿から個人情報炙りだし、今退学させようとしている。

本来なら退学モノだと思うのだが、あの狸校長のせいで、何故か俺とデュエルする事に……どういふことさ。

まあ、いいや。叩き潰してとっとと豚箱に入って貰おう。

「いくぞ屑！！！ 覚悟はいいか！！」

「誰が屑だ！！」

「「決闘^{デュエル}！！」」

「先攻は俺が貰うぞ、屑！！」

「誰が屑だ！！」

「ドロー！！ 俺は、手札から苦渋の選択を発動！！ 俺がデッキから選ぶのは、ゾンビキャリア二枚、シャインエンジェル二枚、ネクロ・ガードナーだ！！」

あんな屑の話を聞く気なんて欠片もない。綾香に手を出していいのは俺だけだ。それを知ってさっさと散れ。

「ならネクロ・ガードナーを手札に加えろ！！」

「ネクロ・ガードナーか。まあいい。どれを選んでも変わらんさ。

俺は、墓地のゾンビキャリアとシャインエンジェルをゲームから除

外し、表れる！！カオス・ソルジャー——開闢の使者——！！」

「な、なんだと！？」

表れる断罪の騎士。今回はコイツでケリをつける。

「手札から強欲な壺を発動。デッキからカードを二枚ドロ……ふむ」

どうけりをつけようかな……迷うな。

「俺は、キラートマトを守備表示で召喚。カードを二枚伏せ、ターンエンドだ」

鏡夜

LP4000

場

カオス・ソルジャー——開闢の使者——（攻撃力3000）

キラートマト（守備力1100）

伏せカード二枚

手札6枚↓2枚

「くっ、俺のターン、ドロ——！！」

さあ、どう出やがろうとお前の未来は死あるのみ——！！

「俺は、モンスターをセット——！！カードを二枚伏せ、ターンエンドだ——！！」

ブルー生徒

セットモンスター×1

伏せカード二枚
手札6枚↓3枚

なんだ。あまりに普通過ぎて笑えてきた。

「俺のターン、ドロー」

面倒だし、さっさと終わらせ。こんな屑に裂いてる時間があつたら、他の事をやりたいし。

「魔法カード、天使の施しを発動。カードを三枚引いて二枚捨てる。墓地の三体の闇属性がいるので、こいつを特殊召喚する。来い。ダークアームドドラゴン」

出ましたダムド。これでさっさとけりをつけよ。

「ダークアームドドラゴンの効果発動。墓地の闇属性モンスター一体を除外する事で、フィールドに存在するカード一枚を破壊出来る。俺は、三体の闇属性モンスターを除外して、屑の場にあるカード三枚を破壊する」

「リバースカードオープン！！和睦の使者！！このターン、俺は戦闘ダメージを受けない！！」

「チッ、防いだか。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

鏡夜

場

カオス・ソルジャー ―開闢の使者―（攻撃力3000）

キラートマト（守備力1000）

ダークアームドドラゴン（攻撃力2800）

伏せカード三枚

手札3枚↓1枚

「くっ、俺のターン、ドロー!!よし、フィールド魔法、天空の聖域を発動!!天使族モンスターでの戦闘ダメージが無くなる!!永続魔法、神の居城―ヴァルハラ―を発動!!その効果で、堕天使アスモディウスを特殊召喚!!バトルだ!!堕天使アスモディウスでダークアームドドラゴンに攻撃!!」

「リバースカードオープン、次元幽閉。相手の攻撃モンスター一体をゲームから除外する」

「なん……だと……?」

次元の裂け目に飲み込まれていくアスモディウス。除外なのでその厄介な効果は発動されない。

「くっ、ジェルエンデュオを守備表示で召喚!!ターンエンド!!」

ブルー生徒

ジェルエンデュオ（守備力0）

さあ、どう調理してやろうか!?

「俺のターン、ドロー!!魔法カード、天よりの宝札!!互いのプレイヤーは、デッキから手札が6枚になるようにカードをドロースる!!」

なんか屑がにやついているが、このターンで終わるんだぞ?

「手札から、魔法カード手札抹殺を発動!!手札を全て捨て、デッキからその数だけドロースる!!」

……よし、いい手札が揃った。

「リバースカード、リビングデッドの呼び声を発動！！墓地の墮天使スペルビアを特殊召喚！！さらに、スペルビアの効果で、墓地の天使族モンスター一体を特殊召喚出来る。表れろ、墮天使ゼラート！！さらに、ゼラートの効果発動！！手札の闇属性モンスター一体を捨て、相手フィールド場にあるカードを全て破壊する！！」

「な、なんだと！？」

無惨にも破壊されていくジェルエンデュオ。これで屑の場は何もない。

「終わりだ。しっかりと反省しながら逝け！！全モンスターでダイレクトアタック！！」

「う……うわああああっ！！」

ブルー生徒

LP4000↓2600↓—200↓—3200↓—6000

「鮫島校長。コイツをしっかりと豚箱に叩き込んでおいて下さい」

しっかりと釘を刺しておく。ああだこうだと理由をつけられるのが嫌だから。

「わかりました。ですが、それとは別で私からも一つ頼みがあるのですが」

「何ですか？俺はさっさと帰って綾香といちゃつきたいんですが」

「亮と戦ってくれませんか？」

「……は？」

٢٠٠٠

なんかウザい虫がついた。(後書き)

リクエストがあつた開闢を出してみました。実際にはスペルビアを入れない方が多分回ります。

闇属性軸なのでダムドがすごい出しやすくなります。光属性はコーリング・ノヴァとシャインエンジェル、マシユマロンくらいしか入ってませんが(笑)

闇の方は、クリッター、キラートマト、ダーク・グレフアーをしつかりと積んで、ダムドやクリエイター、カオス・ソーサラーを適当に混ぜとけばいいのではないのでしょうか。

後はおろかな埋葬など、デッキからカードを墓地へと送れるカードですかね？

次はキャラ設定、その次は丸藤亮戦へと行くので、見捨てないで下さい(土下座)

ミスが多い作者なので、見つけ次第報告をお願いします!!

キャラ設定（前書き）

なんか、書く度にクオリティが低くなっているような……

キャラ設定

主人公

夜光鏡夜（男）

年齢……16歳

身長……183

体重……57

髪の色……黒

瞳の色……黒

備考

気がついたら遊戯王GXの世界にいた転生者。とある理由で綾香と邂逅し一目惚れする。無視されたり、罵倒されたりしながらも時間をかけて仲良くなるがとある事件をきっかけにお互いに気持ちに気づき、婚約者となる。

決闘においては、ただの最強バカ。神がかった鈍感スキル、黄金律、チートドロ（十代未満）も兼ね備えている。

既に婚約指輪は送っており、式の準備も済ませている。綾香に手を出す者は誰であろうと社会的にブチ殺すby鏡夜

第6話までの使用デッキ

未来オーバー

お触れホルス

アルティメットワンフー

光と闇の竜

リクルーターカオス

ヒロイン

桜野 綾香

年齢……16

身長……143

体重……（秘密……）

B76 W46 H63

髪の色、瞳の色共に黒

クールツンな眼鏡っ子。転生者。とある事件によって鏡夜を意識していたらい、彼にデレまくっている。それ以外の人には基本的に無関心なスタンスをとり続けている。鏡夜が出会った当時は人を寄せ付けないような性格だったが、だいぶ丸くなったらしい。

鏡夜命な面があり、彼を馬鹿にする物は誰であろうと容赦ない。使用デッキからもわかるようにワンキル大好き。

宝物は、鏡夜から送られた婚約指輪。肌身離さず身につけている。

鏡夜は……私の物……by 綾香

第6話までの使用デッキ

連弾バーン
デミスドーザー

ユニーク10000、アクセス50000ありがとうございます。御座います。
駄作者の無限の剣製作者です。これから応援のほうをよろしくお
願います。

それでは、本編に入ります。
短いですがお楽しみいただけると嬉しいです。
ちなみに今回決闘はありません。

「全く、面倒な事になった……」
「まあ、しょうがない……校長先生直々のお願いだし……」
「それはそうだけどさ」

あの後、交渉のすえ俺と綾香の単位一年分でカイザー——丸藤亮と
の戦いをする事になった。
俺としては受ける気など全く無かったのだが、綾香が上目使いでお
願いして来たのと鮫島校長の条件がそこそ魅力的だったので俺は
受けることになった。

それにしても――

「完璧決闘者、ねえ」
パーフェクト

「本当に、笑えるよね……たかがあれごときで完璧なんて……」

綾香と共に笑う。その対象がああ程度で皇帝と言うアカデミアの低レベルなのか、完璧と言われて慢心している丸藤亮に対してなのか。あるいは、両方なのか。まあ、多分俺達は後者だろう。

丸藤亮のチートドロ―は確かに恐怖だ。だが、最善の手を常に出す事が出来るというのが必ずしも最良というわけではない。

まあ、今はそんな話はどうでも良くて。

「せっかくだし、砂浜の方に出掛けてみるか？」

「いいね……今から用意する……」

「ありがとな」

今は、綾香との日を楽しもう。

「夜の海も、ロマンチック……」

「だろ？」

夜七時。星が出て来る中、俺と綾香は砂浜に座って海を眺めていた。互いに、互いの手を握りあいながら。

「こうしてると、鏡夜と始めてあった時を思い出す……」

「ああ、あの時か。あの時の綾香は、色々と酷かったな」

「私も気にしてるんだから……言わない……」

「悪い、悪い」

始めて会った綾香の姿を思い出し、苦笑する。今の綾香とは似ても似つかない、それでいてどこかが似ている、そんな彼女の姿を。

「実は……ね……」

「ん？」

「会った時、酷いことをたくさん言っちゃったけど……私は、始めて会った瞬間から貴方の事が好きだった……」

「そっか。俺と同じだな」

「……え……？」

「俺も、始めてお前の顔を見た瞬間から、お前の事を愛してるんだよ。そうじゃなきゃ、わざわざ罵られながらもお前と一緒にいるわけ無いだろう？」

「……そう言えば、そうだね……」

「当たり前だ」

互いに笑いかけ、お互いの顔が近づき、

「……ずっと、私と一緒にいてね？」

「当たり前だろ」

俺と綾香の唇の距離が、零になった。

ここからは、俺達のプライベートタイムだ。描写することは出来ない。

ただ一つ言えるのは、朝日がやけに眩しかった、ということだけだ。

キャラ設定（後書き）

次はカイザーこと丸藤亮戦。よければお読み下さい。

禁止・制限を守っているのに卑怯と言われる筋合いはない。(前書き)

カイザー涙目(笑)

禁止・制限を守っているのに卑怯と言われる筋合いはない。

「……どういことだ？」

カイザーこと丸藤亮との決闘の日。

俺は予定されている場所——校内のデュエル場——に赴いたのだが、そこにいたのは、見渡す限りの人。

明らかに契約違反なので、俺は携帯を用いて鮫島校長に連絡する。

「確か非公開という約束では？」

「いやはや、すみません。私はそう手配したのですが、どうやら情報が漏れてしまったようです」

……この狸が。

「ああ、そうですか。では、契約違反の代償は後でいただきますね」
言いたい事だけを言い、俺は電話を切る。どうせ、その情報をあえて漏らしたに決まっている。

何故なら——俺が、奴らの言う『リスペクト決闘』をしていないだろう。

サイバー流の言う『リスペクト決闘』の実態は、カウンター罠やハズレを批判し、圧倒的な攻撃力で敵を叩き潰す決闘だ。

正直、俺はそれが嫌いで嫌いで仕方がない。決闘というものに卑怯や汚いといった言葉が介入する余地はないと思うし、それは結局は敗者の戯言であり、聞く価値のないものだ。

だが、サイバー流はそれを異端とし、リスペクトという綺麗事を言い続ける。弱い相手ならそれでも全く問題はない。だが、同格相手

にそんな事をしてみれば間違いなく負ける。原作で、エド・フェニックスと丸藤亮が戦って丸藤亮が負けたのも結局はそこから来た物だろう。

そして、問題なのはあのサイバー流師範である鮫島校長が、そんな考え方をしている俺が気に入らず、皇帝と呼ばれている丸藤亮と戦って負け、サイバー流は強いというのを他の生徒達に知らしめる為にこうしたんだろう。ようはていのいい見せしめだ。

まあ、負ける気は全くしないけどね。

「待たせたな、丸藤亮」

「いや、そこまで待ってはいない。では、始めるか」

「ああ、いいぜ」

「「決闘^{デュエル}!!」」

side 綾香

「ついに始まったわね、カイザーとイヴァン（雷帝）との戦いが」「イヴァン？何それ……」「鏡夜についた異名よ。なんでも、圧倒的な力を持ちながら妥協する事をせず、相手を叩き潰す事からつけられたらしいわ」

何？その厨二くさい異名は……

まあ、今はそこら辺はどうでもいい……鏡夜の決闘を見ないと……べべべべ別にいつもこんな風に何時もこんな風に鏡夜を注視し

ているわけじゃないんだから……

「俺のターン、ドロー。俺は豊穡のアルテミスを攻撃表示で召喚。カードを四枚伏せ、魔法カード命削りの宝札を発動。デッキから手札が五枚になるようにドローし、五ターン後に全ての手札を捨てる。ターンエンドだ」

鏡夜

LP4000

場

豊穡のアルテミス（攻撃力1600）

伏せカード四枚

手札6枚↓5枚

今回はそのデッキなの、鏡夜……
いつになく厳しいデッキを使ってる……

「俺のターン、ドロー!!」

「リバースカード、カウンター罠強烈なはたき落としを発動。ドロ―したカードを捨てる。さらに、豊穡のアルテミスの効果でデッキからカードを一枚ドローする」

「なんだと!?!」

大人しく手札を墓地に送るカイザー。あれは……多分リミッター解除かな……

最初にドローしたのがリミッター解除って、チートドローにもほどがある……

「くっ、俺は魔法カード、パワーボンドを発動!!」

「却下、だよ。カウンター罠、封魔の呪印を発動。手札のハリケー

ンを捨て、パワーボンドを無効にする。封魔の呪印の効果、このカードが無効にした魔法カードはこの決闘中使用出来ない」

「何っ!？」

さらにこれでパワーボンドが封じられた……そして、鏡夜の手札には……

「カードの効果のカウンター罠で無効にした事により、冥王竜ヴァンダルギオンを特殊召喚。さらに、ヴァンダルギオンの効果で、お前に1500ポイントのダメージを与え、豊穣のアルテミスの効果でデッキからカードを一枚ドロースる」

「く……やるな!!」

丸藤亮

LP4000↓2500

場は圧倒的に鏡夜が有利で、なおかつパワーボンドを封じこめた……でも、多分カイザーの手札には……

「俺はサイバー・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚!!」

サイバードラゴンが二枚はある……

「さらに俺は魔法カード天使の施しを発動!!デッキからカードを三枚引いて二枚捨てる!!俺は、サイバー・プロト・ドラゴンを攻撃表示で召喚し、速攻魔法フォトン・ジェネレーター・ユニットを発動!!フィールドのサイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン扱いのサイバー・プロト・ドラゴンを生贄に捧げ、サイバー・レーザードラゴンを攻撃表示で召喚!!」

……何?このチートドロ……

「サイバー・レーザー・ドラゴンの効果発動！！一ターンに一度、このモンスターよりも攻撃力か守備力の高いモンスターを破壊出来る！行け、サイバー・レーザー・ドラゴン！！ヴァンダルギオンを破壊しろ！！破壊光線フォトン・エクスターミネーション！！」
「……くっ、ヴァンダルギオン！！」

鏡夜は何もすることが出来ずヴァンダルギオンが破壊される……でも、あの鏡夜が何も出来ないなんてことが……まさか、そういうことなの……？

「サイバー・レーザー・ドラゴンで攻撃！！エヴォリューション・レーザーショット！！」

「その攻撃は通さん。カウンター罠、攻撃の無力化を発動。その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる。豊穡のアルテミスの効果、デッキからカードを一枚ドロ」

「くっ、ターンエンドだ！！」

丸藤亮

LP2500

場

サイバー・レーザー・ドラゴン（攻撃力2400）
手札6枚↓1枚

「俺のターン、ドロ。二枚目の豊穡のアルテミスを守備表示で召喚。豊穡のアルテミスを守備表示に変更し、カードを四枚伏せてターンエンドだ」

鏡夜

LP4000

場

豊穰のアルテミス×2（守備力1700）

伏せカード五枚

手札7枚↓2枚

「俺のターン、ドロー!!!魔法カード、強欲な壺を発動!!!デッキからカードを二枚ドロー!!!」

「ドローフェイズ時にリバーズ罠、サンダーブレイクを発動。手札一枚をコストにフィールド場のカード一枚を破壊する。俺は、サイバー・レーザー・ドラゴンを破壊」

「くっ……」

雷が放たれサイバー・レーザー・ドラゴンが破壊される………もうカイザーに出来ることは殆どない……

「俺はサイバー・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚!!!バトル!!!サイバー・ドラゴンで豊穰のアルテミスに攻撃!!!エボリューション・バースト!!!」

「カウンター罠、攻撃の無力化。バトルフェイズを終了させる。豊穰のアルテミスの効果で二枚ドロー」

攻撃の無力化が強欲な壺の効果を兼ね備えてる……アルテミス怖い……

「くっ、俺はカードを二枚伏せ、ターンエンド!!!」

「エンドフェイズ時に速攻魔法サイクロン。俺から見て右側の伏せカードを破壊」

破壊されたのは聖バリ……もう、私は驚かない……

丸藤亮

LP 2500

場

サイバー・ドラゴン（攻撃力2100）

伏せカード一枚

手札3枚↓0枚

「俺のターン、ドロー。魔法カード地割れを発動。相手フィールド場に存在する攻撃力が一番低いモンスターを破壊する。消えろサイバー・ドラゴン」

「リバーズ罠、アタック・リフレクター・ユニットを発動！！フィールド場のサイバー・ドラゴンを生贄に捧げ、来い、サイバー・バリア・ドラゴン！！守備表示！！」

「カウンターの罠、神の宣告。ライフを半分支払い、アタック・リフレクター・ユニットを無効にして破壊する。サイバー・ドラゴンはコストだから戻って来る、なんて事はない。残念だったな」

鏡夜

LP 4000↓2000

消えていくサイバー・バリア・ドラゴン……伏せカードもない……
鏡夜の勝ち、ね……

「これでTHE ENDだ。豊穣のアルテミス二体でダイレクトアタック」

「ぐああああああ！！」

丸藤亮

LP 2500↓700

会場内が静まり返ってる……当たり前かもしれないけど……
あそこまでひたすら使うカードを無効にされまくったら、何も出来ない……

そして……

「一つ教えてやるよ、丸藤亮」
「……なんだ」

あんなチートドロ―持ち相手に、鏡夜は――

「最初のターン伏せたカードに天罰が、次のターンに伏せたカードに二枚目の強烈なはたき落としがあった。恐らくどちらかでも使っていればもっと楽に勝てただろうな」

――徹頭徹尾、手を抜いていた……

「なん、だと……？それでは、何故それを使わなかった!!」
「……リスペクト、だっけか？お前達がやることは。それを、俺もやってみただけだ」

「手を抜くことと……リスペクトは……違う……!」

「やってることは同じだ。相手の全力が見たくて相手に本気を出させ、その上で相手を倒す。その、どこが手抜きじゃないんだ？」

「そ、それは……」

何も言えないカイザー……でも、そうなるのも当たり前……
だって……自分がやっている事と同じ事をされ、それを指摘されたのだから……

「俺は、今までこんな決闘を行って来たのか……対戦相手をリスペ

クトすらせず、見下すような決闘を……」

「――もし、変わりたいのなら、後で俺の部屋に來い。さてと、綾香、さっさと帰ろうぜ」

厳しい言葉とは一転して笑顔を私に向けてくれる鏡夜……

そんなのだから……

「しょうがない……どうしても、って言うなら、帰ってあげてもいい……」

私はつい、ツンツンしちゃう……

禁止・制限を守っているのに卑怯と言われる筋合いはない。（後書き）

丸藤亮

初期手札

サイバー・ドラゴン×3

パワーボンド

天使の施し

一ターン目

ドロー、リミッター解除を手札に加える。

パワーボンドを使いサイバー・エンド・ドラゴンを召喚。攻撃時にリミッター解除を発動。

魔法カード、天使の施しを発動。引いたカードはサイバー・プロト・ドラゴン、サイバー・ジラフ、フォトン・ジェネレーター・ユニット

次のターン、ドローしたカードは強欲な壺。使用し引いたカードは聖バリ、アタック・リフレクター・ユニット

以下詳細不明

……カイザーのパーフェクトチートドローきょうしつ状態ですね……
こんなん勝てるか。

今回の使用デッキは冥王パームです。カイザーを完全に封じて勝つにはどうしようか、と考えたらこうなりました（笑）

ギアル様、決め台詞使用させていただきました。ありがとうございます御座い

ました。

感想はいつでも募集中なので送っていただけると嬉しいです。ただ、作者のメンタルは紙より脆いので誹謗中傷だけはお止め下さい。お願いします。

次回更新も何時になるか解りませんが、見捨てず待っていてくれるとありがたいです!!!!

リスペクト？そんなもの犬にでも食わせておけ（前書き）

なんか長くなった（笑）

リスペクト？そんなもの犬にでも食わせておけ

side 十代

「すげえ……あのカイザーが何も出来ずに負けたぜ……」

今日にした決闘を見て、本当に鏡夜は強いんだな、って思う。

もし、あんなデッキと戦ったら……俺は、何も出来ずに負けるんだろうな。

あの封魔の呪印ってカウンター罠だけでも使われたら厄介だぜ。俺の融合が完全に封じられるからな。

それにしても、隣でぶつぶつ言ってる翔の奴……本当に大丈夫か？

side 十代 end

side 翔

「認めない……」

僕は、絶対に認めない。

お兄さんが、あんな卑怯なデッキに負けるなんて。

大体あんなデッキリスペクトの欠片も無いようなデッキじゃないか。そんなデッキを使ったんだから、今の勝負は無効だ。

そして、僕は夜光鏡夜、お前を認めない。

サイバー流を汚すような真似をし、封魔の呪印なんて卑怯なカウンター罠を使い、相手にリスペクトの欠片も無いようなデッキを使っ

たお前を認めない。

そうだよね？それで合ってるよね？お兄さん……

side 翔 end

side 亮

「俺は……今まであんな決闘を……」

今までのプレイングを思い返し、俺は昔の自分をぶん殴りたい気持ちでいっぱいになっていた。

何ガリスペクトだ。何が相手の事を考えたデュエルだ。

そんなもの……ただの自己満足じゃないか！！

そして――

「もう俺はこれ以上……あんな負け方はしたくないっ！！」

――今の俺を襲うのは、経験したことのない飢餓感。

負けたくない。

あんな負け方はしたくない。

勝ちたい。

相手を叩き潰して勝ちたい。

勝利が。

勝利が欲しい。

そんな色々な気持ちに見舞われながら、俺が目指していたのは――
イエロー寮の、夜光鏡夜の部屋。

――奴なら、その答えを知っているだろうか？

そんなことを考えながらもドアをノックすると、出て来たのは、奴ではなかった。

「……ようこそ、カイザー……」

「……お前は？」

出迎えたのは、夜光鏡夜ではなく、小さな、それでいて芯の強そうな、女子。

「早く来て……鏡夜が待ってる……」

「あ、ああ」

案内されるままについていくと、そこにいたのは、

「まさか、本当に来るなんてな。でも、歓迎するぜ。『帝王』丸藤亮」

スーツケースの中をいじっている俺を完膚なきまでに叩き潰した男の姿だった。

「……どうぞ……」

「ああ、ありがとう」

麦茶を持ってきたくれた女子に礼を言いながらも、夜光がこちらを向くのを待つ。

——しかし、両手で持てるかどうかのスーツケースが数個あるというのは、一体どうなんだろうか。

「……鏡夜が今カードを探しているのはカイザー、貴方の為……」

……なんだと？

「どういう意味だ？」

「そのままの意味……鏡夜は、素直に変わりたいと願った貴方の為に、わざわざ」

「そこまでにしてくれ、綾香。誉められると恥ずかしい」

そう言って、こちらを向く夜光。その手には、一つのデッキが握られていた。

「さあ、もう一度決闘しよう。あんな負け方はお前も嫌だろう？もう一度だけ、戦ってやるよ」

「お前が……教えてくれるのではないのか？」

「馬鹿を言うな。俺が与えてやれるのは、切欠だけだ。答えなんざ自分で見つけろ。――行くぞ」

「^{デュエル}決闘！！」

はい、どうも鏡夜です。しかし、俺が誘ったとは言え本当に来るとは思っていなかった。

「先行は俺が貰ってやる、ドロー！！」

まあ、来たからには全力で叩き潰すがな。

「俺は手札から未来融合―フューチャー・フュージョン―を発動！F・G・Dを選択し、デッキからドラグニティ―ブランクディストック、ドラグニティ―アームズ―レヴァテイン、SINTウルース・ドラゴン、ハウント・ドラゴンを二体墓地に送る！！そして、カー

ドガンナーを召喚!! 効果で、カードを三枚墓地に送り、このターンのみ攻撃力を1500ポイントアップさせる!!」

墓地に送られたのは、サイバー・ダーク三種。まさかこんなに早く落ちるなんてな。

「カードを二枚伏せ、ターンエンド。この瞬間、カードガンナーの攻撃力は元の400に戻る」

鏡夜

LP4000

場

カードガンナー（攻撃力400）

伏せカード二枚

未来融合―フューチャー・フュージョン―（F・G・D選択、0ターン目）

手札6枚↓2枚

「俺のターン、ドロ―!! 魔法カード、パワーボンドを発動!! 手札のサイバー・ドラゴン三枚を融合!! 表れる、サイバー・エンド・ドラゴン!!」

表れる三つ首の機械竜。いつも思うけどどんな詰め込みしてるんだ？

「サイバー・エンド・ドラゴンで攻撃!! エターナル・エヴォリューション・バースト!!」

「リバースカードオープン!! ガードブロック!! 戦闘ダメージを0にし、デッキからカードを一枚ドロ―する!! さらにカードガンナーの効果、このモンスターが破壊された時、デッキからカードを一枚ドロ―!!」

これで合計二枚のドロー。墓地肥やしも出来て手札補充も出来るガンナーはマジ強い。

「くっ、防いだか。俺はサイバー・ジラフを召喚し、このターンの効果ダメージを0にする。カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

丸藤亮

LP 4000

場

サイバー・エンド・ドラゴン（攻撃力4000↓8000）

伏せカード一枚

手札6枚↓0枚

「俺のターン、ドロー」

さて、ハンド・アドバンテージは明らかにこちらが上。相手の場には攻撃力8000がいるが、倒し方などいくらでもある。

「俺は魔法カード、テラ・フォーミングを発動し、竜の溪谷を手札に加え、フィールド魔法、竜の溪谷を発動！！」

表れる溪谷。このデッキのメインと言ってもいいカードの一つ。

「竜の溪谷の効果、手札を一枚捨ててドラゴン族モンスターを一枚捨てる。サイバー・ヴァリーを召喚し、カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

鏡夜

LP 4000

場

サイバー・ヴァリー（攻撃力0）

伏せカード三枚

未来融合―フューチャー・フュージョン―（F・G・D、一ターン経過）

手札5枚↓1枚

サイバー・ヴァリー。本当に便利なカードなのに攻撃力が全ての世界じゃあんまり使われない、優秀なカード。

絶対にゴ布林突撃部隊よりも優秀だと思うんだけどな。

「俺のターン、ドロー！！魔法カード、強欲な壺を発動！！デッキからカードを二枚ドローする」

……なんで手札0で毎回毎回それを引けるんだよ、こいつは！！
どんだけ詰め込んでるんだ！！

「サイバー・エンド・ドラゴンで攻撃！！エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

「リバースカードオープン、次元幽閉！！相手攻撃モンスター一体をゲームから除外する！！消えろ、サイバー・エンド・ドラゴン！！」

「なんだと！？」

次元の裂け目に飲み込まれ消えていくサイバー・エンド・ドラゴン。別にヴァリーの効果を使っても良いんだけど今の内に消して起きたかった。

理由？それは――

「カードを二枚伏せ、ターンエンドだ！！」

丸藤亮

場

伏せカード3枚

手札0枚↓0枚

「俺のターン、ドロー!!!」

出来るだけこいつを追いつめる為だ。

「スタンバイフェイズ時に未来融合の効果でF・G・Dを特殊召喚する。表れる、F・G・D!!!」

「リバーズカードオープン!!! 奈落の落とし穴!!! F・G・Dを除外する!!!」

除外されるF・G・D。別に問題ないけどな。

「魔法カード、強欲な壺を発動。デッキからカードを二枚ドロ―。カードガンナーを召喚し、効果発動。デッキの上から三枚を墓地に送る」

落ちたたのは、聖バリ、竜の溪谷、サイバー・ヴァリー。少し痛いけどまあ問題ない。

「サイバー・ヴァリーの効果、このカードと自分フィールド場のモンスター一体、カードガンナーを除外して二枚ドロ―」

……来たか。来るのが遅いが仕方ない。

「魔法カード、サイバー・ダーク・インパクト!!!を発動!!! 墓地のサイバー・ダーク・ホーン、サイバー・ダーク・キール、サイバー・

ダーク・サイバー・ダーク・エッジをデッキに戻し、降臨せよ!!
鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン!!」

手札を補充しまくってようやく出せたこのデッキの切り札。最強クラスの効果を誇る。

「なんだ、その禍々しいモンスターは……」

ああ、そういえば知らないんだっけ、裏サイバー流を。

「こいつは裏サイバー流デッキの切り札、サイバー・ダーク・ドラゴンだ」

「そんなサイバーモンスター、俺は知らない!」

「だから言っているだろ、裏サイバー流デッキ、だとな」

「……どういう意味だ?」

……こいつ、鈍いな。

「裏サイバー流とは、リスペクトを主とする表サイバーとは違う、勝利を求める為には何でもやる、そんなデッキだよ。要するにリスペクトを捨てた、な」

「なん……だと……?」

お、驚いてる驚いてる。だが、まだ終わらんよ!!

「サイバーダーク・ドラゴンの効果、墓地のカードの数×100ポイント攻撃力を上昇させる!! また、サイバー・ダーク・ドラゴンの効果で、墓地のS I N トウルース・ドラゴンを装備し、その攻撃力・守備力を吸収する!!」

鏡夜

場

鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン（攻撃力1000↓2700↓
7700）

伏せカード二枚

「バトルだ！サイバー・ダーク・ドラゴンでダイレクトアタック！
！フル・ダークネス・バースト！！」

「リバースカードオープン、和睦の使者！！このターン、俺は戦闘
ダメージを受けない！」

「……防がれたか。まあいい、ターンエンドだ」

鏡夜

LP4000

場

鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン（攻撃力7800）

伏せカード二枚

「……嫌だ……」

来た、か。

「嫌だ、俺は、負けたくない……俺は……勝ちたい……っ！！」

人間は、極限状態になると自分でも思っていなかった本性が出ると
いう。

そして、俺は丸藤亮を極限状態にまで追い詰めた。

その結果が——これだ。

「俺のターン、ドロロー!!魔法カード、壺の中の魔導書を発動!!互いのプレイヤーは、デッキからカードを三枚ドロウする!!」

ここで手札増強カードとは、いい加減にしてほしいものだ。

震える手でカードを引き、そのカードを見て――丸藤亮は動きを止めた。

「……どうした?やらないのか?」

「駄目だ。これは、リスペクトに……」

「お前は変わりとくてここに来たんだろ?今までの決闘を思い返して、何か思う所があったから来たんだろ?なら――使え。勝利が欲しいのなら、どんな手段でも使い、徹底的に相手を叩き潰せ。そうでなければ、お前は勝利を手に出れない」

「――ッ!!それは――」

「全員必死になって勝とうとしているんだよ。お前はいい、そのドロウ力がある。だが、それがない奴でも、必死になっているんだ。

お前も、今勝ちたいんだろ?なら、使え!!今その手にある可能性を!!」

言葉はない。しかし、目が変わった。

今までのようなリスペクト重視の目から、勝利を求める獣の目へと。

「俺はサイバー・プロト・ドラゴンを召喚。速攻魔法、サイクロンを発動し、装備カード扱いのS I Nトウルース・ドラゴンを破壊する」

鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン攻撃力7800↓2900

「魔法カード、オーバーロード・フュージョンを発動!!!場のサイバー・プロト・ドラゴンと墓地のサイバー・ドラゴン三体、サイ

バー・ジラフを融合!!これが、俺の求める全てだ!!来い、キメラテック・オーバー・ドラゴン!!」

丸藤亮

場

キメラテック・オーバー・ドラゴン（攻撃力800×5＝4000）

「バトルだ!!キメラテック・オーバー・ドラゴンでサイバー・ダーク・ドラゴンに攻撃!!エヴォリユーション・レザルト・バースト!!」

「リバースカードオープン!!リミッター解除!!自分の場の機械族モンスターの攻撃力を二倍にする!!」

「それにチェインしてリバースカードオープンオープン!!速攻魔法リミッター解除!!」

ああ、本当に良くやったよ、丸藤亮。だが――

「リバース罫発動。カウンター罫神の宣告。ライフを半分払いリミッター解除を無効にして破壊する」
「何っ!？」

まだまだ甘い。

鏡夜

LP4000↓2000

場

サイバー・ダーク・ドラゴン（攻撃力2900↓5800）

丸藤亮

LP4000↓2200

場
無し

「そ、そんな……」
無残にも破壊されていく機械の竜。今回も俺の勝ちみたいだな。

「……ターン、エンドだ……」

エンドフェイズ時にサイバー・ダーク・ドラゴンは
破壊されていく。が、俺の手札には既に決着をつけられるカードが
ある。

「俺のターン、ドロー。サイバー・ダーク・エッジを召喚。効果で
墓地のハウント・ドラゴンを装備する」

鏡夜

LP4000

場

サイバー・ダーク・エッジ（攻撃力800↓2500）

「今回も俺の勝ちだ。サイバー・ダーク・エッジでダイレクトアタ
ック!!」

「う……うおおおおお!!」

丸藤亮

LP2200↓—300

リスペクト？そんなもの犬にでも食わせておけ（後書き）

鎧黒竜、サイバーダークドラゴンでした。

しかし、この世界の未来融合制限無しは酷すぎますね。

HEROであれば、トリニティー選択↓ミラクル・フュージョンが簡単に出来、今回のデッキであればサイバーダーク・インパクト！
！かオーバーロード・フュージョンで簡単に攻撃力5000超えが揃う……

うわ、鬼畜。

そして今回。レヴァが墓地にあったのに特殊召喚してないorz

サイバーダークでとどめを刺したかったんですよ。

では次回。何時になるかわかりませんがまたお会いしましょう。

ウザイ奴らに自重は一切ない。(前書き)

ごめんなさい。またワンキルです……

ウザイ奴らに自重は一切ない。

「俺の勝ちだ、丸藤亮」

俺は、そう静かに、まるで一人事のように呟いた。

「ああ、そして、私の敗北だ……」

そして、亮も静かに敗北を認めた。

「……で、格好つけて部屋に返すなんて……何考えてるの……？」

「あいつにも気持ちの整理位必要だろ？」

朝。いつものように綾香の作った朝食と一緒に食べ、登校している中、昨日の事で鋭いツツコミを受けた。

何故一緒に暮らしているのかは後にするとして、ツツコミを受けた理由は決闘で決着がついた後、俺は亮を部屋に一度返したからだ。

『もし、今の勝ちたい、という気持ちがあるのなら、お前のデッキを強化してやるよ』と言い、サイバー・ダークのデッキを渡して。まあ、多分亮は俺の下に来るだろう。貪欲に強さだけを求めて。

さて。現実逃避は後にしようか。

「隠れている奴ら、さっさと出て来い。俺を倒したいんだろ？」

そう宣告すると、多くの生徒が俺の前に姿を現す。その数、約五十人。

「で、なんの用だ？俺は今から登校するんだが」

「惚けたことを……」

「さっさと私達と決闘しろ」
デュエル

……はあ。またコレ（・・・）か。

「何故俺がお前ら雑魚と戦わなければならない？時間の無駄なんだがな」

「俺達は貴様を肅正しに來ただけだ！！」

「肅正？何故だ？何も悪い事はしていないはずだが」

「減らず口を……！！貴様がリスペクトに反するデッキばかりを使う、それ自体が罪だ！！」

今日、俺は既に三回は決闘デュエルしている。その相手は全て似たようなリスペクト狂信者。

なんでも奴らは自分達リスペクト決闘最強の使い手である亮が俺に負けた事が不満らしい。

そして、その理由として俺の冥王パーミを卑怯と言い、俺の事を罪人のように言い決闘デュエルを仕掛けてくる。全くもって不愉快だ。

そして、一番不愉快なのは俺が負ける事をほぼ全ての生徒が望んでいる事だが——それは今はどうでも良い。

「さあ、構えろ！！この人数相手なら例え貴様だろうと勝てはしな

い!!」

「……何? 1VS50?」

「当たり前だ!! これは聖戦なのだから、何人いようと反則にはなりはしない!!」

……ちょーっと、イラッときた。まあ、使うデッキは変わらないけど。

「綾香。すまない、先に行ってくれるか?」

とりあえず綾香を先に行かせないと。このままだと遅刻する。

「……なんで?」

「いや、なんで、と言われても……」

遅刻するからなんだけど……まさか、待っててくれるのか?

「私は貴方の側から片時も離れない……あの時誓った事、もう忘れた……?」

「いや、忘れたわけじゃ無いんだけど……遅刻するぞ?」

「そんなものだっていい……私は、貴方の側にいられたらそれで……じゃなくて、貴方が一人で遅刻するのが可哀想だから、私も一緒に遅刻してあげるだけ……」

本音が漏れている上にツンツンしている綾香は本当に俺得です。別に授業に出なくていいんだけどね。一年分の単位は全部貰ってるし。

「じゃ、このまま授業をサボタージュして××××でもするか?」

「うん……そうしょ……」

「無視するな!!! 兎に角さっさと構えろ!!!」

はいはい、わかりましたよ、っと。

「じゃ綾香、少し待っていてくれ。終わらせて来るから」
「うん……頑張って……」

綾香からの激励は何よりも力になります。さてと。

「相手してやる。来るがいい」

「嘗めやがって……行くぞデメエラ!!!」

「おう!!! そしてリア充は死ね!!!」

「『決闘^{デュエル}!!!』」

side 綾香

「また、やっているのか、夜光は……」

「カイザー……」

まさか、本当に来るなんて……流石、鏡夜……

「先行は俺が貫ってやる。ドロ。魔法カード、強欲な壺を発動。
デッキからカードを二枚ドロ。魔法カード、天使の施しを発動。
カードを三枚ドロして二枚捨てる。魔法カード、闇の誘惑を発動。」

カードを二枚ドロし、手札の闇属性モンスター、クリッターを除外。魔法カード、おろかな埋葬を発動し、デッキから暗黒のマンティコアを墓地に送る」

「なんだあ？手札交換におろかな埋葬みたいな使えないカードばかり使いやがって。そんなん俺達に本気で勝つ気なのか？」

……あ、敗北フラグが立った……

「黙ってろ。永続魔法、生還の宝札を発動。ターンエンドだ」

「ハーツハツハツハツ、こいつ、モンスターも伏せカードも無いぜ？」

「どんな手札事故を起こしたんだろうな！！」

……あ、鏡夜が笑ってる。まあ、仕方ない……

悪夢の、始まりなのだから……

「エンドフェイズ時に墓地の暗黒のマンティコアの効果発動。手札の暗黒のマンティコアを墓地に送り、墓地から暗黒のマンティコアを特殊召喚。生還の宝札の効果、デッキからカードを一枚ドロ。さらに墓地の暗黒のマンティコアの効果、場の暗黒のマンティコアを墓地に送り、墓地の暗黒のマンティコアを特殊召喚。生還の宝札の効果、デッキからカードを一枚ドロ」

「お、おいまさか……」

「無限ループ、だと……？」

「今更気がついたか。ついでに言っておくと、このデッキにはエクゾディアパーツが全て投入されている。つまり、このコンボが成立した時点でお前らの負けは確定していたんだよ」

「ひ、卑怯だ！！」

「卑怯の使い方を間違っていないか？卑怯というのは、禁止・制限を守らない行為やルールに違反する行為を言う。俺は何もルールを違

反するような行為はしていない。つまり俺は卑怯じゃないんだよ！
」

鏡夜が吠え、それを睨みつけるブルー生徒……
卑怯、汚いは敗者の戯言だと昔から言っているのに……やっぱり、
ブルー生徒は学習しない……

「墓地の暗黒のマンティコアの効果、場の暗黒のマンティコアを墓地に送り特殊召喚。生還の宝札の効果で一枚ドロ……っと、十五回目にしてようやくエクゾディア完成。じゃあな、負け犬」

「畜生おおお！！」

「リア充死ねえええええ！！」

鏡夜

封印されしエクゾディアのカード効果により勝利

「よし。部屋のベッドに戻ってめくるめく官能の世界へと行こうぜ、
綾香」

戻って来た鏡夜がそう笑いながら言ってくれる……確かに、そうしたいんだけど……

「鏡夜、その前にお客さん……」

まずは、カイザーの用を終わらせないと……

side 綾香 end

「……答えを聞かせてくれ、亮。お前は、俺にどうして欲しい」

「俺は……お前に鍛えて欲しい……」

「例え、リスペクトを捨てる事になってもか」

「そんな、勝利の為に何の役にもたない物は必要ない。俺が求めるのは、他者を叩き潰す圧倒的な力だ!!」

「……うん、俺の望み通りになったな、亮。

原作のヘルカイザー程冷酷ではなく、しかし原作のヘルカイザーよりも勝利を強く求める、獣へと。

「……嘘、だよな……?」

ん?この声は?

「リスペクトなんて必要ないなんて……嘘だと言ってよ、お兄さん!!」

まさかここで屑が姿を現すとはな……面白いことになってきた。

ウザイ奴らに自重は一切ない。(後書き)

生還の宝札が制限無しの世界が悪いんだ!!

というわけで、今回のデッキは生還マンティコアです。流石禁止カード。マジ強いですね。

××××は何かって? 『のせられません』だよ!!

はい、取り乱してしまって申し訳ありません。次回は地獄の皇帝と初期の翔というカードになっています。

では、また次回。いつになるかわかりませんが、お会いしましょう。

感想を頂くと筆者の執筆スピードが上昇します。

なんだか面白い事になった（前書き）

サイバー流公式チートドロ（笑）

なんだか面白い事になった

「ほう……翔、何か文句でもあるのか？」

そう言う亮の顔は――まるで、獲物を見つけた捕食者のような顔。だが、それに屑は気づかない。

「当たり前だよ！！お兄さん、前まであんなにリスペクト決闘を素晴らしい物だと言っていたのに……どうして！！」

「そんなものでは勝利は得られないからだ」

「勝利……！？そんな下らない物の為に、リスペクトを捨てたって言うの？」

……今、コイツ勝利を下らない物だと言ったな？

「ふざけるな屑。勝利は下らない物なんかじゃない。少なくとも、そんな人を見下した理念よりかはな」

「夜光、鏡夜……貴様が、貴様がお兄さんをこんな風に変えたのか！！」

……やばい。会話になっていない。

「答えろ夜光鏡夜！！お前が、お前がお兄さんをこんな風に！！」屑は馬鹿みたいな大声をあげ続ける。俺自身、コイツに付き合うのが面倒くさくなっていた。

「……それは違うぞ、翔。俺は、自らこのような姿へと変わったのだ」

そんな時、口を開いたのは問題となっていた丸藤亮だった。

「……そんな……嘘だ……嘘だっ!!」

ひとしきり錯乱し終わった後、屑は決闘盤を構える。その相手は――亮。

「勝負だ、お兄さん……僕が、お兄さんを元のお兄さんに戻してやる!!」

「――いいだろう。俺は勝利が手に入ればそれでいい。――行くぞ」

「^{デュエル}決闘!!」

「僕のターン、ドロー!!僕は、スチームロイドを攻撃表示で召喚!!カードを二枚伏せてターンエンドだ!!」

丸藤翔

LP4000

場

スチームロイド（攻撃力1800）

伏せカード二枚

手札6枚↓3枚

……馬鹿だ、馬鹿がいる。

確かにスチームロイドは攻撃力だけが高い。それに攻撃時に攻撃力が2300まで上がる優秀な効果を持っている。

……が、攻撃された時には攻撃力が1300まで下がるというデメリット効果を持つ、とてもじゃ無いけど最初に出すモンスターじゃない。

それを最初に自信満々で出すなんて……自慢のお兄さんも可哀想な物を見るような目で見ているぞ？

「俺のターン、ドロ。魔法カードテイク・オーバー5を発動。デッキの上から5枚を墓地に送る。永続魔法、未来融合―フューチャー・フュージョン―を発動。F・G・Dを選択し、デッキからドラグニティーブランディストック、ドラグニティアームズ―レヴァテイン、ハウント・ドラゴンを二枚、SINトウルース・ドラゴンを墓地に送る」

「サイバー・エンド・ドラゴンじゃ……ない……？」

明らかにサイバー・エンドよりサイバー・ツインの方が強いです。本当にありがとうございます。

それはさて置き、今回は裏を使うか……面白くなってきた。

「俺はサイバー・ダーク・ホーンを攻撃表示で召喚！！」

現れるのはサイバー・ダーク三体のうち、顔の部分に当たる黒き機械。

「何……？そのモンスターは……」

「サイバー・ダーク・ホーンの効果、召喚、特殊召喚、反転召喚に成功した時に墓地のレベル3以下のドラゴン族モンスターを装備カードとして装備し、その攻撃力と守備力を吸収する。俺はハウント・ドラゴンを選択する」

丸藤亮

LP4000

場

サイバー・ダーク・ホーン（攻撃力800↓2500）

「バトルだ！！サイバー・ダーク・ホーンでスチームロイドに攻撃！！ダーク・スピア！！！」

「リバーズカードオープン！！スーパーチャージ！！場のロイドと名のつくモンスターが攻撃対象になった時、デッキからカードを二枚ドローする！！」

「だが、スチームロイドの効果で攻撃力は500ポイント減少する。1200ポイントのダメージを受けろ！！」

「う……うわあああっ！！！」

丸藤翔

LP4000↓2800

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

丸藤亮

LP4000

場

サイバー・ダーク・ホーン（攻撃力2500）

未来融合―フューチャー・フュージョン―（F・G・D選択、0ターン目）

伏せカード二枚

手札6枚↓2枚

場は圧倒的に亮が有利。だが、屑は笑っている。キーカードでも引いたか？

「僕のターンドロー！！リバーズ罠、チェーン・マテリアルを発動！！バトルフェイズを失うかわりに、除外ゾーン以外の場所から融合を行う事が出来る！！魔法カード、ビークロイド・コネクション・

ゾーンを発動！！手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、「ビークロイド」と名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する！！このカードによって特殊召喚したモンスターは、魔法・罠・効果モンスターの効果によっては破壊されず、効果を無効化されない。僕はデッキからトラップクロイド、エクスペレスロイド、ドリルロイド、ステルスロイドを墓地に送り、スーパービークロイド・ステルス・ユニオン―を攻撃表示で召喚！！」

丸藤翔

場

スーパービークロイド・ステルス・ユニオン―（攻撃力3600）

「まだだ！！手札から、二枚目のビークロイド・コネクション・ゾーンを発動！！デッキから、スチームロイド、ドリルロイド、サブマリントイドを墓地に送り、スーパービークロイド・ジャンボドリル―を攻撃表示で召喚！！さらに僕はまだ通常召喚を行っていない。僕はサブマリントイドを守備表示で召喚！！カードを二枚伏せてターンエンド！！」

丸藤翔

場

スーパービークロイド・ジャンボドリル―（攻撃力3000）

スーパービークロイド・ステルス・ユニオン―（攻撃力3600）

サブマリントイド（守備力1800）

伏せカード二枚

手札6枚↓1枚

……まさか一ターンでここまで揃えるとはな。屑にしてはやる。……だが、まだまだ甘いんだよ！！

「やるな、翔。だが、俺はお前の上に行く！！俺のターン、ドロ―

「！！テイクオーバー5の効果でもう一枚ドロー！！魔法カード、テイクオーバー5を発動！！デッキの上から5枚のカードを墓地に送る！！魔法カード、苦渋の選択を発動！！サイバー・ダーク・キールニ枚、サイバー・ダーク・ホーン、サイバー・ダーク・エッジニ枚の中から好きなカードを二枚選ぶがいい！！」

「僕はサイバー・ダーク・エッジを選択する！！」

「ふ、まあ変わらんよ。魔法カード、天使の施しを発動。カードを三枚引いて二枚捨てる。魔法カード、強欲な壺を発動！！デッキからカードを二枚ドロー！！行くぞ、翔」

チートドローの連続、ありがとう御座いました。そして、多分このターンで決着か。

「魔法カード、オーバーロード・フュージョンを発動！！墓地のサイバー・ダーク・エッジ、サイバー・ダーク・キール、サイバー・ダーク・ホーンを除外し、現れる！！鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン！！」

出たな、三体のサイバー・ダークの融合体。にしても、よく墓地に全部落とせたな。

「な、何？この禍々しいモンスターは……」

「サイバー・ダーク・ドラゴンの効果、融合召喚時に墓地のドラゴン族一体を装備出来る。俺は、SINTウルス・ドラゴンを装備する。また、サイバー・ダーク・ドラゴンの第二の効果、墓地のカード一枚につき攻撃力を100ポイント上昇させる」

鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン（攻撃力1000↓8000）

「……攻撃力、8000……」

驚いているけど、多分まだ終わらないと思うぞ？

「速攻魔法、異次元からの埋葬を発動。サイバー・ダーク三枚を墓地に戻す。さらに、魔法カードサイバー・ダーク・インパクト！！を発動！！墓地の三体のサイバー・ダークをデッキに戻し、再び姿を現せ！！鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン！！効果で二枚目のSINTウルース・ドラゴンを装備させる。魔法カード、天よりの宝札を発動！！デッキから手札が6枚になるまでカードをドロースる！！魔法カード、パワーボンドを発動！！手札の三体のサイバー・ダークを融合し、三度降臨せよ！！サイバー・ダーク・ドラゴン！！効果でドラグニティーブランドイストックを装備する！！」

丸藤亮

場

サイバー・ダーク・ドラゴン×3（攻撃力8600×2、攻撃力3200×1）

サイバー・ダーク・ホーン×1（攻撃力2500）
伏せカード二枚

「リバース罠、トラップ・スタンを発動。このターンこのカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。」

「そ、そんな……」

絶望の表情で亮を見る屑。大方聖バリか攻撃の無力化でも仕込んでたんだろう。

「速攻魔法リミッター解除を発動。自分フィールド場の機械族モンスター全ての攻撃力を二倍にする」

「あ……あ……」

丸藤亮

場

サイバー・ダーク・ドラゴン×3（攻撃力8800↓17600×2、3400↓6800）

サイバー・ダーク・ホーン（攻撃力2500↓5000）

「終わりだ。サイバー・ダーク・ホーンは貫通能力を持っている。サイバー・ダーク・ホーンでサブマリンロイドに攻撃！！ダーク・スピア！！」

「う……うわあああっ！！」

丸藤翔

LP2800↓400

既に決着はついている。だがな――

「ドラグニティーブランディストックを装備したモンスターは、二回の攻撃が可能となる。サイバー・ダーク・ドラゴン三体で攻撃！！フル・ダークネス・バースト！！ヨンレェンダア！！」

「う……うわあああっ！！」

――この程度で今の亮が終わるわけが無い。

丸藤翔

LP400↓4200↓6800↓24000↓42400

「……うわ、えげつねえ……」

五桁のオーバーキルって。流石にやりすぎだろ。

「翔。俺は、今の俺の道に行く。お前はお前の道を歩け。――ではな」

そう言って、崩れ落ちている屑を無視して歩いていく亮。うん、格好いい。

「じゃ、俺達も行くか」

「……そうだね……」

そして、俺達も自室に向かって歩き出した。

なんだか面白い事になった（後書き）

というわけで、お兄さんの本気でした。

流石はサイバー流公式チートドロ。一ターンでサイバー・ダーク・ドラゴンを三体揃えるとは……

まあ、翔も十分チートでしたが。

今回はイチャイチャと暗躍になります。決闘は無いかも……

では、いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

P・S

PV100000、お気に入り登録200件突破しました。こんな駄文を読んで頂いてる皆様、ありがとうございます。

人の恋愛に口を出すな（前書き）

綾香がワンキルじゃありません（笑）

人の恋愛に口を出すな

「待ちなさい！その二人！！」
「む？」

生還マンティコアで狂信者をぶちのめした次の日。

普通に登校してきた俺達は見知らぬ女子生徒に呼び止められた。
ちなみに今俺の頭は半分寝ている。何故かって？昨日は一日中（載せられません）な事をやってたからだよ！！

「原委員長……何か用ですか……？」

「普段から貴方達二人が風紀を乱す行為を行っていると聞きました
が……なんですかそれは！！」

え？俺何かしたっけ？

「何故恋人繋ぎで登校しているんですか！！」

ああ、そういうわけね。

「これでもまだマシなほうなんだけどな……」

「恋人繋ぎでマシ……普段はどんな登校をしているんですか！！」

「え？おんぶ、抱っこ……過去数回お姫様抱っこ……肩車もやった
な……最後のは流石に今はやらないけどな」

「な……な……」

おうおう、絶句してるな。

ちなみに、一番酷かったのは俺が一日中綾香の事を『お姫様』と呼び続け、クラスの全員が見ている前でキスさせられた事だったりする。

俺がクラスの行事の関係で綾香を十分に構ってやれず、他の女子と話していた時に、この罰を執行された。

全く、そんな嫉妬深い所も可愛いんだから。

「兎に角、そんな行為は神が認めてもこの私が許しません!! さあ、私と決闘^{デュエル}しなさい!!」

嫌だ面倒くさい。

そう言いたくてたまらないんだけど……どうしようかな。

個人的にはこういう人物は好きだし、真面目な所も評価出来るから戦ってあげたいんだけど……眠い。

ああ、本当にどうし——

「鏡夜、私にやらせて……」

——何？

「私があの人を相手をしたいんだけど……いい……?」

「いや、別にいいんだが、珍しいな」

普段の綾香はいざという時しか決闘をせず、基本的に俺にくっついていて。そんな綾香が、自発的に決闘をしたいというのは珍しい。一体何が——

「人の幸せな時間を邪魔した者は……誰であろうと叩き潰す……」

——そんな事を考えていた時間が、私にもありました。

やばい。綾香の後ろに般若が見える。比較的本気で。

「さ、公開処刑の時間……叩きのめされる覚悟は十分……？」
デュエル

「そんな物ありません！！全力で貴方を倒します！！」

あゝあ、始まるぞ。多分あのデッキだろうな……

「「決闘！！！」
デュエル

トラウマにならないといいけど。

side 綾香

「私のターン、ドロ……永続魔法、魂吸収を発動……カードが除外される度に一枚につき500のライフを回復する……カードを二枚伏せ、ターンエンド……」

綾香

LP4000

場

伏せカード二枚

魂吸収

手札6枚↓3枚

……準備は、終わり……さあ、足掻いてみせて……？

「私のターン、ドロー!!」

「リバースカード、永続罠マクロコスモス……墓地に送られるカードは全てゲームから除外される……さらに効果で原子太陽ヘリオスを守備表示で特殊召喚……」

「それがどうしたんですか!! 魔法カード、昼夜の大火事を発動します!! 800ポイントのダメージを受けて下さい!」

綾香

LP 4000 ↓ 3200 ↓ 3700

……計画通り……

「ど、どうしてLPが……」

「マクロコスモスで昼夜の大火事が墓地に送られた事により、魂吸収の効果でLPを500回復しただけ……」

多分この学園の生徒では勝てないだろうけど……頑張っつて削っつてね……

「くっ、私はご隠居の猛毒薬を発動し、ダメージを選択!! 800ポイントのダメージを受けなさい!!」

綾香

LP 3700 ↓ 2900 ↓ 3400

「くっ、私はリバースカードを二枚伏せ、永続魔法波動キャノンを発動します!! このカードは自分のスタンバイフェイズ毎にカウンターを一つ乗せ、リリースする事で乗っているカウンター一つにつ

き1000ポイントのダメージを与えます!! ターンエンドです」

原麗華

LP4000

場

伏せカード二枚

波動キャノン（カウンター0）

手札6枚↓1枚

「私のターン、ドロ―…魔法カード、封印の黄金櫃を発動…ネクロフェイスを除外し、ニターン後のスタンバイフェイズ時に手札に加える…そして、除外したネクロフェイスの効果発動…このカードが除外された時、お互いのデッキの上から五枚のカードを除外する…」

「な、何ですって!?! つまり―」

「私のライフが、回復する…」

除外されたのは、神の宣告、サイバー・ヴァリー、黄金のホームクルス、強欲な壺、手札断殺…ちよつと痛い…

綾香

LP3400↓9400

「魔法カード、カオス・グリードを発動…墓地にカードが無く、カードが四枚以上除外されているので二枚ドロ―…魂吸収の効果でライフを回復…」

綾香

LP9400↓9900

「魔法カード、運命の宝札を発動!! サイコロをふり、その数だけ

ドロし、その後その数だけデッキトップからカードを除外……出目は四、カードを四枚ドロしてデッキトップから四枚除外……魂吸収の効果でライフを回復……」

綾香

LP9900↓11900

いいカードが来た……次のターンで終わらせる……でも、その前に……もう少し、下準備……

「魔法カード、天使の施し……カードを三枚引いて二枚除外……魂吸収の効果でライフを回復……」

綾香

LP11900↓12900

「除外したネクロフェイスの効果……互いのデッキトップから五枚除外……」

「く……」

嫌そうな顔をしながらカードを除外する原委員長……でも、それでいい……

これは、幸せな時間を邪魔した原委員長へのお仕置きなんだから……あ。

「ネクロフェイスの効果で除外されたネクロフェイスの効果……さらにデッキトップからカードを五枚除外……その前に魂吸収でライフを回復……」

綾香

LP12900↓17900↓22900

「カードを二枚伏せてターンエンド……」

綾香

LP22900

場

原子太陽ヘリオス（守備力1700）

マクロコスモス

魂吸収

伏せカード三枚

手札3枚↓5枚

ヘリオスの守備力が1700……？どうやらモンスターカードが予想以上に除外されていたみたい……嬉しい誤算……

「わ、私のターン、ドロロー！！リバースカード、無謀な欲張りを発動します！！ニターンドローフュイズをスキップする代わりに二枚ドロロー！！魔法カード、強欲な壺を発動します！！カードを二枚ドロロー！！」

「魂吸収で……ライフが回復……」

綾香

LP22900↓23900

「スタンバイフェイズ時に、波動キャノンのカウンターが一つたまります！」

波動キャノンカウンター0↓1

「魔法カード、ご隠居の猛毒薬を発動します！！ダメージを選択し、

貴方に800のダメージを与えます!!」

「魂吸収で……ライフが回復……」

綾香

LP23900↓23100↓23400

「まだです!!魔法カード、デス・メテオを発動します!!貴方に1000ダメージを与えます!!」

「……魂吸収で……ライフを回復……」

綾香

LP23400↓22400↓22900

「魔法カード、火炎地獄を発動します!!貴方は1000ダメージを受け、私は500ダメージを与えます!!」

「魂吸収で……ライフ回復……」

原麗華

LP4000↓3500

綾香

LP22900↓21900↓22400

「……カードを二枚伏せて……ターンエンド……」

原麗華

LP3500

場

波動キャノン（カウンター1）

伏せカード三枚

手札5枚↓1枚

絶望したみたいで、気力も無くなってる……まあ、しょうがないけど……

「私のターン、ドロ……このターンで終わらせる……罠カード、異次元からの帰還を発動……ライフを半分払い、除外ゾーンからモンスターを可能な限り特殊召喚する……来て、ダ・イーザ……ホムンクルス……」

綾香

LP22400↓11200

場

紅蓮魔獣ダ・イーザ×3（攻撃力？↓9200）

黄金のホムンクルス（攻撃力1500↓8500）

原子太陽ヘリオス（守備力1700↓1200）

「ダ・イーザは……元々の攻撃力は除外されている自分のカード一枚につき400ポイントになる……黄金のホムンクルスは、除外されている自分のカード一枚につき、攻撃力を300ポイント上昇させる……現在、除外されている私のカードは23枚……よって、この攻撃力になる……さらに、私はまだ通常召喚権を残している……ヘリオスを生贄にささげ、二枚目の黄金のホムンクルスを召喚……さらに、原子太陽が除外された事により私のモンスター達の攻撃力が上昇する……念のためにリバースカードオープン、トラップ・スタン……このターン全ての罠の効果を無効にする……さらに、トラップ・スタンが除外された事によりモンスター達の攻撃力が上昇……」

綾香

場

紅蓮魔獣ダ・イーザ×3（攻撃力9200↓10000）
黄金のホムンクルス×2（攻撃力8500↓9100）

「バトル……紅蓮魔獣ダ・イーザ、黄金のホムンクルスでダイレクタアタック……」

「き……きゃああああー!!」

原麗華

場

LP3500↓—6500↓16500↓—26500↓—35400↓—44300

「……やりすぎだろ、綾香……」

「……確かにそうかも……」

自分でも反省する。確かにわざわざ最後に異次元からの解放を使う意味はなかった……

何故なら……

「どうせお前のことだからD・D・ダイナマイトも伏せてたんだろ？」

「……うん……」

既に原委員長はカードを15枚は除外していたから、D・D・ダイナマイトを使えば最低でも4500のダメージを与えられた……それをしなかった理由は、単に――

「ま、勝手にいちゃもんつけてきた相手が悪いんだからいいか」
「うん……」

——単に、私が苛ついたというだけなのだから。

「委員長」

「……敗者の私に……何か用ですか」

「いや、俺は君のその性格や真面目な所はいいと思う。けど、少し堅すぎるんだ」

「堅すぎ……ですか？」

「ああ。手を繋いでいるくらいで怒るなんて、流石にそれはないだろう？」

「し、しかし……」

「こう言っては悪いが初見での判断に頼りすぎだと思う。だからもう少し情報を得てから怒るべきじゃないか？」

「……ここは私の負けなので素直に引いておきます。しかし、次はそうはいきません!!」

そう言って走り去っていく原委員長……こういう所が委員長と呼ばれる由縁……

「残念。嫌われてしまったか。さ、行こうぜ綾香」

そう言って手を差し出して来る鏡夜……そして当然のように、私は

——

「仕方ない……どうしても、って言うなら一緒に行ってあげる……」

——ツンツンしちゃう……

人の恋愛に口を出すな（後書き）

原作オリカの運命の宝札マジチート。

というわけで除外ビートでした。

レベル3モンスターが五桁の攻撃力……うわ、怖い。

もし本当にこんなのなら絶対トラウマになります（笑）

さて、次回はタイタン戦の予定です。

強化された十代に、はたしてタイタンはどこまで戦えるのか……？
その答えは、作者も知らない。

では、いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

タイタン……声が素晴らしい。(前書き)

皆様の予想を大きく裏切ります(笑)

タイタン……声が素晴らしい。

「……そろそろ、始まる……」

「ん、何がだ？綾香」

『今日はちょっと早めに……やる……』と仰る綾香に従い、一戦終わらした所で唐突に綾香はベッドの中でそう言った。

「……気づいてないの……？何の日か……」

へ？今日何かあったっけ？

「……タイタン戦……」

「ま、マジか！？」

「うん……だから早く……」

「おう！！着替えて行こうぜ！！」

何で服を着てないかって？自分で考えろ！！

「私のターン、ドロー。私は、手札のジェネラルデーモンを捨て、万魔殿―悪魔の巣窟―を発動。さらにシャドウナイトデーモンを攻撃表示で召喚。カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

タイタン

LP4000

場

シャドウナイトデーモン（攻撃力2000）

伏せカード一枚

フィールド魔法（万魔殿―悪魔の巣窟―）

手札6枚↓2枚

ちっ、既に始まっていたのか……まあいい。見ただけでも幸いと言えるだろう。

それにしても若本さんは順調な出だしだな。まあ、それでどこまで十代と戦えるかはわからないが。

ちなみに俺達は十代と合流せず、物陰から静かに観戦中だ。

「デーモンデッキか……へへっ、面白そうだな!!」

「貴様、わかってるのか……これは、闇のデュエルだぞ?」

「へへっ、そんなん信じられるかよ!! 行くな、俺のターン!!」

……残念だがな十代、この世界だとあるんだよ、闇のデュエル……確かにタイタンは偽物だがな……千年パズルも……

「ドロー!! 俺は、エアーマンを攻撃表示で召喚!! 効果で、スパークマンを手札に加える!! さらに、手札から、魔法カード融合を発動!! 手札のスパークマンとクレイマンを融合し、現れろ!! E・HEROサンダー・ジャイアント!!」

……あれ? またワンキル?

「サンダー・ジャイアントの効果、手札を一枚捨ててこのカードよりも攻撃力の低いモンスター一体を破壊する!! ヴェイパー・スパーク!!」

「シャドウナイトデーモンの効果、このカードが効果の対象になった時、サイコロを振り、3が出た場合その効果が無効にして破壊する」

「へへっ、そんなの外れるに決まってるッス!!」

……はあ。

明日香を攫うような奴だぞ？ そんな奴がまともにルールを守っているのか？

「出目は3、サンダー・ジャイアントの高価を無効にして破壊する」
「何っ!？」

サイコロに細工をして必ず狙いの出目が出るようにするに決まっているだろ。それともアレか？ 学習しないのか？

「くっ、カードを一枚伏せてターンエンドだ!!」

十代

場

E・HEROエアーマン（攻撃力1800）

伏せカード一枚

手札6枚↓2枚

ワンキルになる所だったが、サンダー・ジャイアントを破壊されてピンチに陥ったか。

さあ、どうする十代？

「私のターン、ドロー。私は、シャドウナイトデーモンを生け贄に捧げ、迅雷の悪魔スカル・デーモンを攻撃表示で召喚する」

出たよ、デーモンの召喚のリメイクモンスター。

なのに名前では判別し辛い上に効果も微妙、なおかつ魔霧雨に対応しなくなった、まさしく可哀想なモンスター。

正直、見れて良かったよ。いや、マジで。

「バトルだ!! スカル・デーモンでエアーマンに攻撃!! 怒髪天昇撃!!」

何故魔霧雨じゃないんだ、とファンなら誰もが思ったその一撃は、完璧にエアーマンを打ち倒した。

十代

LP4000↓3200

「くっ……リバースカードオープン!! ヒーロー・シグナル!! この効果で俺は、デッキからE・HEROバブルマンを守備表示で特殊召喚する!! バブルマンの効果、このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に自分のフィールド上に他のカードが無い場合、デッキからカードを2枚ドロウする事ができる!! この効果で二枚ドロウ!!」

伏せてたのはヒーロー・シグナルか。にしても、流石は原作効果のバブルマン。強欲なヒーローの名前は伊達じゃないか。

「後続を呼んでしまったか……まあいい。ターンエンドだ」

タイタン

LP4000

場

迅雷の悪魔―スカル・デーモン―（攻撃力2500）

伏せカード一枚
手札3枚↓2枚

伏せない、ということはあの伏せカードは聖バリか幽閉か……おそろく攻撃反応系罠か。

だが、それで満足してたら十代には勝てないぜ？

「俺のターン、ドロー！！魔法カード、強欲な壺を発動！！デッキからカードを二枚ドロー！！」

……あるえー？どうしてさっき二枚だった手札が六枚にまで増えてるのかなあ……？

チートドロー自重しろ。

「手札の沼地の魔神王を捨てて、融合を手札に加える！！」

これ、十代のデッキに入ってたから俺が売ってやった。当然そんなに十代が金を持っている筈もなく、出世払いという形に落ち着いたが。

等価交換は大切です。

「俺は、手札から、ミラクル・フュージョンを発動！！墓地のスパークマンと沼地の魔神王を融合し、現れろ！！E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン！！」

……終わったな……可哀想に。

本来この時期にデッキに投入されてはいなかったが、俺が沼地や他のカードを売ってやった時にデッキに投入させた。

実際強いしな。沼地との融合で簡単に出せるし、攻撃力も正規召喚なら簡単に3000を超え、未来融合ーフューチャー・フュージョ

ンでエリクシーラーを指定するだけで攻撃力が1200も上昇する、まさしく最強クラスのHERO。

なのにアニメでは不憫だな……

「シャイニング・フレア・ウイングマンの効果、このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在するE・HEROと名のついたカード1枚につき300ポイントアップする！！墓地には、クレイマン、サンダー・ジャイアントの二枚のカードが存在する！！よって、このカードの攻撃力は600ポイント上昇！！さらに、手札から魔法カード融合を発動！！手札のE・HEROワイルドマンと場のE・HEROバブルマンを融合！！」

「馬鹿な！！その二枚で融合出来るE・HEROなどいるわけが――」

甘い。

「現れろ！！V・HEROアドレクション！！」

確かに俺は属性HEROの融合体は渡していない。が、V・HEROまで渡していない、とは言っていない！！

「な、なんだそのモンスターは！！」

「V・HEROアドレクションの効果、1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体と、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するHEROと名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターの攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで、選択した自分のモンスターの攻撃力分ダウンする。俺はお前の場の迅雷の悪魔スカル・デーモンと俺の場のE・HEROシャイニング・フレア・ウイングマンを選択する！！」

迅雷の悪魔―スカル・デーモン―（攻撃力2500↓0）

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン（攻撃力3100↓3700）

「手札から速攻魔法、サイクロンを発動！！お前の場の伏せカードを破壊する！！」

「な、なんだと！？」

破壊されたのは聖バリ……予想通り過ぎだろ、おい。

「バトルだ！！シャイニング・フレア・ウイングマン、アドレイションで攻撃！！シャイニング・シュート！！、アンビション・サンクシヨonz！！」

「うぐわああああ！！！」

タイタン

LP4000↓3000↓—2400

「ち、ちいっ！！」

あ、逃げた。

「……追いかけて……」

「そうだな」

一瞬の考えの後、俺達はタイタンを追った。俺達の目的の為に。

タイタン……声が素晴らしい。(後書き)

誰がV・HEROを渡していないと言った!! 作者は『属性HEROの融合体は渡していない』と言っただけで、何も『漫画版HEROの融合体を全て渡していない』とは言っていない!!

この際はつきり言いますがバブルマンを融合素材にしたHEROが弱すぎるんですよ。なので、これからこの作品ではスチームヒーラー、セイラーマンの出番はない、と思って頂けると嬉しいです。

勿論漫画版『属性HEROの融合体』は渡していないので十代の元での出番はありません。ひき続き他のアニメ版HEROを出していき、V・HEROの出番は少なくなっていく予定です。

では次回、いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

倫理委員会？空気読め。（前書き）

……今回、いきなりな事をバラしますが許して下さい……

倫理委員会？空気読め。

「……始めまして、かな？自称闇の決闘者」
デュエリスト

「……何者だ、貴様はあ」

ふう。やっと見つけた。全く、面倒くさい場所に逃げやがって。

「俺は——」

とりあえず、とっとと用事を終わらせよ。

「扉を開けろ！！開けなければドアを爆発する！！」

おうおう、やってみろ。傷一つつかないと思うけどな。

「……鏡夜の、ターン……」

「ああ、考えごとしてた。ごめんな、綾香」

「——別に……対戦相手が行動しなかったら、私まで迷惑がかかるから……」

……顔を真っ赤にしながらそんなことをのたまっても効果はありませんよ。綾香さん。

むしろただ可愛いだけです。

もし俺がひぐらしの某ヒロインならお持ち帰りしてますぜ？

「にしても、五月蠅い……」

「まあ、頭がアレな事で有名なアカデミア倫理委員会だからな」

「なるほど、確かに……」

……綾香、ちょっと黒いよ？

タイタンと十代が戦ったその翌日――つまり今日、俺と綾香は俺の部屋で二人揃って引きこもり決闘^{デュエル}していた。まあ、単に倫理委員会の邪魔がしたいだけなんだけど。いざとなれば、切り札もあるし。

万一突入されてきた時の為に、（載せられません）はやってないし。ちなみに今現在の場合は、

鏡夜

LP8000

場

カードガンナー（攻撃力400）

ダーク・グレファア（攻撃力1700）

ダーク・アームド・ドラゴン（攻撃力2800）

伏せ一枚

手札2枚

（墓地…闇属性モンスター4枚）

綾香

LP8000

セットモンスター×1

伏せ3枚

手札2枚

だ。

当然のようにLPは8000で行っており、現在は2ターン目。ソリッドビジョン？あんなの部屋じゃなかなか使えない。

「俺のターン、ドロ。カードガンナーの効果、デッキトップからカードを三枚送りこのカードの攻撃力を1500ポイント上昇させる。ダーク・グレファアの効果、手札から終末の騎士を墓地に送り、デッキから終焉の精霊を墓地に送る。魔法カード、天使の施しを発動。デッキからカードを三枚引いて二枚捨てる。魔法カード、終わりの始まりを発動。墓地の閥属性モンスターを五枚除外し、デッキからカードを三枚ドロ。……よし、手札から流転の宝札を発動。デッキからカードを二枚ドロ。俺は墓地の終末の騎士とシャインエンジェルを除外し、カオス・ソーサラーを特殊召喚！

ダーク・アームド・ドラゴンの効果、墓地の閥属性モンスター一枚を除外する事でフィールド場に存在するカード一枚を破壊する！！一度目の効果でセットモンスターを破壊する！！」

「……ッ！！マシユマロン……」

……あつぶね……さつさと破壊しといてよかったよ……

「二度目の効果で右側の伏せカードを破壊！！」

「リバース罠……第六感……私は、三と六を選択する……」

「……げ、第六感かよ……お前が使うと最強のドロソースになるだろが……」

「早く……ふって……」

「はいはい」

綾香の指示に従い賽子をふる。そこには、俺の予想通りの数字があった。

「……出目は三……効果で三枚ドロ……」

「……本当にチートだよ、その能力……ま、これ以上言うとお前に悪いから言わないけどな」

「……ありがとう……早く、続き……」

「わかったよ」

素直にプレイを進める事にする。もう慣れた事だ。気にはしてない。彼女——桜野綾香——には、幾つかの能力がある。俗に言う『サイコデュエリスト』のような能力が、だ。

その内の一つが、予言能力。賽子やコイントスの出目を予知してしまいう能力。

便利？馬鹿を言うな。予知『してしまいう』んだ。『出来る』のではなく、な。

つまり、綾香は半強制的に賽子やコイントスの出目を予知してしまう。これが原因で彼女は過去——いや、今はこれは関係ない、か。だから、彼女は普段よっぱどの事がない限りギャンブルカードを使わない。まあ、俺との決闘を除いて、だけどな。

「ダーク・アームド・ドラゴンの効果、闇属性モンスターを除外して最後の伏せカードを破壊!!」

「……ごめん……罨カード、和睦の使者……このターン私は戦闘ダメージを受けない……」

「やられた……お前のデッキはどうせあれだし……俺の負け、か……カードを二枚伏せてターンエンド時に流転の宝札の効果で手札を一枚墓地に送る。ターンエンドだ」

鏡夜

LP8000

場

カードガンナー（攻撃力1900↓400）

ダーク・グレファアー（攻撃力1700）

ダーク・アームド・ドラゴン（攻撃力2800）
カオス・ソーサラー（攻撃力2400）

ちなみに伏せはパワー・ウォールにカード・ブロック、手札はダーク・クリエーター二枚に終わりの始まりだ。

場が圧倒的に有利な俺が負けるわけない？そんなことはあるわけないんだ。特に綾香相手だと……な。

「私のターン……ドロ……魔法カード、トレード・インを発動……手札の堕天使スペルビアを捨てて二枚ドロ……魔法カード、天使の施し……カードを三枚引いて二枚捨てる……二枚目のトレード・インを発動……手札の堕天使ゼラートを捨てて二枚ドロ……魔法カード、流転の宝札を発動……デッキからカードを二枚ドロ……揃った……」

あ、終わった。

「手札から光神化を発動……手札のアテナを攻撃力を半分にして特殊召喚……手札から速攻魔法、地獄の暴走召喚……私は、アテナを選択する……」

「じゃ、俺は適当にダムドを選択しとく。もう負け確定だし」

綾香

LP8000

場

アテナ×3（攻撃力1300×、攻撃力2600×2）

鏡夜

LP8000↓7400

場

ダーク・アームド・ドラゴン×2（攻撃力2800×2）

ダーク・グレファアー×1（攻撃力1700）

カオス・ソーサラー（攻撃力2400）

カードガンナー（攻撃力400）

伏せ二枚

「私はフェアリー・アーチャーを召喚……アテナの効果で600ダメージ……三体存在するから1800ダメージ……さらに、フェアリー・アーチャーの効果、場の光属性モンスター一体につき400ダメージ……私の場には四体の光属性モンスターがいるから1600ダメージ……」

「ちょ、燃えるの早いな!!」

鏡夜

LP7400↓4000

一気に初期ライフの半分……だが、地獄はこれからなんだよ……

「アテナの効果……場のフェアリー・アーチャーを墓地に送り墓地の堕天使スペルビアを特殊召喚……効果で墓地の堕天使ゼラートを特殊召喚……当然、アテナの効果で600ダメージ三体分を二回、合計で3600ダメージを受けて貰う……」

「……もう無理だな……」

鏡夜

LP4000↓600

「手札から魔法カード、ハリケーンを発動……フィールド場の全ての魔法、罠を手札に戻す……堕天使ゼラートの効果、手札の闇属性モンスターを一枚墓地に送り、相手フィールド場のモンスターカードを全て破壊する……全モンスターでダイレクトアタック……」

鏡夜

LP600↓—700↓—3300↓—5900↓—8700↓—
11500

「……わざわざ最後に直接攻撃する意味あったのか……？」

「……ハリケーンが……手札にあったから……」

「……まあ、それなら仕方ないな」

でも、これで戦績は49勝49敗か。数えてないのを含めるとまだあるのを計算に入れても勝率は50%といった所だろう。

「くっ……何故爆発しても扉が壊れないんだ!!」

「あの人達……」

「言ってやるな。哀れになるだけだろ」

「そうだね……」

会話をしているうちに身支度を済ませ、窓を開ける。窓の鍵も電波式の為、外からでも鍵がかけられる。

……つまり、わざわざ馬鹿が出迎えてくれる玄関から出る必要は全く無い。

「さ、行こうぜ綾香」

騎士のように、片手を差し出す。事実、俺はある意味騎士だ。綾香を守る、という意味だが。

「エスコート……よろしく……」

「任せておけ。校長室へとご案内しよう」

「鏡夜の部屋じゃ……無い……」

「まあな」

クスクス笑いながらも、綾香は俺の手をとってくる。それを確認した俺は、靴を履き、窓に鍵をかけた後校長室に向かって駆け出した。

倫理委員会？空気読め。（後書き）

みんな嫌いなアテナバーン。光神化＋地獄の暴走召喚で簡単にワンキルが出来るという。

そして、わざわざダイレクトアタックしなくても勝てた（アテナでスペルビアかゼラートを墓地のモンスター一体と入れ替えたらバーン効果でその時点で勝利していました）のにわざわざダイレクトアタックしてしまう綾香……

とりあえず天使族は自重しなきゃいけないと思うんだ。代行天使とか。

そして……伏線も何もなく急に出て来た設定ですが……すみませんでしたあああ！！

元々未来予知にも似た能力は綾香にある設定だったのですが、ニュータイプ↓宇宙に行っていないので進化してない

運命崩し↓真庭自重

運命を操る程度の能力↓どこのおぜうさま

となり、こういう結果に……

俺のネタ脳よ……働け。

そして、過去編をどこで入れようかな……

恐らく次回は決闘はありません。では、また次回。いつになるかわかりませんが。

制裁デュエル？そんなもの素直に俺が許すと思ってる？（前書き）

倫理委員会フルボッコ（笑）

制裁デュエル？そんなもの素直に俺が許すと思ってる？

「……で、言いたい事はそれだけか？無能共」

原作通り俺達全員が呼ばれ、なんか怒られたんだけど……何？この屑ども。無駄な時間になりそうだな、これは。

「む、無能とはなんなノーネ」

「一生徒のくせに生意気だぞ！！その発言、撤回しなければ退学にするぞ！！」

「流石の私でも無能とは聞き捨てなりませんね……」

何か言っているのを無視して俺はテープレコーダーの再生ボタンを押す。そして、流れてくるのは我らが若本さんの声。

『私を雇ったのは、デュエルアカデミアのクロノスという教員だ。何でも、遊城十代という小僧を潰したいようだったなあ』

ここまで流れた所で停止ボタンを押す。どうやら効果は十分だったらしく、無能は全員固まっていた。

「ね、捏造だ！！」

訂正、無能ではなくただの屑のようだ。

「何故捏造と決めつけられる？俺が捏造した、なんて証拠はどこにも存在しない。そうだろう？無能、いや屑の集まりである倫理委員会（笑）さん？」

「だ、誰が（笑）だ!!」

「事実だろう？ そうやって無理やり人を学校から排斥しようとする、貴様ら倫理委員会なんて（笑）で十分だよ。後、鮫島校長。 さっさと代償を寄越して欲しいんだけどな」

もう敬語なんざ使う必要なんてない。わざわざ無能でなおかつ格下に使ってやる敬語なんて俺は持ってない。

「代償？ なんの話でしたっけ？」

その瞬間、俺の中の何かが千切れた音がした。

ポケットから『通話中』と表示されている携帯を取り出し、その相手に向かって話しかけた。

「……聞いてたか、海馬？」

『ふうん。信じたくはないがどうやら報告は本当の事らしいな』

さあ、断罪の時間だよ、無能達。

「……で、結論を言おう」

海馬の声が流れた後、俺と綾香だけが部屋に残り、他のメンバーを外に出した。

そして、十代の部屋に集まって今から倫理委員会と校長とのOHA NASHIで決まった事を十代達に話す所だ。

「まず十代。お前には賠償金として1000000DPが学園から支

払われる。命がけのデュエルをしたには少し少ないかもしれないが、許してくれ」

この話は素直に通った。海馬——つまりデュエルアカデミアのオーナーが聞いている、という事もあり、今までの話が何だったんだ、と言いたいくらい早く決まった。

それでも額を洩る校長と倫理委員会だったが、海馬の一喝でこの額になった。

それでも少ないと思うのだが——まあ、それはそれでいい。

「いや、十分だぜ！で、退学の件は——」

「それは消えた。だが、当然俺達にも罰はある。ここにいる全員——明日香も含めて、全員レポート五枚に反省文四百字詰め原稿用紙一枚。それを来週までに出すことがまず決まった」

これも俺が素直に進言した。自分達も校則を破ったのだから罰が必要だろ、と。そうでなければいけない、と。

それでも無茶な罰が出る事もなく、普通の罰が出たのは嬉しい誤算だった。やはり、海馬がいるのといかないのでは大人達の態度がまるで違うな。

「そして——もう一つ、見せしめとしてだが制裁タッグデュエル、というのが開かれる。だが、制裁というのは名前だけの、ただのタッグデュエルだから気にはしなくていい」

「それに勝ったらどうなるんスカ？」

「勝てば二回月一試験免除、負けても次の月一試験免除だ。だが、やはり勝った方がおいしいだろうな」

これは、校長側から言われた。そして報酬も。どうせ過去のサイバ——流使いでも呼んで来て俺を叩き潰したいからの理由だろうが……

別に勝てるし問題ないからオーナーした。

「以上だ。何か質問はあるか？」

そう尋ねると、一人のでかいのがおずおずと手をあげた。確か、名前は一――

「前田。何かあるか？」

「いや、なんで海馬社長の電話番号をしってるかというのと、受験番号“0”番ってなんなのか聞きたかっただけなんだな」

……鋭いな。

「悪いが、それは教えられない。最初から話し出すとかなり面倒くさい事になるし、それを話してしまうと俺も面倒なことになってしまうんだ。だから、すまない前田」

「わかったんだな。余計な詮索はしないでおくんだな」

そう言って、素直に引いてくれる前田。ヤバイ、いい奴だ、こいつ。

「ありがとな、前田。礼は後で必ずする」

「礼なんていいんだな。それよりも、その『制裁タッグデュエル』というののルールを教えて欲しいんだな」

「ああ、まず――」

そこからは説明タイムに入り、説明が終わった時点で俺は綾香と共に十代の部屋を後にした。

制裁デュエル？そんなもの素直に俺が許すと思ってる？（後書き）

次回、タッグデュエルにおいて有り得ない攻撃力が降臨します……
今執筆中なので早ければ明日には投稿出来ます。

これが、俺の持てる全てだ!! (前書き)

これはひどい (笑)

これが、俺の持てる全てだ!!

「お疲れ様、十代」

原作通りに迷宮兄弟をユーフォロイド・ファイターで倒した十代達。
そして、次は俺達の番。デッキ？鬼畜デッキを用意したよ。

「じゃ、行こうぜ綾香」

「うん……」

じゃ、さっさと叩き潰しますか。

「貴様か、亮を変えた、という決闘者は……」
デュエリスト

「私達が……貴方を倒す!!」

……うん、なんな暑苦しいな。弟子の敵討ちってか？なんかもう涙
が出そうだよ。

その行為の無駄度に対して。

「言いたい事は言い終わったか？」

「……なんだと？」

「言いたい事は言い終わったか、と聞いている。お前も決闘者なら、
デュエル決闘で語れ」
デュエリスト

「生意気なガキね……」

「生意気なのは貴女……叩き潰してあげる……」

「「「^{デュエル}決闘！！！」」」

「先攻は私……ドロー……サイバー・ラーヴァを召喚……」

「サイバー（……）だど！？なんだ、そのサイバーモンスターは！？聞いた事が無いぞ！！」

いや、当たり前です。恐らくこの世界ではまだないカードだし。ちなみにこのサイバー・ラーヴァ、原作効果の鬼畜モンスターだ。

「……カードを一枚伏せて、ターンエンド……」

鏡夜& amp; 綾香（綾香ターン）

LP8000

場

サイバー・ラーヴァ（攻撃力400）

伏せカード一枚

手札6枚↓4枚

ちなみに全員先攻一ターン目には攻撃できないという安心決闘。アテナバーンならワンキルだな……

それはいいとして、さあ、どうでるサイバー流！！

「俺のターン、ドロー！！サイバー・ドラゴンを特殊召喚！！」

「相手の手札からモンスターが特殊召喚されたから……私もこのカードを特殊召喚……現れて……サイバー・ダイナソー……」

同時に現れる機械の竜と恐竜。だが、攻撃力は恐竜の方が上。

「……また俺達の知らないサイバーモンスター……」

「サイバー・ダイナソーは相手がモンスターを手札から特殊召喚した時に特殊召喚出来る……」

「くっ、私はサイバー・フェニックスを守備表示で召喚！！カードを一枚伏せてターンエンド！！」

サイバー流二人（女ターン）

LP8000

場

サイバー・ドラゴン（攻撃力2100）

サイバー・フェニックス（守備力1600）

伏せカード一枚

手札6枚↓3枚

普通の出だしだな。俺も無難に行くがな。

「俺のターン、ドロ。カードガンナーを攻撃表示で召喚。効果で、デッキトップからカードを三枚墓地に送り、攻撃力を1500ポイント上昇させる」

落ちたのは聖バリ、オーバーロード・フュージョン、サイバー・ドラゴン……少し痛いな……

「魔法カード、天使の施しを発動。カードを三枚引いて二枚捨てる。カードを一枚伏せてターンエンドだ」

綾香&鏡夜（鏡夜ターン）

LP8000

場

サイバー・ラーヴァ（攻撃力400）

サイバー・ダイナソー（攻撃力2500）

カードガンナー（攻撃力400）

伏せカード二枚
手札6枚↓4枚

「私のターン、ドロー。手札から魔法カード融合を発動。手札のサイバー・ドラゴンと場のサイバー・ドラゴンを融合。現れろ、サイバー・ツイン・ドラゴン」

やはり持っていたか、融合を。

となるとここでの融合は正解だな。サイバー・ドラゴンのままだとサイバー・ダイナソーに戦闘破壊されるしな。

「私はサイバー・ヴァリーを召喚。カードを二枚伏せてターンエンドだ」

サイバー流二人（男ターン）
LP8000

場

サイバー・ツイン・ドラゴン（攻撃力2800）

サイバー・フェニックス（守備力1600）

サイバー・ヴァリー（攻撃力0）

伏せカード三枚

手札6枚↓1枚

相手は態勢を整えてきたな。まあ、次の綾香のターンから攻撃が出来るようになるからまあ当然か。

「私のターン……ドロー……永続魔法、未来融合ーフューチャー・フュージョンーを発動……キメラテック・オーバー・ドラゴンを選択し、デッキからサイバー・ドラゴンを含む27枚のカードを墓地

に送る……手札からカードガンナーを召喚……伏せてあった罠カード、激流葬を発動……フィールド場のモンスターカードを全て破壊……」

「「なんだと（ですって）！！？」」

サイバー流二人の驚きも空しく、強大な水の流れにより破壊されていく全てのモンスター。そして、

「カードガンナーの効果……このカードが破壊された時、デッキからカードを一枚ドロ……二枚破壊されたから二枚ドロ……さらに、サイバー・ラーヴァの効果……デッキからサイバー・ラーヴァを特殊召喚……カードを三枚伏せ、ターンエンド……」

綾香&鏡夜

LP8000

場

サイバー・ラーヴァ（攻撃力400）

未来融合―フューチャー・フュージョン―（キメラテック・オーバー

ー・ドラゴン選択、0ターン経過）

伏せカード4枚

手札4枚↓1枚

綾香がやりきったような表情をしてくる。当然だ。仕込みは終わったのだから。

「雑魚モンスターを場に残したのは間違いだったわね。私のターン、ドロ……魔法カード、強欲な壺を発動！デッキからカードを二枚ドロ……私はサイバー・プロト・ドラゴンを召喚し、魔法カード融合を発動！現れる、サイバー・ツイン・ドラゴン……」

再び現れる双頭の機械竜。それにしてもサイドラ三枚パワボンなんて鬼畜は来ないな。やはりあれが出来るのは亮だけか。

「バトルよ!! サイバー・ツイン・ドラゴンでサイバー・ラーヴァに攻撃!! エヴォリユーション・ツイン・バースト!!」

「サイバー・ラーヴァの効果……このカードが破壊された時、そのターンの戦闘ダメージを0にし、デッキからサイバー・ラーヴァを特殊召喚する……でも、私のデッキにサイバー・ラーヴァはもうない……」

「くっ……ターンエンド!!」

サイバー流二人(女)

LP8000

場

サイバー・ツイン・ドラゴン(攻撃力2800)

伏せカード三枚

手札4枚↓3枚

「俺のターン、ドロ」

さて、蹂躪といこうか。

「伏せておいたりバースカード、第六感を発動。……綾香、出目は？」

「……4と6……」

「4と6を宣言する。さあ、賽子をふれ」

「そんな物当たるわけ……嘘……」

「出目は4、よって4枚ドロし4枚デッキトップから墓地送る。伏せてあった魔法カード、ハリケーンを発動。フィールド場の全て

の魔法、罨カードを手札に戻す」

「リバース罨、和睦の使者！！このターン」

「甘い。カウンター罨、魔宮の賄賂。和睦の使者を無効にし破壊する。だが相手はカードを一枚ドロウ出来る。さあ、ドロウしろ」

「くっ……ドロウ！！」

全ての壁は消えた。後は――ボコボコにするのみだ。

「永続魔法、未来融合―フューチャー・フュージョン―を発動。キメラテック・オーバー・ドラゴンを選択し、デッキからサイバー・ドラゴンを含む機械族26枚を墓地に送る」

「また無駄な事を……」

無駄？悪夢の始まりの間違いだろ？

「魔法カード、強欲な壺を発動。デッキからカードを二枚ドロウ。魔法カード、流転の宝札を発動。デッキからカードを二枚ドロウ。さらに魔法カード埋葬呪文の宝札を発動。墓地の天使の施し、パワーボンド、強欲な壺を除外し、二枚ドロウ」

よし、これでキーカードは全て揃った。揃いすぎのような気もするが、気にはしない。

「速攻魔法、サイバネティック・フュージョン・サポートを発動。ライフを半分払い、このターン墓地のカードも融合素材と出来る。魔法カード、パワーボンドを発動！！説明はいらないよな、サイバー流？俺は手札の機械族三枚と墓地の機械族モンスター57枚を融合！！破壊を生み出す機械の竜よ、今こそ降臨して敵を殲滅せよ！！来い、キメラテック・オーバー・ドラゴン！！」綾香&mp;鏡夜（鏡夜ターン）

場

キメラテック・オーバー・ドラゴン（攻撃力48000↓96000）

俺の場に現れるのは、60個の首と頭を持つ禍々しい機械の竜。このままでも十分決闘は終わる。だが、まだ終わらんよ！！！！

「速攻魔法、リミッター解除を二枚発動！！キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力を二倍にする！！魔法カード、魔法再生を二枚発動！！墓地から、リミッター解除を二枚手札に加え、そのまま二枚のリミッター解除を発動！！」

綾香&鏡夜

場

キメラテック・オーバー・ドラゴン（攻撃力96000↓192000↓384000↓768000↓1536000）

……ついに七桁だよ、攻撃力。

「あ……あ……」

「まだだ。速攻魔法ハーフ・シャットを発動し、サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力を半減させ、戦闘耐性を持たせる」

サイバー流二人

場

サイバー・ツイン・ドラゴン（攻撃力2800↓1400）

「バトルだ！！キメラテック・オーバー・ドラゴンでサイバー・ツイン・ドラゴンに攻撃イ！！エヴォリユーション・レザルト・バースト！！ロクジュウレンダァ！！！！」

「「う……うわあああああ！！！！」」

サイバー流二人

LP8000↓—92068000

周りが全員呆然としている。まあ、仕方無いだろう。

先程も一般的に見たらかなり攻撃力の高い決闘だった。だが、俺が出したモンスターは文字通り桁が違う。三桁くらい。

「……上手く、いったね……」

「ああ」

かく言う俺自身驚いている。正直ここまでの攻撃力は狙ってなかったから。

でも、今回の決闘^{デュエル}一番の功労者は――

「ありがとな、綾香」

「当然の事……気にしないで……」

真っ赤な顔を俺からそらす我が婚約者に違いない。

あのカウンター罠が無かったら、確実に負けてたし。

「じゃ、帰るか」

「……そうだね……」

そう言葉を残して、俺達はイエローの自室に向かって歩き始めた。茫然自失としている他の者を無視して。

これが、俺の持てる全てだ!! (後書き)

今回のタッグデュエルは墓地、場共通のライフ8000、最初のターンは全員攻撃出来ない、という設定です。

それにしても……60連打……いや、待てと言いたくなりますね。タッグデュエルならではの攻撃力、と言えるでしょう。

では次回。いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

桜野綾香の暴走（前書き）

別に歌という意味ではありません（笑）

桜野綾香の暴走

「……ご主人様^{マスター}、好き……」

「……どうしてこうなった……」

俺の部屋。そこでは惨劇が繰り広げられていた。

「うう……もう、絶対に綾香に決闘は挑まないぜ……」

十代は倒れながらそう言い残し、

「綾香の……外道……」

明日香はかろうじて壁に寄りかかりながらそう言い、

「もう……何もかもどうでもいい……」

亮ですら両手を地面につきながらそう言い倒れる。

誰だ。本当に誰だ。容赦なくぶん殴ってやるから教えてくれ。

「誰が……綾香に炭酸飲料を飲ませたんだあああ!」

きっかけは、俺が自分の部屋に全員を読んで食事会圏決闘大会を開

こうとした事だ。

十代や明日香、亮、順、三沢を誘って全員の了解を得て夜。
俺の部屋は、一種の宴会場と化していた。

「なあ、鏡夜」

「どうしたんだ、十代？」

「この平行世界融合ってカードなんだけど、売ってくれないか？」

「高いぞ？そのカード、希少だからな」

「う……出世払いで頼む」

「はいよ」

「鏡夜、このカードなんだが……」

「ああ、ドラグニティアームズーレヴァティーンか。それがどうした？」

「これを俺に譲ってくれないか？これと俺の光と闇とのコンボが強力なんだ」

「あいよ。代金の詳細はお前のPDAに送っておくから、入金よろしく」

「……感謝する」

「鏡夜。俺に何かお勧めのカードはないか？」

「うーん、三沢、お前は確か幼じーピケルが好きだったな」

「何かあられもない疑いをかけられた気がするが、まあそうだ」

「ならいつそのこと魔法使いデッキを組んでしまえばいいじゃないか。例えばこのカードはどうだ」

「何々——魔法族の里にマジシャンズ・クロス、ワンダーワンド？」

「ああ。もしデッキを組みたくなったら言ってくれ。相場よりは安く売ってやるよ」

「ああ、また考えておくよ」

このように、みんなでワイワイ決闘談義をしながら、購買で買いあさった食べ物食って楽しんでた、そんな時だった。

「……私も、構って……ご主人様……」
悪魔の声が聞こえてきたのは。

side 綾香

「……つまらない……」

「何がつまらないの、綾香？」

「明日香……」

独り言だったのに、いつの間にか漏れてたみたい……別にいいけど……

「明日香には、関係のないこと……」

「鏡夜が構ってくれないから、とか？」

「……」

軽く睨むと、明日香はしてやったり、という顔をしてくる……
腹がたつから飲み物でも飲んで気を紛らわせようと思い、近くに
あるコップを手にし、少しずつ口の中に入れる……

そうしたら、何故だか気が大きくなって来て、体もポカポカして
きた……

だから、別に許せると思う……

「……私も、構って……ご主人様……」
マスター

なんて、事を言っちゃっても……

side 綾香 end

「……悪いが、今日の決闘大会は中止だ。全員、部屋に戻ってくれ」「どうしたんだ、いきなり？」

十代が訝しむのも仕方のない事だとは思うが、先程綾香が口走った事で俺の中の警報が鳴り響いていた。

今の綾香は非常にヤバイ。兎に角、早く部屋を出さないと。

「兎に角、部屋に戻ってくれと嬉しい。頼む」

「わかった。お前にもお前の事情があるようだから、この事は気にしないで置いてやる」

「わかった。また魔法使い族デッキを作る事になったら連絡する」そう言っ、文句一つ言わずに出て行ってくれる順と三沢。こいつらは本当にいい奴だと思う。

それに比べて、

「別にいいだろ、部屋にいたって」

「十代の言う通りよ。何も追い出さなくたっていいじゃない」

「それに、理由の説明もされてないしな」

この三人は何なのだろうか。

まあ、今はそんなどうでも良いことを思っている時間じゃない。綾

香が暴走する前に帰らせないとヤバイ事になる。それだけは避けた
い所だ。

「いいか。今、綾香は俗に言う酔っ払っている状態だ。だから、さ
つさと帰ってくれないと暴走するんだよ」

「でも、お酒なんて持ってきてないわ」

「でも、炭酸はあっただろ？」

「ああ。あったな。——待て。ということは綾香は」

察しの良い亮は気がついたみたいだな。

「多分、今亮が思っている事で正解だ。綾香は——炭酸で酔うんだ
よ」

昔から一緒に暮らしているからだが、俺の部屋に一切炭酸飲料は無
い。綾香が酔うからだ。

過去、綾香が酔っ払った時におふげだと思いが俺に抱きついて来
た女子が、地面に埋もれるという事件があった。俺としては、あの
ような悲劇は二度と起こしたくない。

「……ご主人様……早く私に構って……」
マスター

「はいはい。わかったよ。そういう訳で早く部屋に——」

「……早く、出て行くか私に決闘で叩きのめされるか、好きな方を
選んで……」

綾香の挑発を聞いた三人が、静かに決闘盤を構える。って、お前ら、
まさか

「いいぜ。前からお前と決闘したかったんだよな」
デュエル

「それだけ馬鹿にされたらやるしか無いわね……」

「……裏サイバー流の切れ味、思い知るか？ 桜野」

止めろ。お前ら今の綾香と決闘するのは止めろ。絶対にトラウマになるから。

「一人ずつ、順番に叩きのめしてあげる……来なさい……」

「なら、まずは俺が行くぜ！！」

デュエル
「決闘！！」

で、結果だけを言おう。

綾香対十代は、一ターン目に十代が融合でテンペスターを召喚し、二枚伏せてターンを終了した。が、完全に酔っ払っている綾香は、一ターン目から容赦しなかった。

おろかな埋葬で電池メン単三型を墓地に送り、充電池で500ライフを支払い蘇生させ、地獄の暴走召喚で三体出し、漏電を使い十代のフィールド場のカードを全て破壊した。

伏せは攻撃の無力化とブラフの融合だったので止められず、攻撃力3000となっている電池メン単三のダイレクトアタックで5000のオーバークイルになった。

綾香対明日香では、明日香はエトワール・サイバーを召喚しカードを二枚伏せるに止まったが、ここでも綾香は暴走した。

天使の施しで手札のスペルビアとフェアリー・アーチャーを墓地に

送り、トレード・インで墮天使ゼラートを墓地に送ってからの光神化でアテナを召喚してからの地獄の暴走召喚で三体のアテナが降臨してまず600ダメージ、シャインエンジェルを召喚してさらに1800ダメージ、アテナの効果でシャインエンジェルとフェアリー・アーチャーを入れ替えて1800ダメージと、合計4200ダメージをバーン効果だけで与え終了した。

最も可哀想だったのは亮だろう。彼は何も出来なかったのだから。

『私のターン、ドロロー……王立魔法図書館を守備表示で召喚し、魔法カード強欲な壺を発動……デッキからカードを二枚ドロロー……王立魔法図書館に魔力カウンターが一つ乗る……魔法カード、流転の宝札を発動……デッキからカードを二枚ドロロー……王立魔法図書館に魔力カウンターが一つ乗る……魔法カード、二重召喚を発動し、鉄の騎士ギア・フリードを召喚……魔法カードが発動されたので王立魔法図書館に魔力カウンターが一つ乗る……王立魔法図書館の効果、三個の魔力カウンターを取り除き一枚ドロロー……装備魔法、蝶の短剣―エルマーをギア・フリードに装備……ギア・フリードの効果、このカードにカードが装備された時、そのカードを破壊する……蝶の短剣―エルマーの効果、このカードが破壊された時、このカードを手札に戻す……そして、王立魔法図書館に魔力カウンターが一つ乗る……（中略）王立魔法図書館の効果で一枚ドロロー……そして、この瞬間手札にエクゾディアパーツが全て揃ったので私の勝ち……』

亮は何も言えずただ呆然としていた。
そして、冒頭へと戻る。

「……ご主人様……私を……虐めて……？」

綾香が緩んだ顔で言うてくる。だが、今は出来ない。周りに十代達がいるからだ。

「……十代達は、どうするんだ……？」

「……こうする……」

十代に綾香が近寄った瞬間、一瞬の早技で脳を揺らしたのか、十代が倒れる。他の二人も、同じように気絶する。

その後、気絶した三人を綾香は窓から放り捨てた。

「……これで、よし……」

「だから、何もよくない——ッ!!」

痺れをきらした綾香に口を塞がれ、何か変なモノを口に入れられる。そのまま、抵抗する事も出来ず、綾香に口の中を蹂躪される。そのナニかが完全に溶けきった後、綾香は静かに口を離した。

「……何を、飲ませたんだ……？」

「すぐにわかる……」

なにがだ、と口を開こうとした瞬間、耐えきれない征服欲に襲われた。

綾香を犯したい。滅茶苦茶にして傷つけたい。自分のモノだという証拠を残したい。そんな征服欲を理性で抑えつける。

「今、飲ませたのは、最高の効果を持った媚薬……その上、近くにいる女性に対する征服欲を出す薬……あんな摂取の仕方をしたんだから、私だって効いてる……さ、ご主人様……マスター……私を……メチャメチャにして……？」

そう甘美な声で囁きかけてくる綾香の姿を見て、とうとう俺の理性が陥落した。

気がついたら翌日になっており、しかも筋肉痛でその日の授業を休まなければならなくなったという事をここに記述しておこう。

桜野綾香の暴走（後書き）

……やっちゃったなあ……

三沢はこれから魔法使い族デッキを使わせていくと思います。にしてもワンダーワンドって強いですよ。攻撃力を500上げれる上に装備モンスターを墓地に送って二枚ドロ……うん、強力。

そして亮との戦いですがわからなかった人の為に少しだけ追記しておきます。

王立魔法図書館

効果モンスター 星4／光属性／魔法使い族／攻 0／守2000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを1つ置く（最大3つまで）。このカードに乗っている魔力カウンターを3つ取り除く事で、自分のデッキからカードを1枚ドロ―する。

蝶の短剣―エルマー

装備魔法（禁止カード）

装備モンスターの攻撃力は300ポイントアップする。モンスターに装備されているこのカードが破壊されて墓地に送られた時、このカードを持ち主の手札に戻す事ができる。

鉄の騎士ギア・フリード

効果モンスター 星4／地属性／戦士族／攻1800／守1600
このカードに装備カードが装備された時、その装備カードを破壊する。

王立魔法図書館とギア・フリードが場にある状態でギア・フリードにエルマを装備させるとギア・フリードの効果でエルマが破壊されますがエルマ自身の効果で手札に戻ります。この時王立魔法図書館に魔力カウンターが乗ります。これを無限に繰り返す事で無限ドローになり、結果的にエクゾディアが揃う、というわけです。

次回投稿はいつになるかわからずまだ一文字も書いていないのでどうなるかわかりませんがまたお会いしましょう。

三沢（紳士）の本気か……（前書き）

ネタ率多し（笑）

三沢（紳士）の本気か……

「いくぞ！！俺様のターン！！」

……今から始まるのか。間に合って良かった……

「鏡夜が……遅れるせい……」

「五月蠅い、綾香」

「事実……なんで急にデッキを作ろうとするかな……」

溜め息をつく我が婚約者。まあ、事実だけどね？

なんか急に青眼軸のデッキが作りたくなったんだから、仕方ないじゃないか。

「俺は地獄戦士を召喚！！カードを三枚伏せ、ターンエンドだ！！」

万丈目

LP4000

場

地獄戦士（攻撃力1200）

伏せカード三枚

手札6枚↓2枚

いつものような中二デッキ。だから明らかにアマゾネスの戦士ry満足げな万丈目だが、その程度で三沢が崩れると思うなよ？

「俺のターン、ドロー！！手札から永続魔法魔法族の結界を二枚発動し、マジカル・コンダクターを召喚！！さらに魔法カードテラ・フォーミングを発動！！デッキから魔法族の里を手札に加え、フィールド魔法、魔法族の里を発動！！」

やはり来てたか、里。となると万丈目には厳しい戦いになるな。

「な、なんだこのフィールド魔法は！！」

「魔法族の里は、魔法カードの使用を制限するフィールド魔法だ。このカードは、自分フィールド場にのみ魔法使い族が存在する時、相手の魔法カードの使用を封じる」

「なんだと！？」

これでまずは魔法を封じ込めた。だが、まだ終わらない筈だ。

「魔法カード、魔力掌握を発動。」

魔法族の結界に魔力カウンターを一つ乗せ、デッキから魔力掌握を手札に加える。マジカル・コンダクターにも魔力カウンターが二つ乗る。さらに魔法カード、壺の中の魔導書を発動。互いのプレイヤーはデッキからカードを三枚ドロウする。マジカル・コンダクターの効果でこのカードに魔力カウンターを二つ乗せる。魔法カード、流転の宝札を発動。デッキからカードを二枚枚ドロウする。またマジカル・コンダクターに魔力カウンターが二つ乗る。マジカル・コンダクターの効果でこのカードの魔力カウンターを二つ取り除き、手札から見習い魔術師を特殊召喚！！見習い魔術師の効果で先程魔力カウンターを乗せた魔法族の結界に魔力カウンターを乗せる。さらに、手札から速攻魔法地獄の暴走召喚を発動。デッキから見習い魔術師を二枚特殊召喚する。だが、万丈目、お前も地獄戦士を可能な限り特殊召喚しろ」

「……くっ！！」

「見習い魔術師の効果で、先程魔力カウンターを乗せてなかった魔法族の結界に魔力カウンターを二つ乗せる。」

LP4000

場

見習い魔術師×3（守備力800、攻撃力400×2）
マジカル・コンダクター（攻撃力1700、魔力カウンター×8）
魔法族の結界×2（魔力カウンター×2）

万丈目

場

地獄戦士×3（攻撃力1200）
伏せカード二枚

……万全の態勢だな……三沢。

「バトルだ！マジカル・コンダクターで地獄戦士に攻撃！！コンダクト・ショット！！」

……うわ、ネーミングセンスねえ……

万丈目

LP4000↓3500

「くっ……だが、地獄戦士の効果、この戦闘で受けた戦闘ダメージを貴様も受ける！！」

「くっ……この程度は必要経費だ！！」

三沢

LP4000↓3500

「カードを一枚伏せ、流転の宝札の効果で手札を一枚墓地に送る。
ターンエンドだ」

「エンドフェイズ時にリバースカード、オープン！！リビングデッ

ドの呼び声！！この効果で、俺は墓地の地獄戦士を攻撃表示で特殊召喚する！！」

三沢

LP4000

場

見習い魔術師×3（守備力800、攻撃力400）

マジカル・コンダクター（攻撃力1700、魔力カウンター×4）

魔法族の結界×2（魔力カウンター×2）

フィールド魔法、魔法族の里

伏せ一枚

手札6枚↓1枚

……なんというチートドロ。

これ、大嵐でも来ない限り崩れないぞ？

「俺のターン、ドロー！！リバース罫、奇跡の軌跡を発動！！相手はカードを一枚ドローするが、俺の場の地獄戦士の攻撃力を1000ポイント上昇させ、一バトルフェイズ中に二回攻撃出来るようにする！！その変わりダメージが与えられなくなるが、生贄にしてみえれば問題ない！俺は、奇跡の軌跡を発動した地獄戦士を生贄に炎獄魔神ヘル・バーナーを攻撃表示で召喚！！」

「ふ、甘いぞ万丈目。リバースカード、オープン！！黒魔族復活の棺！！この効果で俺はお前のヘル・バーナーと俺の場の攻撃表示の見習い魔術師を墓地に送り、墓地の混沌の黒魔術師を攻撃表示で特殊召喚する！！」

「な、なんだと！？」

うわ、おまけに墓地に送っていたのはそのカードですか……三沢さん。

「混沌の黒魔術師の効果、墓地から流転の宝札を手札に加える」
「チイツ、バトルフェイズ！！地獄戦士で見習い魔術師に攻撃！！」
「くっ……見習い魔術師の効果、デッキから水晶の占い師をセットする。さらに魔法族の結界に魔力カウンターが乗る」

三沢

LP 3500 ↓ 2700

……見習い魔術師って本当に見習いじゃないよな……執念深き老魔術師にも繋げられるし。

「もう一体の地獄戦士で見習い魔術師に攻撃！！」

「見習い魔術師の効果、デッキから水晶の占い師を特殊召喚する。魔法族の結界に魔力カウンターも乗る」

「くっ……カードを二枚伏せ、ターンエンドだ！！」

万丈目

LP 3500

場

地獄戦士×2（攻撃力1200）

伏せカード二枚

手札6枚 ↓ 3枚

詰んだな。多分あの伏せカードは聖バリかなんかだと思っし。

三沢笑ってるし。「俺のターン、ドロー！！ふっ、随分酷い決闘だデュエルな、万丈目」

「なんだと！？」

珍しい。あの三沢が挑発なんかするとは。カードを捨てられて相当頭にくてるのか？

「他人のカードを捨てる者に勝利の女神は微笑まないという、いい例になってるじゃないか」

「く……きつ、貴様あ!!」

「水晶の占い師を反転召喚!! 効果で、デッキトップから二枚めくり、好きな方を手札に加え、好きな方をデッキの一番下に戻す。カードはトリッキーズ・マジック4に執念深き老魔術師!! よって、トリッキーズ・マジック4を手札に加え、執念深き老魔術師をデッキの一番下に戻す。もう一体の水晶の占い師の効果を発動。カードはテラ・フォーミングにブリザード・プリンス。よってブリザード・プリンスを手札に加え、テラ・フォーミングをデッキの一番下に戻す。魔法族の結界の効果で、二枚の水晶の占い師を墓地に送り、合計八枚ドロ!!」

「は、八枚だと!？」

不用意に見習い魔術師を破壊したりするからだ。見ろ。先程まで三枚だった手札がなんと十三枚にまで増えているじゃないか。さらに流転の宝札まで手札にあるんだぞ？

「流転の宝札を発動し、デッキからカードを二枚ドロ。よし、準備は整った!! 手札を一枚捨て、T H Eトリッキーを特殊召喚!! 魔法カード、トリッキーズ・マジック4を発動し、二体のトリッキートークンを特殊召喚する!! 速攻魔法、ディメンション・マジックを発動!! 俺の場のトリッキートークンを生贄に捧げ、魔法の国を統べる白き姫、今こそ降臨して我を助けよ!! 出でよ、白魔導師ピケル!! ディメンション・マジックの効果で万丈目、お前の場の地獄戦士を破壊する!! さらに、もう一枚のディメンション・マジックを発動!! 俺の場のトリッキートークンを生贄に捧げ、魔法の国に君臨する黒き姫、今こそ降臨して敵を砕け!! 来い、黒魔導師克蘭!! ディメンション・マジックの効果でお前の場のもう一体

の地獄戦士を破壊する!!」

「な、なんだと!？」

「まだだ!! T H E トリックを生贄に捧げ、ブリザード・プリンセスを攻撃表示で召喚!!」

「最上級モンスターを生贄一体で召喚だと!？」

知らない人が見たらいつも驚く事。普通だと思うけどな。

「ブリザード・プリンセスが召喚されたターン、相手の魔法、罠の発動を封じる!! 凍符パーフェクトフリーズ!!」

「な、なんだと!？」

東方かよ。

「さらに、魔法カード受け継がれる力を二枚発動し、混沌の黒魔術師とブリザード・プリンセスをリリースし混沌の黒魔術師の攻撃力をピケルに、ブリザード・プリンセスの攻撃力をクランに与える」

三沢

場

白魔導師ピケル（攻撃力1200↓4000）

黒魔導師クラン（攻撃力1200↓4000）

マジカル・コンダクター（攻撃力1700）

……うっわ、酷い……

「バトルだ!! クランでダイレクトアタック!! 疾風迅雷!! プラズマザンバー・ブレイカー!!」

「う……うわああああっ!!」 万丈目

L P 3 5 0 0 ↓ — 5 0 0

「まだだ!! ピケルでダイレクトアタック!! 全力全開!! スター

ライト・ブレイカー!!」

「な……なんだとおおお!?」

万丈目

LPー500↓ー4500

うわあ、最後は管理局の白い悪魔とその嫁の必殺技ですか……
吹っ切れたな、三沢。

「鏡夜、飽きた……部屋に戻ろ……?」

「まあ、いっか。どうせ聞く気もないし」

決闘場で三沢が言っている事を完全に無視して、俺と綾香は部屋に戻る為歩き始めた。

三沢（紳士）の本気か……（後書き）

三沢は吹っ切れました。これから彼は紳士（と言う名の変態）道を貫いていくのだろうと思います。

というわけで、里お触れでした（お触れ出てませんが）みんな大好き見習い魔術師。水晶の魔術師大活躍。作者もびっくりだ。

ちなみに、奇跡の軌跡ですが……正直、適当に入れただけです（笑）では、また次回。いつになるかわかりませんがまたお会いしましょう。

バーンデツキ? 来て、マテリアル先生! (前書き)

序盤はデュエル全く関係ありません(↑え

バーンデツキ？来て、マテリアル先生！

「……………うおおおおお！！！」

走る。ひたすら走り、右手に持つ物で緑色の玉を全力で打ち返す。狙いは三沢がいない正クロス。鋭い打球がコートを突き刺し、これで勝った、と思ってしまうた。

—————が。

「クロスの確率、75パーセント」

「何いっ！！？」

予測していたかのような正確さで動いていた三沢は、さらなる打球を俺のいない側——ストレートのライン上へと狙い打ってきた。

「……………くっ！！！」

なんとかしてバックで追いつき高いロブをあげるも、既に予測されていたのか三沢は下がり、スマッシュの体勢をとっていた。

「これで終わりだ！！！」

そう、俺の計算通りに。

「……………爪を誤ったな、三沢っ！！三種の返し球『麒麟落とし』っ！！」

「なんだと！？」

決める為に飛び上がってスマッシュを打った三沢は、そのジャンプのせいで俺の打球に追いつかない。
そして――

「ゲームセットアンドマッチウオンバイ夜光！！カウント6―4！！」

「「ありがとうございますっ！！」」

本来ならどうでもいい体育の授業で繰り広げられていた、俺と三沢のテニスの試合が決着した。

「お疲れ様……はい、お茶……」

「お、ありがとな綾香」

「別に……いつものことだから……」

だから顔を真っ赤にしても意味が無いですよ、綾香さん。
ただ可愛いだけですって。

「……それにしても、凄い勝負だったわね……」

俺達の試合を見ていたらしい明日香が茫然とした表情でそう告げる。
まあ、仕方ないことだろう。

第一セット、サーブ権を奪われた俺は三沢に四本連続でウォーターフォールを打たれ、サーブだけで第一セットを失った。

それでイラついた俺は、四本連続でツイストサーブを打ち、これま

たサーブだけでゲームを奪った。

そこからは互いにサーブの見切りあいになり、第八セットまでは一進一退の攻防が続いた。

そして、天王山となった第九セット。三沢のウォーターフォールを完璧な精度で打ち返した俺は、次に浮いた球を『風林火陰山雷』の一つ、火で得点を奪うと、そのまま山で三沢のミスを誘い続け、第九セットを奪った。

だが、第十セットは終始三沢にペースを取られ続けた。トルネードスネイクとレーザービームを奥の手として残しておいたらしい三沢は、その全く同じスイングで一気に0―40にし、このまま泥沼になるかとも思った。

だが、そこで立て続けにミスをし出した三沢の隙をつき、最後は麒麟落として決めた、というわけだ。

「負けたよ、鏡夜」

「お、三沢」

駆け寄って来る三沢に簡単な挨拶をし、そこからテニス談義に移る。にしても、原作の三沢はこんなにテニスが強かったか？……謎だ。そして、俺が幾つかの技を教え、代わりに三沢にトルネードスネイクの打ち方を教えて貰っていた、そんな時だった。

「ああ、君はなんて美しいんだ！！君こそ僕の婚約者に相応しい！！」

俺の綾香に手を出すクソヤローが姿を現したのは。

「どうだい、これから僕とお茶でもグフウツ」

「綾香、大丈夫か!？」

綾香を口説いているクソヤローの頬をテニスボールで打ち抜き、急いで綾香を救出する。兎に角今は綾香をここから離れさせる事が大切だ。

「き、君は一体桜野君の何なんだ!？」

俺に打ち抜かれたクソヤロー——確か、綾小路だったか——が、頬をさすりながら此方に憤慨しながら走ってくる。おまけに右手で殴ってくるものだから一歩右に動き伸びきった右手の逆関節を極める。

「ううううっ!!う、腕が腕が腕が腕がああああっ!!」

「俺が綾香の何だって?決まっているだろ。正統な婚約者だよバカヤロー。お前こそ何なんだよ。俺の婚約者に手を出したんだ。ただですむと思うなよ?」

「き、君が桜野君の婚約者だって!!?……いいだろう、決闘だ!
!僕が勝ったらその婚約、破棄してもらおう!!」

「……………イマ、コイツハ、ナントイッタ…………?」

「……貴様、今、何て言った?」

「僕が決闘に勝ったら、その婚約を、破棄してもらおうと言ったんだ」

その瞬間、俺の中の何か大事な線が完全に切れた音がした。

「……で、なんでテニス？」

「なんでも鏡夜が、徹底的に叩き潰すから得意な二つで戦ってやるって言ったら、テニスと決闘って事になったみたいだわ」

「馬鹿なのか、あいつは……」

なんか酷い事を言われてる気がするが、気になんてしない。

「見ててくれ桜野君！！僕があいつに勝ち、君の王子様になる所を！！」

ああ、うざい。もう、見る気もしないくらい。

「……三沢、コールを」

ちなみに審判は三沢に頼んだら二つ返事で引き受けてくれた。ありがたい話だ。

「ああ。ワンセットマッチ夜光サーブスプレイ、お願いします」

「「お願いします！！」」

お前みたいな野郎に打たせる球なんて、一球たりとも持っていない。圧倒的な実力差と共にそれを今から教えてやるよ！！

「……ゲームセットアンドマッチウオンバイ夜光、カウント6―0
……」

「そ、そんな馬鹿な……この僕が、一点たりとも取ることが出来な
いなんて……」

ふう、少しは落ち着いた。

サーブは最後以外全てタンホイザーサーブ、レシーブは全て『雷』
で文字通り一球たりとも触らせ無かったからな。

最後はツイストサーブで顔面に思いつきり当ててやったし、いい気
味だ。

「くっ……デュ、デュエルだ!! デュエルなら僕は君なんかになんか負け
はしない!!」

そう言って、すぐにデュエルディスクを構える綾小路。それを見て、
俺はポケットからデッキを取り出し、決闘盤にセットする。

今回選んだデッキは、兎に角相手に精神的なダメージを与える事を
優先したデッキ。どこまでコイツが精神を保ってられるか楽しみだ。

「^{デュエル}決闘!!」

side 綾香

「俺のターン、ドロー。魔法カード、強欲な壺を発動。デッキから

カードを二枚ドロウする。魔法カード、終焉のカウントダウンを発動。ライフを2000払う」

鏡夜

LP4000↓2000

今回の鏡夜のデッキは終焉カウント……鏡夜の持つデッキの中でも相手に精神的ダメージを与えるデッキ……でも、そのデッキを使ってくれて、嬉しい……だって、それくらい、鏡夜は相手に対して怒ってるって事だから……

「魔法カード、一時休戦を発動。互いのプレイヤーはデッキからカード一枚ドロウし、次の相手ターン終了時までお互いに相手に与えるダメージは0になる。素早いモモンガを守備表示で召喚し、カードを一枚伏せてターンエンドだ。この瞬間、終焉を告げる炎が一つ灯る」

鏡夜

LP2000

場

素早いモモンガ（守備力100）

伏せカード一枚

手札6枚↓4枚

「僕のターン、ドロウ！！僕は、メガ・サンダーボールを攻撃表示で召喚し、素早いモモンガに攻撃！！」

当然鏡夜は何もすること無く、素早いモモンガは破壊される……

「素早いモモンガの効果、このモンスターが破壊され墓地に送られ

た時、ライフを1000ポイント回復し、デッキから同名カードを可能な限り裏側守備表示でセットする」

「な、なんだって！？それじゃ、僕の攻撃は――」

「ああ、完全に無駄、いや俺の手助けになったな。ありがとうさん」

鏡夜

LP2000↓3000

鏡夜、珍しく挑発してる……よっぽど頭に来てるんだ……よく見ると、青筋が浮かんで……

「くっ、カードを一枚伏せて、ターンエンドだ――！」

「この瞬間、終焉を告げる二つめの炎が灯る」

綾小路

LP4000

場

メガ・サンダーボール（攻撃力750）

伏せカード一枚

手札7枚↓5枚

終焉のカウントダウン、ニターン経過

「俺のターン、ドロ―。俺は、場の素早いモモンガを生贄に捧げ、マテリアルドラゴンを召喚」

……これで、元々万に一つも無かった綾小路の勝率が完全に消滅した……

「マテリアルドラゴンでメガ・サンダーボールに攻撃」

「甘いね!! リバースカードオープン!! 魔法の筒!! マテリアルドラゴンの攻撃力、即ち2400のダメージを受けて貰うよ!!」

……甘いのは、どっち……?」

鏡夜

LP3000↓5400

「馬鹿な……どうして魔法の筒でダメージを受けてないんだ……?」
「マテリアルドラゴンの効果、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、ライフポイントにダメージを与える効果は、ライフポイントを回復する効果になる。お前の魔法の筒のダメージは効果ダメージ、よって回復になっただけだ」

前フルバーンで鏡夜とデュエルしたら、先攻一ターン目でこのモンスターを出されて酷い目にあったことがある……それくらい、このモンスターはバーンには強い……

「カードを一枚伏せてターンエンド。この瞬間、終焉を告げる三つ目の炎が灯る」

鏡夜

LP5400

場

マテリアルドラゴン（攻撃力2400）

セットモンスター×1

伏せカード二枚

手札5枚↓3枚

終焉のカウントダウン、三ターン経過

「僕のターン、ドロー!!ふっ、僕は魔法カード地割れを発動!!」
「マテリアルドラゴンの効果、フィールド上のモンスターを破壊する効果を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、手札を1枚墓地へ送る事でその発動を無効にし破壊する。残念ながら地砕きは無効だ」

「くっ……僕は神聖なる球体を守備表示で召喚し、メガ・サンダーボールを守備表示に変更。ターンエンドだ!!」

「この瞬間、終焉を告げる四つ目の炎が灯る」

綾小路

LP4000

場

メガ・サンダーボール（守備力800）

神聖なる球体（守備力500）

終焉のカウントダウン、四ターン経過

「俺のターン、ドロー。カードを三枚伏せてターンエンド。この瞬間、終焉を告げる五つ目の炎が灯る」

鏡夜

LP5400

場

マテリアルドラゴン（攻撃力2400）

セットモンスター×1

伏せカード五枚

手札四枚↓一枚

終焉のカウントダウン、五ターン経過

「……何故、攻撃しなかったんだい？」

「決まっているだろ。終焉のカウントダウンが進んでいくうちにどんどん青くなっていくお前の顔が見たいだけだ。簡単に終わらせたら面白くないだろう？」

「くっ、舐められたものだね。僕のターン！！」

「……ターン、エンドだ……」

「この瞬間、二十個全てに炎が灯った。そして、その炎はお前に終焉をもたらす。俺の勝ちだ」

「うっ……嘘だああああっ！！」

綾小路は泣きながら出て行く……いい気味としか思えない……
実際、息巻いてたのは最初だけで、ターンが進むにつれ顔が青くなっているのを見るのは良かった……

「……綾香」

「お帰り、鏡夜」

私の所に戻ってきてくれた鏡夜に抱き付く。私が、夜光鏡夜のモノであるということを周りに見せつけるように……

「……大好き……」

珍しく素直になれた私は、周りがみんな見ているなか鏡夜の頬にキ

スをした……

……後で、鏡夜が男子生徒達に追いかけて回されてたなんて私は知らない……知らない……知らないんだから……

バーンデッキ？来て、マテリアル先生！（後書き）

というわけで、テニス対決とデュエルでした。

痛い、痛い！石投げないで！！

ちなみにテニスの王子様ネタを使ったのは単に面白かったからです

（笑）

今回のデッキは終焉カウントです。マシユマロンを勿論入っており、他にも威嚇や和睦などのフリーチェーンの攻撃を封じるカード、レインボー・ライフやマテリアルドラゴンのバーン対策、一時休戦と相手の心をへし折る為のデッキになりました。

では、また次回。頑張りますので見捨てないで下さい。

恋する乙女? だからといって何でもしていいって訳じゃない。(前書き)

レイ(笑)

恋する乙女？だからといって何でもしていいって訳じゃない。

「よ、鏡夜」

「よう、十代……所でそのガキはなんだ？」

「いや、それがな……」

困った顔で俺を見る十代。それとその後ろに隠れている帽子を被ったガキ。

……なる程な。

「で、何の用だ？早乙女レイ……」

名前を呼ばれた瞬間、ビクツとして飛び跳ねる早乙女。

ああ、もうそんな時か……はあ、十代も面倒事を持ち込んでくれたものだ。

「……で、そのガキは、わざわざ亮に会うために週に一回しか来ない定期便に乗ってこの島まで来たと」

「ああ、まあそんなとこだ」

「しかも、親に何も言っていない、と」

「あ、ああ」

「で、俺に亮に会うための手助けをして欲しい、と」

「うん……お願いします」

頭を下げる早乙女。そんな事をされても俺の返事は既に決まっている。

「却下だ。いや、むしろ論外」

「どうして!？」

いや、どうして、ってな……

「親に何も言わずにこんな所に来て、何の罪悪感も感じないガキの頼みなんて聞く気にもならないわ。っていうかお前が何も言わなかったせいでお前の親はかなりパニックに陥っているぞ? 恐らく既に搜索願いが警察に出されているだろうから、お前は警察にも迷惑をかけているわけだ。それくらいの簡単な事も考える事も出来ずに何が恋する乙女だ。恋する乙女なら何でも許される? そんな暴挙が許されるのならもし恋に破れた女が恋していた男を殺しても罪には問われないな。そこらへん本当に理解しているのか?」

「う……」

押し黙る早乙女。本当に何も考えてなかったらしく、それでも何言おうとするその姿は見ているだけでイライラする。

「鏡夜……」

「お、綾香」

そんな中、綾香が走って来たのか、息を荒くしながら駆け寄って来た。

「ご免、ちょっと遅れちゃった……」

「気にしないでいい。さ、朝食と一緒に作ろうぜ」

「うん……!!」

綾香を部屋に入れ、まだ食い下がろうとする早乙女と素直に謝る十代を部屋から追い出し、部屋の鍵をかけた。

「今日の朝食は……どうする……?」

「馬鹿な事を言うなよ綾香。俺の朝食はお前しかいないに決まっているだろ?」

「……馬鹿……」

そして、結局授業に出たのは二限目からになった。

「……また、ついてくるのか……」

「いい加減、諦めればいいのに……」

昼休み。弁当を食べようとした時に、柱の影からじっと見て来る視線を感じた。

そして、その柱の影から見える特徴的な帽子も合わさって、色々と限界点に達していた。

「……………」

「鏡夜……今は駄目、放課後に殺ろ……? 私も、じろじろ覗かれるのは好きじゃない……」

「ああ、俺もだ」

……比較的温厚な俺も流石にイライラして来るぞ、おい……
潰す時はあれを使おう。このストレス、てめえを潰す事で解消させて貰うぞ、早乙女レイ!!

「……いつまで付いて来る気だ、早乙女レイ？」

「……えへへ、バレてたんだ」

レッド寮の前で言ってやると、悪びれもなく俺達のストレスの原因は姿を現した。

「これ以上つきまとわれるのも嫌だから、もし俺に勝てたらお前が亮に告白するのを助けてやるよ。だからさっさとかかってきな。潰してやるよ」

さっさと叩き潰そう。これ以上つきまとわれたら胃に穴が開く。確実に。

「……言ったね？ボクだって強いんだから!!乙女の力、見せてあげる!!」

はいはい、乙女乙女。

「^{デュエル}決闘!!」

「先行は僕が貰うよ!!ドロー!!僕は恋する乙女を召喚!!カー

ドを二枚伏せてターンエンドだよ!!」

早乙女レイ

LP4000

場

恋する乙女（攻撃力400）

伏せカード二枚

恋する乙女って、効果だけ見るとただの尻軽な気がしてならないのは俺だけだろうか？

まあ別にいいけど。ボッコボコにするだけだし。

「俺のターン、ドロ。魔法カード、苦渋の選択を発動。俺がデッキから選択するのはレベル・ステイラー三体にカードガンナー、青氷の白夜竜を選択する。さあ、一枚選びな」

「レベル・ステイラー？ うーん、知らないカード……でも、白夜竜は攻撃力が高いし……ボクは、カードガンナーを選択する!!」

……馬鹿だコイツ。最悪の選択をしゃがった。

「魔法カード、強欲な壺を発動。デッキからカードを二枚ドロする。俺はカードガンナーを守備表示で召喚。カードを二枚伏せてターンエンドだ」

鏡夜

LP4000

場

カードガンナー（守備力）

伏せカード二枚

手札6枚↓5枚

「ボクのターン、ドロロー!! うん、僕はデュナミス・ヴァルキュリアを召喚!! バトルだよ!! デュナミス・ヴァルキュリアでカードガンナーに攻撃!!」

「リバースカード、オープン。血の代償。効果は発動しない」

何もせずに破壊されるカードガンナー。お願いだからさっさと俺にダメージを与えてくれ。

「カードガンナーの効果、デッキからカードを一枚ドロ」

「恋する乙女でダイレクトアタック!!」

鏡夜

LP4000↓3600

「……ありがとな早乙女。ダメージを与えてくれて。手札からトラゴエディアを攻撃表示で特殊召喚!!」

鏡夜

場

トラゴエディア（攻撃力600×5＝3000）

現れるのは漫画版GXのラスボス、トラゴエディア。素直にダメージを与えてくれて助かった。これで潰せる。

「な、何? このモンスターは……」

「トラゴエディアは、ダメージを受けた時に手札から特殊召喚出来るモンスターだ。このモンスターの攻撃力は、プレイヤーの手札の枚数一枚につき600ポイントになる」

「……くっ、ターンエンド!!」

早乙女レイ

LP4000

場

恋する乙女（攻撃力400）
デュナミス・ヴァルキュリア（攻撃力1800）

「俺のターン、ドロ―」

さて、まだキーカードは完全に揃っているというわけではないが蹂躪というじゃないか！！

「永続魔法、生還の宝札を発動し、墓地のレベル・ステイラーの効果を発動。トラゴエディアのレベルを一体につき一減らし、三体のレベル・ステイラーを特殊召喚！！生還の宝札の効果でデッキからカードを三枚ドロ―する！！永続魔法、冥界の宝札を三枚発動！！そして、俺は三体のレベル・ステイラーを生贄に捧げ、神に使える神獣の王よ、今こそ降臨して神の威光を見せつけよ！！来い、神獣王バルバロス！！バルバロスの効果、三体の生贄を捧げて召喚した時、相手フィールド場のカードを全て破壊する！！」

「そ、そんな！！」

伏せてあったのは、ディフェンス・メイデンにホーリージャベリンか。まあ、無駄だったけどな。

「冥界の宝札一枚の効果でカードを二枚、三枚フィールド場に存在するからカードを六枚ドロ―する」

これで手札は14枚、トラゴエディアの攻撃力は8400……だが、まだだ、まだ終わらんよ。

「レベル・ステイラーの効果、トラゴエディアのレベルを二つ下げニ体特殊召喚。生還の宝札の効果で二枚ドロ―。トラゴエディア

の効果、墓地の青氷の白夜竜のレベルと同じにし、さらにレベル・ステイラーの効果でレベルを一つ下げて特殊召喚。生還の宝札の効果で一枚ドロ。血の代償の効果でライフを500ポイント支払い、古代の機械巨人を攻撃表示で召喚！！冥界の宝札の効果で六枚ドロ！！レベル・ステイラーの効果、バルバロスのレベルを二つつ下げて特殊召喚。生還の宝札の効果で二枚ドロ！！そして、俺はライフを500ポイント支払い、レベル・ステイラーを生贄に捧げ、二体目のトラゴエディアを召喚！！冥界の宝札の効果でカードを6枚ドロ！！さらに、レベル・ステイラーの効果、バルバロスのレベルを一つ下げて特殊召喚！！生還の宝札の効果で一枚ドロ！！ライフを500ポイント支払い神獣王バルバロスと・レベル・ステイラーを生贄に三体目のトラゴエディアを召喚！！まだだ！！ライフを500ポイント払うことで神獣王バルバロスを妥協召喚！！」鏡夜

LP 3600↓3100↓2600↓2100↓1600

場

古代の機械巨人（攻撃力3000）

トラゴエディア×3（攻撃力600×3≡22800）

神獣王バルバロス（攻撃力1900）

デッキ枚数はだいたい50枚で作ったデッキだから、カードをこれだけドロしても回る。

流石にデッキがもう無いけど。ちょうど早乙女もひびってるし、終わらせようか。

「あ……あ……」

「バトルだ。古代の機械巨人、バルバロス、トラゴエディアでダイレクトアタック！！アルティメット・パウンド！！トルネード・シエーパー！！悲劇の一撃！！」

「キャアアアアアッ!!」

早乙女レイ

LP4000↓1000↓—900↓—23700↓45600↓
—68300

「そ、そんな……」

崩れ落ちるレイ。いや、本当に気持ち良かった。ボコボコに出来て。

「じゃあなストーカー。二度と追ってくるなよ」

「……疲れた……」

そのまま茫然自失としているレイを無視して、俺と綾香は自室に戻って一休みする事にした。

恋する乙女？だからといって何でもしていいって訳じゃない。（後書き）

レイファンの皆様、本当にすみません。

彼女の行動力なら好きな人の為にストーカーくらい平気ですと思ったのです。

そして、トラゴエディア（笑）

筆者も予想外の攻撃力です。どうしてこうなった……

では、次回。いつになるかわかりませんがまたお会いしましょう。

閑話一：ハロウィンの悪夢（前）（前書き）

今回は決闘は無しです

あとがきにアンケートがあるので協力よろしくお願いします。

閑話一：ハロウィンの悪夢（前）

「そう言えば、今日はハロウィンだね……」
「そうだな」

秋らしい涼しさの中、俺達はそう呟いた。

今日は10月31日。世間ではハロウィンと呼ばれる日だが、海に浮かんだ孤島であるこのデュエルアカデミアでは、そんな話はそんなに出ていない。

それだから、だろうか。

「……みんなでちょっとしたパーティーでも開くか」

「……仮想パーティー、なんてどう……？」

「お、それいいな」

そんな、後になって猛烈に後悔するような提案が出てしまったのは。

「……と、いうわけで、今日はカイザーこと亮に部屋を貸して貰えた。みんな、亮に拍手を」

パチパチと、亮を讃える音が鳴る。

あの後、最初に亮に相談したら、

『なら、俺の部屋を使うか？いつもいつもお前達の愛の巢にお世話になる訳にもいかないからな』

と有り難くも棘の入った言葉を頂き、他の参加メンバー――十代、順、三沢、明日香、吹雪――の承諾を得て、無事に仮想パーティーが開かれる事になった。

……確かにお前達が来る度に掃除してるけどさ。掃除しないと見せられないし。朝は俺と綾香の下着が錯乱し、シートには俺と綾香のアレな液が染み込んでたりするけど、そんな言い方は無いんじゃないかな、って思う。

「そう言えば、食べ物が無いけどどうするんだ？」

どう考えても変態にしか思えないような格好――白魔導師ピケルの――をした三沢が俺に聞いてくる。

どうやら通販で買ったらしいが、ピケルのような可愛い美少女ならともかく、三沢のような男がそんな格好をしても痛い人にしか思えない。

さらに、手に持っている杖が明らかに某管理局の白い悪魔の持つ杖に酷似していたのだが――スルーしておいたほうがいいのだろう。

「私、そんなに料理出来ないんだけど……」

と、露出度が高いサイバー・チュチュの格好で言う明日香。

露出度が高い上にコンセプトと合っていないと思うのは俺だけだろうか？

「明日香、大丈夫。僕がサポートしてあげるよ」

ジャイアントオークの格好でドリンクを飲みながらそんな事をのた

まうのは吹雪。

イケメンでありながら勉強も出来、それでいて料理も完璧というミスターパーフェクト。

おまけにしっかりとコンセプトに合わせてきてくれた。ありがたいお方だ。

「ふむ。なら俺も精一杯頑張ろうとしよう」

サイバー・オーガ2の格好で言うのは亮。

やはりヘル化してもサイバー流が好きなのか、着ているのは機械の鬼。

機械とはいえしっかりとコンセプトに合わせてきたのには流石と言わざるを得ない。

「ふむ。俺も微力ながら努力しよう」

光と闇の竜の格好で威厳を伴いながらそんなことを言うのは順。

色々とツツコミたいがスルーする。もうどうしてハロウィンに竜の格好をするのかとか、お前はどこまで光と闇の竜が好きなんだ、とか。

「よし、俺も自信は無いが頑張るぜ!!」

ユベルの格好でそんな事を言うのは十代。

悪魔という格好もあるが、あの格好を違和感無く着こなすのは凄いと思う。

「だが……お前達はやはりそれか」

「ここまで予想通りだと何も言う気にならないわね……」

「そうか？ 予想通りだったか？」

「当たり前だよ鏡夜君。ワイトとワイト夫人なんてこんな時用の服装じゃないか」

「ご主人様……吹雪さんの言う通り……」

ふむ。そんなに予想通りかね。

確かに俺の格好はワイト、綾香はワイト夫人だが……安直すぎたかな……？

……って、ご主人様……？まさか……

「綾香。すまないがお前の持っているコップを貸してくれないか？」

「……なんで……？」

「ちよつと何か飲みたくなつてな」

「わかった……」

言うが早いコップの中に入っていたドリンクを自らの口に入れた綾香は、そのままこちにキスをして来る。そして、綾香の口から俺の口へと入ってくるドリンク。

……間違いない。これは――

「……三ツ●サイダー……みんな、覚悟はしてくれ。逃がさないが」

この言葉を聞いた瞬間、前回最後までいた明日香と十代と亮は固まり、前回の最後には既になかった順と三沢、吹雪は固まる。

……もうわかるだろう。そう、つまりは――

「……綾香が……酔った……」

ここからは、何が起こるかわからない、ということだ。

閑話二：ハロウィンの悪夢（前）（後書き）

次の代表戦なのですが……誰と戦わせればいいか悩んでいます。
その為アンケートを取りたいと思います。

一、遊城十代（アニメ版E・HEROとV・HEROの融合体）

二、万丈目順（光と闇の竜）

三、三沢大地（里お触れロック）

この中からお選び下さい。

後、この閑話の後編を投稿すべきか悩んでいます。読みたい、という方が多ければ書くかもしれません。

では、今回はこのへんで。

閑話一：ハロウィンの悪夢（後）（前書き）

料理の種類については許して下さい（土下座）

閑話一..ハロウィンの悪夢(後)

「……全員、料理は完成したな？」

「ああ、問題ない」

「じゃあ、食べていくか」

全員の調理が終わり、席につく。普段なら楽しい筈のパーティーが、何故かお通夜のような雰囲気で包まれていた。理由はわかる。ただ、自覚したく無いだけだ。料理の中に、いくつかゲテモノがあるという事に。

「……とりあえず、まともそうな物から食べていこうか……」

「そうだな……」

満場一致により、最初に箸をつけるべき料理を探る。すると、二つだけ抜きん出て上手い物があつた。

一つはビーフストロガノフ。そこからは何か気品のような物すら感じさせる、素晴らしい出来。

もう一つはラザニア。これも匂いだけで旨いとわかるような、素晴らしいすぎる出来。

「じゃ、まずはこれから手をつけていくか……」

選んだのはビーフストロガノフ。明らかに素晴らしいすぎる出来であり、これであれば問題は無いだろう。主に俺達の体調という意味で。

「あ、それは僕の料理だね」

「そうなのか？」

「ああ、そうだよ。女の子は料理が得意な男性が好みだったりする場合もあるからね」

そう言ってサムズアップするのは吹雪。言っている事は一見格好よく聞こえるが良く考えるとナンパの為に料理を勉強した、としか聞こえなくなるから不思議だ。

「ご主人様……私の料理は……？」

「さ、吹雪に感謝していただくのか。早く食べないと冷えてしまう」

あえて綾香の言葉をスルーする。理由はもうわかるだろう。彼女の料理が群を抜いてゲテモノだからだ。

「……うめー！！吹雪さん、これどうやって作ってるんだー！？」

「ああ、確かに美味しいな。吹雪さん、出来れば後で俺にも頼む」

「くっ……兄さんに料理で負けた……！！」

「確かに美味しいな。だが俺ははやての（略）」

「うむ。素晴らしい料理だ」

とはここの談。

確かに美味しいと思う。並ではない技量でなければここまで食材の味を引き立てる事は出来ないし、サフランと上手く混ざる事で尋常じゃない味を引き出していると思う。

ただ――

「……ご主人様、こっちむいて……」

「ああ」

「…………ふあ……あふ……ぷはっ」

食べる方法が綾香の口移しでなければ、もっと味わえていたに違いない。

……いや、勿論嬉しくはあるんだ。綾香の赤く染まった顔とか、口移しで渡した後になんざ舌を絡ませてきたりとか。

ただ、うん。こうする度に周りの目がどんどん冷えていくのを見ると、ね……

「ご主人様^{マスター}、次は……」

「じゃあ、次はラザニアを食べさせていただくか」

「意地悪……でも……なんでかな、凄く感じちゃう……これも、ご主人様の愛だからかな……」

綾香には悪いが、あえてスルーし続ける。色々と。最後まで。

「それは俺の料理だな」

「そうなのか？ 順」

「ああ。吹雪さんには劣るが、味わってくれると嬉しい」

謙遜する順。そうは言っているが、これもまた異常なまでに出来がいい。

チーズが軽く見てもとろけきっており、食欲をそそる。

冷めないうちに早くいただこう。

「順……！ すごいな、お前……！」

「ああ。十分自信を持っていいるレベルだと思うよ」

「くっ……順君、貴方本当に男なの……！？」

「ああ、素晴らしい料理だ。だが、クドリャフカの方が（略）」

「……負けた、か……」

とは他のメンバーの言。

あと綾香、ひつつくのはいいが背中から服を脱がそうとするな。流石に俺は人が見えている前で（載せられません）をする勇氣はないし、そう言うプレイを行う趣味は……まあ、少しは、いや結構好きな方だが流石に友人が見ている前でやる勇氣はないんだ。

「ご主人様マスターが良ければいつでもいいのに……」

だから今は待て、綾香。

「じゃあ、手をつけていくか……」

「……そうだね……」

俺と十代と三沢の一般レベルの料理を普通に食べ終わり、ついに俺達はゲテモノに手をつけていく。

ちなみに俺の料理は七面鳥、十代の料理はカボチャの肉詰めのおーブン焼き、三沢の料理はシュークリームだった。

三沢のは明らかに翠屋のを意識した物だったのはスルーしておくことにしておく。

なんか、突き詰めておくと怖い事になりそうだから。

「……さて、どれから手をつける……？」

目の前に並ぶ料理を見る。

片方はカレー……のようなもの。ご飯やルーが存在している所はカレーなのだが、食材が丸ごと入ってるんだ。まるで黒バスのカントクの料理のようだ。

「一応、自信作なんだけど……」

そういう笑顔で言うのは調理人である明日香。どう考えても亡フラグしか立っていない料理を『自信作』と言うのだから、失敗作がどうなるのか、考えただけでも恐ろしい。

そして、もう片方は見た目は普通そうなパエリア。そう、見た目だけは。

匂いがまず異常な、度を越したような匂い。例えるのなら、危険な匂い。

食べた瞬間に気絶する事が約束されていそうな料理。まさしく『約束された気絶のパエリア』だ。

それでも調理人である亮はやりきったような顔をいている。恐らく全力を尽くしたのだろう。味はさておくとして。

そして――

「ご主人様……^{マスター}はい、あゝん……」

今照れた顔で差し出す綾香の匙の中に入っている、前の二つを遥かに超える危険度を持つだろう『ナニカ』。

ケーキだと製作者が称するソレの色は、まずケーキではない青紫色。それから、その中にも明らかに危険なモノが含まれている。どう考えてもケーキと言うよりもAKUWAの材料とか某学園都市第二位

の異名の方が色々とあってそんなソレは、理性的に考えれば止めておいた方がいいのだろう。

それでも一抹の希望を求めて、俺は何が含まれているのか聞く事にした。

「綾香、これには何が含まれているんだ……？」

「……えっと……硫酸、硝酸……」

それから綾香の口から出たのは、多種多様な有害物質や媚薬の数々。普段は普通に美味しい料理を作る綾香だが、酔うと反転して異常な物を入れ始める。

今回の『ケーキ』のように。

「……えつとな、綾香」

「……はい、あーん……」

「その、な」

「……はい、あーん……」

何を言っても無駄だと知った俺は、諦めてそれを口にいれる。そして――

「……あれ？」

鳥の鳴き声をする中、俺は目を覚ました。時計を見ると、そこには六時三十分と刻まれている。

そして、隣には何時ものように綾香が寝ているのを見て、安心した俺は息をついた。

「……良かった、夢オチか」

「ん……鏡夜……？」

「お、おはよう綾香」

いつものように起きた綾香に挨拶すると、泣きながら俺に抱きついて！って！？

「お、おい綾香！？」

「良かった……起きてくれて良かった……もう二度と目覚めなかったらどうしようかって……」

……え……？

「綾香。今日の日付は……？」

嫌な汗が流れるのを感じつつも、一応綾香に聞いてみる。

「えっと……11月の、3日……明日香の料理を食べた人は半日、カイザーの料理を食べた人は次の日まで気絶してたけど……まさかここまでになるなんて……電気ショックが無かったら……」

瞬間、俺は知った。

俺が、3日間ずっと生死の境をさまよっていたということに。

閑話一..ハロウィンの悪夢(後) (後書き)

料理に関してはドが十個はつく程の素人の為、ハロウィンに
関係ない料理ばかりになってしまいました。
申し訳ありませんでしたああっ！

そして、代表決定戦の対戦相手ですが、

十代..二票

順..一票

三沢(紳士)..零票

という結果になっております。

身勝手ですが明日の11/3の正午を持って締め切りとさせて頂
きます。それまでにアンケートの方よろしく願います。

実際問題全員と戦うためのデッキは既に頭の中にあります(笑)

後、出来れば感想の方を欲しいです(チラッ

では、いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

代表決定戦？どうでもいいから綾香といちゃついていたんだが。（前書き）

またか、と思われる方も多いでしょうが耐えて下さい（土下座）

代表決定戦？どうでもいいから綾香といちゃついていたんだが。

「……あー、めーんどーくせー」

「贅沢言わない……折角出れるんだから……」

「まあ、そうなんだけどな……」

満席のデュエル場。ここに集まった生徒達は、一つの催し物を見る為に集まっていた。

「へへっ、今日こそ鏡夜に勝ってやるぜ!!」

——そう、俺と十代の戦いという、催し物を。

どうしてこうなったかと考えると、少し前に遡る。

「……お断りします」

「……やっぱりかね、夜光君」

「そんなものに出る位なら、俺の部屋で綾香と一日中いちゃいちゃしてますし、面倒くさ——」

「鏡夜、出てあげて……それに、私は鏡夜に、出て欲しい……」

「前言撤回です出ますというより出させて下さいお願いします」

「あ、ああ……」

（元々だすつもりだったので別にいいのだが……ここまで一瞬で綺麗なお辞儀をするとは……流石と言った方がいいんだろうか……）

「計画通り……」

……あれ？上手く綾香の思い通りになっている気がする。
別にいいけど。

「じゃあ、容赦はしないぞ、十代」

「おう！！！！へへっ、腕になるぜ！！」

その余裕もどこまで続くかな？以前のお触れホルスの再来をお前に
教えてやるよ。

「^{デュエル}決闘！！」

手札は……っと、まあまあだな。さっさと勝って綾香を苛めよう。
なんか上手く彼女に嵌められたような気がするし。

「俺のターン、ドロー。魔法カード、流転の宝札を発動。デッキか
らカードを二枚ドロー。魔法カード、天使の施しを発動。デッキか
らカードを三枚引いて二枚捨てる」

よし、揃った。

「ダーク・グレファアーを召喚し、魔法カード、苦渋の選択を発動。
ドラゴンフライ二枚、ダーク・グレファアー、ダーク・シムルグ、カ
オスライダー・グスタフを選択する」

「ならドラゴンフライを手札に加えろ」

「ふ、まあどうでもいいさ。手札のドラゴンフライとダーク・ネフティスを除外してダーク・シムルグを特殊召喚。カードを二枚伏せてターンエンド、この時流転の宝札の効果で手札を一枚墓地に送る」
鏡夜

LP4000

場

ダーク・グレフアー（攻撃力1700）

ダーク・シムルグ（攻撃力2800）

伏せカード二枚

手札6枚↓1枚

さて、後はこの伏せを発動すれば完成、つと。

「俺のターン、ドロー!!!」

「ドローフェイズ時にリバースカードオープン、魔封じの芳香。互いのプレイヤーは魔法カードをセットしてからしか発動出来ない」

「なんだと!?!」

十代、恐怖するのはこれからだぞ？

「俺は、E・HEROバブルマンを守備表示で召喚!!!効果でカードを二枚ドローする!!!……よし、俺はカードを二枚伏せて……つて、伏せられない……!?!」

「ダーク・シムルグの効果、相手プレイヤーはカードをセット出来ない」

「な……っ!?!?ということは一——」

「お前は、事実上魔法、罫を封じられた事になる」

未だネオスやNを手に入れてない十代では、このロックを破るのは

ネオスペーシアン

至難の技だろう。

鬼畜モグラがいれば、ダムルグが手札に戻っていてピンチに陥っていたのは俺だったけどな。

「……流石^{イッタン}雷帝……」

「なんか俺、あいつに憧れて来た……まだ一年生なのにな……」

お、多少は肯定的な意見も出て来たか。嬉しい限りだ。

まあ、大半は、

「卑怯者め……リスペクトはどうしたんだ!!」

「十代、絶対にあいつに勝て!!」

「卑怯者め……こんな奴にお兄さんは……!!」

という、馬鹿ばっかだけど。

ちなみにこれらの声の大半はブルー生徒。批判しか出来ない馬鹿共め……だから俺に生還マンティコアでワンキルされるんだぞ？

「……くっ……ターンエンドだ。手札が七枚なので一枚墓地に送る」

十代

LP4000

場

E・HEROバブルマン（守備力1200）

手札6枚↓6枚

墓地に送ったのはネクロダークマンか……手札には恐らくエッジマンでもあるんだろう。

まあ、このターンで終わらせるけど。

「俺のターン、ドロー。ダーク・グレファアの効果、手札のネクロ・

ガードナーを墓地に送り、デッキからダーク・クリエーターを墓地に送る。伏せてあったリバースカード、天よりの宝札を発動。互いのプレイヤーは、デッキから手札が6枚になるまでカードをドロースする」

十代は手札が6枚だから変わらず、俺だけがカードをドロースする。……よし、来た。

「終末の騎士を召喚。効果でデッキからキラートマトを墓地に送る。魔法カード、終わりの始まりを発動。墓地の闇属性モンスターを五枚除外して三枚ドロース。墓地の闇属性モンスターが三体になった事により、ダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚。効果でキラートマトを除外し、バブルマンを破壊。終わりだ、全モンスターでダイレクトアタック!!」

「う……うわあああああっ!!」

十代

LP4000↓1200↓—200↓—1900↓—4700

……また、ワンキルしちゃった……

十代のデッキでは絶対に適わないデッキだから、仕方ないことなのかもしれないけど。

さて、そんなことは今はどうでもいいから、今は綾香を愛で行こう。

そう結論づけ、俺は綾香の元へと向かった。

代表決定戦？どうでもいいから綾香といちゃついていたんだが。（後書き）

その日の夜（R15）

「じ、焦らさないで……ふあっ……!!」

「しっかりと感じているじゃないか。それに、指だけで二回も達しているヘンタイさんには、これだけでも十分だろ？」

「……駄目、なの……鏡夜の」

（以下検閲されました）

というわけで、対十代用のデッキは【アロマダムルグ】でした。
うわ、何も出来ない。

ドロースースである強欲な壺、HEROの基本である融合、さらに切り札である進化する翼すら封じられたら、もう何もできませんよね。

だから、ワンキルでもいいよね!!

……すみませんでした。

さて次回ですが、また順と三沢どちらと戦わせればいいか悩んでいます。

どちらにしようかな……

ではまた次回。いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

まだまだ弱いよ、お前は。(前書き)

光と闇(笑)

まだまだ弱いよ、お前は。

「……さて、決勝だが……お前か、万丈目」

「ああ。前回の屈辱、ここで晴らす!!」

代表決定戦の決勝戦。俺の対戦相手は、万丈目だった。

俺としては三沢が勝つとばかり思っていたからこの結果は予想を外した事になる。

まあ、しっかりと対策は用意してはあるのだが。

「行くぞ万丈目。徹底的に潰してやるよ」

「今度こそ……お前に勝つ!!」

やれるものならやってみろ。今回は前回のようなお遊びデッキじゃない。

「決闘^{デュエル}!!」

side 綾香

……鏡夜の、意地悪……結局、昨日は最後まで焦らされ続けて終わった……し、しかも物凄いイイ笑顔であ、あんなのを使ってくるし

……

おかげで欲求不満……炭酸でも飲んで襲おうかな……？

「俺のターン、ドロー。魔法カード、天使の施しを発動。デッキからカードを三枚引いて二枚捨てる。魔法カード、流転の宝札を発動。デッキからカードを二枚ドロー。モンスターをセットし、カードを一枚伏せてターンエンド。この時手札を一枚墓地に送る」

鏡夜

LP4000

セットモンスター一枚

伏せカード一枚

手札6枚↓4枚

今回の鏡夜のデッキは……なるほど、そう言うこと……
これは順には厳しい、かな……？

「俺のターン、ドロー！！魔法カード、天使の施しを発動！！デッキからカードを三枚ドローし二枚捨てる！！……よし、俺はランサー・ドラゴニユートを召喚！！」

「リバースカード、オープン。罠カード因果切断を発動し、手札一枚をコストにランサー・ドラゴニユートを除外する。さらに、俺が墓地に送ったのはダンディライオン。よって綿毛トークンを二体守備表示で特殊召喚」

「なんだと！？」

やっぱり……こんなデッキ……はあ……鏡夜は今回も叩き潰す気なの……

「くっ……カードを二枚伏せてターンエンドだ！！」

順

LP4000

場

伏せカード二枚

手札6枚↓3枚

はあ……地獄が始まる……

「俺のターン、ドロー。スタンバイフェイズ時に墓地の黄泉ガエルの効果を発動。黄泉ガエル自身を守備表示で特殊召喚。魔法カード、二重召喚を発動。このターン俺は二回通常召喚が出来る。――行くぞ、万丈目順」

はあ……自重は……しないよね……

「一度目の通常召喚権を使い、黄泉ガエルを生贄に捧げ――吹雪し氷の大地に立つ皇帝よ、今こそ敵の罠を凍りつかせよ！！来い、氷帝メビウス！！効果で順の伏せカード二枚を墓地に送る！！」

「……くっ、リバーズカードオープン！！和睦の使者！！このターン俺は戦闘ダメージを受けない！！」

もう一枚の伏せカードは……どうやら、巨竜のはばたき……。

どうやら、メビウスの無駄打ち……

「もう一回の通常召喚権を使い、俺は綿毛トークン一体を生贄に――全てを燃やす炎の帝王よ、その炎で敵の戦術を燃え散らせ！！来い、炎帝テストロス！！効果発動！！俺はお前の手札一枚を選び、そのカードを墓地に送り、そのカードがモンスターカードだった場合、そのレベル分お前にダメージを与える。俺が選択するのは、真ん中の手札だ！！」

「なんだと！？」

落ちたカードは……リビングデッドの呼び声みたい……いいカードを送れた……

「効果ダメージは無し、か。まあいい。ターンエンドだ」

鏡夜

LP4000

場

炎帝テストロス（攻撃力2400）

氷帝メビウス（攻撃力2400）

手札4枚↓1枚

「俺のターン、ドロー!!」

順がカードを引く瞬間、竜の雄叫びが聞こえた……
やっぱり、出て来るの……？

「スタンバイフェイズ時に墓地のミンゲイドラゴンの効果を発動！
！ミンゲイドラゴン自身を攻撃表示で特殊召喚！！そして、ミンゲイドラゴンを生贄に捧げ——こい、相棒！！俺と一緒に戦ってくれ
！！」

順の、精霊……

「光と闇の竜!!」

ソリッドビジョンの筈のソレは、まるで生きているかのような雄叫びをあげる……

実際、あのモンスターは強い……

「ついに、出て来たか……お前の相棒」

「ああ。もう俺は負けない！！俺は相棒と共に貴様を倒す！！バトルだ！！光と闇の竜でメビウスに攻撃！！シャイニングブレス！！」

轟音と共に放たれたその攻撃は、一瞬でメビウスを塵に返した……

「ターンエンドだ！！さあ、行くぞ夜光鏡夜！！俺は今日こそ貴様への雪辱を果たす！！」

万丈目順

LP4000

場

光と闇の竜（攻撃力2800）

手札4枚↓1枚

でも、順には残念だろうけど……

「俺のターン、ドロー。スタンバイフェイズ時に墓地の黄泉ガエルの効果発動」

光と闇には……すぐに退場して貰うことになりそう……

「墓地の黄泉ガエル自身を特殊召喚」

「光と闇の効果で無効だ」

順は何を考えているのかわからない、と言うような表情で無効にする……

でも、それ自体が鏡夜の考え通り……

「無効にされようとも未だスタンバイフェイズは続いている、よって黄泉ガエルの効果発動。墓地の黄泉ガエル自身を特殊召喚」

「なんだと！？くっ、光と闇の効果で無効にする！！」

「黄泉ガエルの効果で蘇生」

「光と闇の効果で無効だ……」

「黄泉ガエルの効果で蘇生」

「光と闇の効果で無効だ……っ」

順場

光と闇の竜（攻撃力2800↓2300↓1800↓1300↓800）

「守備力が500を切ったからもう効果は使えまい。黄泉ガエルを特殊召喚。そして、黄泉ガエルを生贄に――風を統べる帝王よ、その風で敵の戦略を巻き戻せ！！風帝ライザー！！さらに、ライザーの効果で光と闇の竜を順、お前のデッキトップに戻す」

「……なん……だと……」

これで順の場はがら空き……今回も、鏡夜の勝ち……

「風帝ライザー、炎帝テストロスでダイレクトアタック」

「……ちく……しょう……！！」

順

LP4000↓1600↓1800

「しょ、勝者、夜光鏡夜なノーネ！！」

「ああ、一応言ってますが俺は学園対抗戦に出る気はありませんからね」

「パルメザンチーズ！？」

……はあ、やっぱり、元からそういうつもりだったの……鏡夜の馬鹿……

「ど、どういう事つもりなノーネ!？」

「一言で纏めますと怠い、しんどい、面倒くさい。それに、こんなにやる気のない者が出てモチベーションも上がらない、と思いますし、順を出した方が面白くなると思いますよ?」

「……情けのつもりか、鏡夜」「情け? 違うな、俺はお前にチャンスであげてるんだよ」

「チャンス?」

「ああ。本気で俺に勝ちたいのなら、経験を積んだ方がいいだろう? 俺は、その経験を積むチャンスをやっているだけだ。それを手にするかどうかは、お前次第だけだな」

なんか格好いいこと言ってるけど、本音は……

「……わかった。その申し出を受けよう」

「そうか。じゃあ、俺は帰りますね。綾香、帰ろうぜ」

そんな物無視して私とイチヤイチャしてただけのくせに……でも、そんな鏡夜が、私は大好き、なんだから……

まだまだ弱いよ、お前は。（後書き）

というわけで、対順用のデッキは【獅子黄泉帝】でした。

可哀想な光と闇……うん、知らない。ボコられたなんて知らない。

あ、対三沢戦ですが……読みたいですか？一応、デッキ自体は頭の中にあるので、書けるのですが……もし読みたいという方がいれば書きます。

あ、あと総合評価が1000PTを超えました。皆様のおかげです。ありがとうございます。

それでは、また次回。いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

意地と誇りのぶつかり合い、か。(前書き)

作者は自重を無くしました(キリッ

意地と誇りのぶつかり合い、か。

「ついにこの時が来た、か」

「そうね……」

俺達は座席に座り下を見る。そこには――

「聞こえているか、アカデミアの諸君！！確かに俺は一度はこの学園を辞した。それに陰口を叩く者もいただろう。呆れる奴もいただろう。だが、俺は帰って来た！！お前達にこの俺の勇姿を見せつける為に！！帰ってきた俺の姿を見せつける為に！！そして、兄さんを倒す為に！！」

『『サンダー、サンダー！！万丈目、サンダー！！』』』

万丈目が言っているのは格好いいのはわかる。だが、周りが五月蠅すぎる。

もう少しテンション下げられないのかな……

「それはどうでもいいのだけど……あなた達、その姿勢どうにかならないの？」

「え？普通の姿勢だろ？なあ綾香」

「鏡夜の……言う通り……」

綾香も同意してくれている。今の俺達の姿勢のどこがおかしいんだ？

「……どうして綾香が鏡夜の膝の上に座りながら抱きついてるのよ……」

「だから、それが普通じゃないか？」

「……重傷ね……」

諦めたらしい明日香が俺達の隣に座る。全くもってどうして重傷と言われたのかわからない。何故だ？

「行くぞ、兄さん！！俺はこの場で、貴方を倒す！！」

「ああ、来い準。俺はお前の挑戦を受け、必ずお前を打倒しよう」

お、始まる始まる。どうなるか楽しみだ。

「^{デュエル}決闘！！」

「先攻は俺が貰おう！！俺は、仮面竜を守備表示で召喚！！」

『『『うおおおおお！！！！』』』

たかがリクルーター一体を出しただけで、これ程の声援が出る。それ程万丈目は、ノース校の生徒に慕われているのだろう。

ただ——

「……五月蠅い……」

「全くだ」

——もう少しノース校の生徒は声の量を下げてもいいと思うんだ。

「さらにカードを二枚伏せて、ターンエンドだ！！」

万丈目準

LP4000

場

仮面竜（守備力1100）

伏せカード二枚

手札6枚↓3枚

『『サンダー！！サンダー！！万丈目、サンダー！！』』

鳴り止まない大歓声。ワンターン終えただけなのに、ここまでの歓声が響き渡るとは。

でも——

「……五月蠅い……」

「……そうだな」

———なんとかならないのか、この騒音は。

腹が立つので綾香の耳を甘噛みしてみる。

「……ひゃっ……！！」

……お？

「俺のターン、ドロー！！……よし、俺は魔法カードおろかな埋葬を発動！！デッキのミンゲイドラゴンを墓地に送り、ランサー・ドラゴニートを攻撃表示で召喚！！バトル！！ドル・ドラで仮面竜に攻撃！！」

万丈目

LP4000↓3900

万丈目は伏せカードを発動することなく、仮面竜を破壊させる。
……そんな事より、だ。

「綾香……感じているのかい？」

「……そんなことな……ひいんっ!!」

耳を舐めただけなのにこんなに可愛い反応をする綾香。

いつもは耳を舐めただけでは反応しないのに、これは、ひよつとして——興奮してる？

「仮面竜の効果を破壊!!このモンスターが破壊された時、デッキから攻撃力1500以下のモンスター一体を特殊召喚出来る!!さあ、“伝説”を見るがいい!!来い、アームド・ドラゴンLV3!!」

『『『うおおおおおおお!!』『』』』

先程とは比べものにならない程の声がノース校の生徒達より放たれる。

たかがモンスター一体。だが、彼らにとっては、“伝説”。

それが場に出ただけで、彼らにとっては大きいだろう。

最も——

「だ、だから感じてなんひいんっ!!」

「そんな事を言っても、身体は正直だな。スカートが湿ってきたぞ？」

「……意地悪……」

涙目で俺を睨んで来る綾香も伝説級の可愛さなのだが。

そんな綾香が可愛くて、俺は耳を甘噛みしてみる。

「ふぁうう……ら、らめひょうあ……ひ、ひとふぁ……」

と、呂律の回らない声で言ってくる。

こういう時の『駄目』は『もつとして』という事だと知っている俺は、期待に応えるべく首筋を舐める。

「ひゃう……ひ、ひもちよしゅぎりゅう……」

ああ、こんな綾香も本当に可愛すぎる……！

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ……！」

万丈目順

LP4000

場

ランサー・ドラゴニユート（攻撃力1500）

伏せカード一枚

手札6枚↓4枚

「俺のターン、ドロー……！スタンバイフェイズ時にアームド・ドラゴンLv3の効果を発動……！このカードを墓地に送り、アームド・ドラゴンLv5をデッキから攻撃表示で特殊召喚する……！さあ、“伝説”よ進化せよ……！」

『『『おおおおおおおお……！』『』『』』

進化したアームド・ドラゴンの姿を見て、ノース校生徒のテンションはさらに上がる。

でもまあ、そんな事は本当にどうでも良くて。

「き、鏡夜、駄目……ひ、人が見てる……!!」

「綾香が声を出さなければ気づかれないよ」

そう囁き、綾香の耳たぶを甘噛みする。綾香の可愛い姿をもっと見たいという欲望に身を任せて。

ちなみに流石に胸や下には触れていない。そこは自重しないと、ね。

「……ふぁう……ひぁっ……ひうう……駄目……声、でちゃう……!!」

「頑張れ、綾香」

「……意地悪……」

自覚はしてるよ。

「魔法カード、レベルアップ!を発動!!場のアームド・ドラゴンLv5を墓地に送り、デッキからアームド・ドラゴンLv7を特殊召喚する!!さあ、“伝説”よ、さらなる進化をとげろ!!さらにアームド・ドラゴンLv7の効果、手札のモンスターを1枚墓地に送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の相手フィールド上表側表示モンスターを全て破壊する!!俺は手札のシルフィードを墓地に送り、ランサー・ドラゴニートを破壊する!!」

「なんだと!?!」

破壊されるランサー・ドラゴニート。これは直接攻撃は免れないか?

「……はあ、はあ……ひ、ひようや、らめえ……」

「はいはい、この決闘が終わったら解放してあげるよ」
デュエル

「そ、そんな……ひうつ……」

「貴方達は隣で何をやっているのかしら……」

隣の明日香の視線が冷たいのは気にしない。

「バトルだ!! アームド・ドラゴンLV7でダイレクトアタック!
!アームド・ヴァニッシャー!!」

「リバースカード、オーブン!! ガード・ブロック!!」

「甘いっ!! カウンター罠、トラップ・ジャマー!! ガード・ブロックを無効にして破壊する!!」

「なんだと!? くっ……」

万丈目順

LP4000↓1200

「ターンエンドだ!!」

万丈目準

LP3900

場

アームド・ドラゴンLV7（攻撃力2800）

伏せカード一枚

手札4枚↓2枚

今の所は順の劣勢……だが、あれを引ければ話は違う。

「俺のターン、ドロー!!……そうか相棒、わかったよ……」

……来るか。順の持つ精霊が。

「墓地のミンゲイドラゴンの効果を発動し、ミンゲイドラゴン自身を特殊召喚!!そして、ミンゲイドラゴンを生贄に捧げ——来てくれ、光と闇の竜!!」

凶悪な場の制圧能力を持ち、倒したら倒したで墓地からモンスター

一体を引っ張り出してくる強力なドラゴン。

俺がわざわざライザーでデッキトップに戻したのも、後陣が出て来たら非常に困るからだ。

まあ、墓地にはモンスターが無かったんだけど。

「ひゃああ……も、もういいでしょ……？ひょうやあ……」

「下着をびしょびしょにしながら言う台詞じゃないぜ」

「い、いじわりゅ……」

涙目になって懇願する綾香。それが俺の嗜虐心を増幅させる。

「……貴方達……」

明日香の目が氷点下になってきたなんて知らない。
知らないったら知らない。

「カードを二枚伏せて、ターンエンドだ!!」

万丈目順

LP1200

場

光と闇の竜（攻撃力2800）

伏せカード二枚

手札5枚↓2枚

……勝負所だな、これは。

「俺のターン、ドロー!!!魔法カード、強欲な壺を発動!!!」

「光と闇の効果で無効だ!!!」

「それにチェーンしてリバース罠ミニチュアライズを発動!!!光と闇のレベルを一つ下げ、攻撃力を1000ポイントダウンさせる!

！」

万丈目順

場

光と闇の竜（攻撃力2800↓1800↓1300）

「アームド・ドラゴンLv7の効果、手札の仮面竜を捨てて光と闇を破壊する！！」

「光と闇の効果で無効だ！！」

万丈目順

場

光と闇の竜（攻撃力1300↓800）

「魔法カード、死者蘇生を発動！！」

「光と闇の効果で無効だ！！」

万丈目順

場

光と闇の竜（攻撃力800↓300）

「……光と闇の竜……兄さんの象徴……それを倒してこそ、俺は本当に兄さんを倒したと言える！！バトル！！アームド・ドラゴンLv7で光と闇の竜に攻撃！！アームド・ヴァニッシャアア！！」
万丈目の魂を込めた叫びと共に、アームド・ドラゴンの攻撃が光と闇に向かう。しかし、この状況で、順は———

「……確かに、お前は強くなった。が——」
——笑っていた。

「――まだまだ甘いっ!! リバースカード、オープン!! あまのじやくの呪い!! このターンのみ攻撃力のアップダウンを逆転させる!!」

「なんだと!？」

万丈目順

場

光と闇の竜（攻撃力300↓5300）

「反撃しろ、光と闇!! ダーク・ハプティズム!!」

順の声に応えるかのように放たれたソレは、一瞬でアームド・ドラゴンを破壊した。

「くっ……カードを一枚伏せて、ターンエンドだ!!」

万丈目準

LP3900↓1400

場

伏せカード一枚

手札3枚↓0枚

「俺のターン、ドロ。速攻魔法、聖水の弊害を発動。光と闇の攻撃力を元に戻す」

「なんだと!？」

あの驚きようだと伏せカードは聖バリか、幽閉か……とにかく攻撃反応型罠か。

これで、勝負はついたな。

「イ、イク……イっちゃうっ……!!」

こっちな。

「行け、光と闇!! シャイニングブレス!!」

「ち……くしょおおお!!」

万丈目準

LP1400↓—1400

「……じゃ、先に部屋に戻るわ」

「あら、早いわね。どうしたの？」

「いや……綾香が、な」

俺の腕の中には、気絶した綾香の姿。

どうやら感じすぎて気絶してしまったらしい。

……反省はしている。後悔はしていない。

「……そ」

絶対零度の明日香の視線に見送られながら、俺はデュエル場を後にした。

綾香をお姫様抱っこしながら。

意地と誇りのぶつかり合い、か。（後書き）

と、いうわけで誇りの兄と意地の弟という戦いでした。

……それよりも、書いてて楽しくなってきたのはあの描写です……
どうしてこうなった。

そして、次から唐突ですが『過去編』をやります。

六話位の予定になっているので、出来ればお付き合い下さい。

それが終わったらセブンスターズ編かな……

それでは、また次回。いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

過去編一話 ビギンズナイト（前書き）

過去編です。

何話かかるかな……

決闘は無しです。

過去編一話 ビギンズナイト

———気がついたら、知らない一室の中心で一人寝転んでいた。確か昨日も普通にバイトしたりネットしたり遊戯王のパックを買って一喜一憂したりと普通の生活を送っていたはず。一体ここはどこだ、しかも知らない天井なんてエヴァかよ、と思いながらも状況を整理する為に立ち上がろうとし——

「……あれ？」

——た所で、今の自分の身体の異常に気づく。

余談だが俺は22歳で身長が180センチはあった筈だ。だが、今の腕の長さから考えて、元の身長はありそうにない。一体どうなってるんだ、と近くにある鏡を見て——

「……What？」

——幼かった頃の姿となっていた自分を見て、俺は思考を放棄した。

「……えーと、どういうことだ？」

思考を取り戻した俺は、取りあえず現状を確認するために部屋を漁ってみた。そうして出て来たのは、幾つものスーツケース一杯に入

っていた遊戯王のカードと、何故か3000000000と刻まれた貯金通帳、そして、一枚の便箋だけだった。

……三億って……俺、こんなに稼いだ記憶無いぜ……？
なんか色々とツツコミたい所を理性で押さえ込みながら、便箋を開く。

そこに最初に書かれていた事を見て、さらに俺は頭を抱えた。

『まず始めに書いておきますが、貴方が今いる世界は貴方の元いた世界ではありません』

……また、思考を放棄しかけたのも仕方のない事だろう。
確かに自分に生じていることは異常だらけだ。身体的にも財力的にも。だが、世界まで違う、なんて言われたら流石に疑う。
きつと、何かの冗談なのだろうとテレビをつけ――

「ふうん」

――一瞬で消した。

ふう。今のはきつと何かの冗談だ。そうに決まっている。
そんな、懇願にも似た気持ちで再度テレビをつけ――

「ふうん。当然に決まっている」

社長の自慢気な声が聞こえた瞬間、俺はこの便箋に書かれている事が真実なのだと知った。

『言いたい事はわかりますが先に此方の謝罪を聞いて下さい』

そう続いていた便箋は、俺の現状を理解するのにとっても役だった。ちなみに死因は心臓麻痺だったらしい。なんというか普通だな、と思った。

両親は既におらず一人っ子だったからそんなふうにはか思えないのも仕方のない事かもしれない。

『その世界は遊戯王GXの世界です。時代は原作が始まる丁度六年前の四月です。つまり貴方は現在小学四年生という事になります』

この事には素直に感謝した。俺もこの世界の母親との嬉し恥ずかしプレイをしたいわけではない。

『その部屋はマンションの一室で、貴方の父親名義で買ってあります。戸籍も作ってあるのでその預金通帳があれば当面の生活には困らないでしょう。ちなみに両親とも外国に赴任しているという設定になっていますので怪しまれる事はありません』

これも素直に感謝する点だろう。戸籍があり、金があれば当面の生活には確かに困る事はない。問題とするのなら神様が設定とか言っちゃった所とか俺達の事よく知ってるな、とかだが――突っ込んではいけないのだろう。

『そのスーツケースですが、中には貴方の世界の遊戯王カードが大量に入っています。恐らく全てのカードが入っているでしょう』

そう書かれていたので、折角だからと探ってみたら――出るわ出るわアウトなカード。

『三幻神』、『三幻魔』、『オレイカルコス』シリーズ、『宝極獣』、『D－HERO』、『ネオス』……神様仕事しろよ。

おまけにシンクロモンスターやエクシーズモンスターまであるって……デュエルディスクにちゃんと反応するのか？

『時代的にもアウトなカード類が大量だと思いますが、スルーして下さい』

出来ません。

『後、デュエルアカデミアに向かうかどうかは、貴方にまかせます。守護者が動かないレベルでなら好きなように行動して下さい』

……やっぱりこの世界にもいるんですか、守護者。

『ちなみにエミヤです』

マジか。

それはさておくが、やはり俺はアカデミアに行く事にした。

この世界ではプロがあり、それ則ち遊戯王が強ければそれだけで生活出来る。

前世ではそこまで遊戯王は強くなかったが、それでもバランスの悪い原作キャラには勝てる位の自信はある。

だから、それだけで食べていけるのなら儲け物だろう。

主人公や皇帝さんのチートドローも見てみたいし。

『以上です。長々付き合わせてしまい申し訳ありません。最後に、付録として三枚の特別な便箋を同封しておきます。何かあればこれに書いて頂ければ対応します。では、第二の人生をお楽しみ下さい』

読み終わると同時に、紙が光輝き――

「……あゝ、酷い目にあった」

小規模な爆発に巻き込まれながらも、幸いにも怪我は無かった俺は、飯を食べながら近くの海で海を見ていた。

……まさか、便箋が爆発するなんて、思ってもみなかったよ。

「……それにしてもなあ……」

目の前に広がる大海原を見ると、これは全て夢だったかのように思われる。

「まあ、仕方の無いことか……」

気がついたら知らない天井が広がっていて、身体も縮んでいて、おまけに遊戯王の世界。

夢と言われた方がまだ信じられる。

「まあ、とりあえず生きてみるか」

そう決意した、その時だった。

「……今日こそ、死ねる……」

何かが、海に落ちるような音がした。

驚いて落ちた方を見ると、海の中に一人の少女が落ちていた。

「…………ツ!!」

考える間もなく、反射的に食べていた物を投げ捨て俺も海の中に飛び込む。

元々水練は達者な方ではあったが、流石に人を一人抱えたまま陸に上がるのは難しく、上がるまでに、十分程度の時間を要した。

「ハア……ハア……」

荒い息を吐く。ここまで激しい運動をしたのは久しぶりだ。

だが、人を助けたのだ。少しくらいいいだろう。

そう想っていた時だった。

「……なんで……助けたの……?」

少女が、そんな声を発したのは。

「……は?」

「私を、なんで助けたの、と聞いている……私の、身体目当て……?それとも、お金目当て……?」

助けた少女はそう言い放つ。厳しく、俺を非難するように。

だが、そんな状況であるにも関わらず、俺の目は少女に釘付けになっていた。

髪の色は透き通るような漆黑。夜の黒と比較してでさえ、その色の前では足元にも及ばないだろう。

また、その美貌も比較する対象を知らないかのような凄まじい物。

例えモデルを持ってきたとしても、彼女の前では裸足で逃げ出すだろう。

そして、その目。まるで、全てを否定するようなその目。そんな少女から、俺は目が離せなくなっていた。

「……身体とかお金とか、物騒な事を言うな」

「……その言い方だと、違うみたい……どうやら、本物のお人好しみたい……」

そう結論づけたらしい少女は、俺に背を向けてスタスタと歩いていく。

っておい。

「ちょっと待ってくれよ。どうして俺を無視するんだ」

「……そう。なら忠告しておく……私には、関わらないで」

「……どういう意味だよ」

「……貴方には、関係のない事……後、これは一応お礼……使い方は、わからないと思うけど……」

そう投げ渡されたカードを受け取るのを確認した少女は、走って去っていった。

「……で、このカード——って!?!」

渡されたカード。それを見て、俺は驚きを隠しきれなかった。

そのカードの名前は——『No. 17 リバイス・ドラゴン』。

「どうなってるんだ……」

明日から始まる遊戯王の世界での生活に、俺は不安しか感じる事が

出来なかつた。

過去編一話 ビギンズナイト（後書き）

次も多分決闘ありません。

感想と評価お待ちしています。

して頂くと作者の投稿スピードが上がります。

過去編第二話 それはとっても嬉しいなって(前書き)

今回もデュエル無しです……

次回こそは……!!

過去編第二話 それはとっても嬉しいなって

「転校生を紹介する。さあ、入ってこい」

転校生。それは一つの大きなイベントだろう。

それが小学校であるのならなおさらのことだ。必ずと言っていいほどみくちやにされる存在だ。

何故、今そんなことを言うのかって？それはだな――

「今日この学校に転校して来た夜光鏡夜だ。よろしく頼む」

――現実逃避だよ。

「……はぁ……何で今更小学校なんか……」

初めて歩く道。土地勘など全く多ない俺は、それを道行く人に聞くなどして、小学校への距離を縮めていた。

確かに、神様の言いたい事もわかる。小学四年生なら義務教育により小学校に行かなければいけない事もわかっている。だが、だ。

「……行きたく、ねえな……」

やはり、頭で理解す（わか）るのと感情で納得す（わか）るのは別だ。

特に、金があるのだから思いっきり金を使ってしまいたい。PCとかゲームとか。

そう愚痴りながらも歩を進めているのは、一つだけ知りたい事があるからだ。

昨日助けて、礼と言って俺にリバイス・ドラゴンをくれたあの少女。その少女の事が、何でもいいから知りたくなっていた。

「……あの子、今なにしてるんだろうな……」

そしてそれは、思わぬ形で成就する事になる。

「夜光の席は——桜野。お前の隣だ」

「……わかりました……」

「みんなも。彼はこの小学校に来て初日だからこの地域についても知らないだろう。教えてあげてくれ」

「「わかりましたー！！！！」」

威勢のいい声が教室中に響く。それに、俺は苦笑しながら桜野と呼ばれた生徒を探し——

「「……え（……）？」」

その瞬間、俺達二人の声はシンクロした。
何故なら――俺の隣の席の少女が、昨日俺が助けた少女本人だったから。

「……よ」

頭を抱えつつも、とりあえず声をかけてみる。しかし、桜野からの反応はない。

「……おい」

「今、忙しいから後にして……」

即答だった。

目線をたどると本がある。どうやら、それを読むのに集中しているらしい。

「ああ、桜野。夜光には暫く教科書が届かないから、貸してあげてくれ」

「……嫌です……」

先生からのお願いにも否定する。しかし、先生はそれを前もって理解していたかのように、

「……仕方無いな。夜光には予備の教科書を貸し出す事にする」

と言った。

それを聞いて満足そうにした桜野は、また読書に戻った。

「それでは、朝のHRを終了する」

「起立、礼」

社交辞令の後にHRが終了したと思いきや、クラス中の生徒が俺の方に押し寄せて来た。

「……あゝ、桜野」

「何……?」

とりあえずもみくちゃにされる前に、桜野にお願いをしておく事にする。それを、本を読みながらも彼女は耳を傾けてくれた。

「……今日の放課後、学校紹介をしてくれないか?」

「嫌……」

即答だった。

「そう言わずに、頼む」

「嫌……」

「個人的には、桜野に紹介して貰えたら嬉しい」

「仕方無い……他の人に任せても何かありそうだし、私がしてあげる……」

と思ったら、一瞬でOKが出た。

安堵と共にそれを聞き終えた瞬間、俺はクラスの生徒からの質問地獄に巻き込まれることになった。

「ここが、図書室……これで、貴方の為の学校紹介は終わり……」

理科室等定番の所を回り終わった後、俺達二人は最後の目的地である図書室にたどり着いていた。

中を覗くと、誰もおらずもぬけの空みたいな状態だったが、蔵書数がかかるの物であるということは簡単に推測出来た。

「ありがとな、桜野」

「貴方の為じゃない……私しかいなかったから仕方無くやっただけ……それじゃ……」

そう素っ気なく言い残し、桜野はスタスタと図書室の奥の方に入っていく。

——そんな華奢な腕を、俺は自分でも気がつかないうちに掴んでいた。た。

「……まだ、何か用があるの……?」

「……あー、その、なんだ」

だが、自分でも気がつかないうちに掴んでしまっていた為に、何も適当な理由が無いことに気づく。

（ヤバイこれただのナンパじゃねえかというより何で桜野の腕を掴んで離さないんだ俺の手はとかそんな事じゃなくて理由だ理由何かいいい理由はないかってそういうばこは遊戯王の世界で——）

そこまで考えた時に俺の頭の中で一つの案が浮かぶ。

自分は本当は天才だったんじゃないのかという考えを横にやり、俺は今脳で出た案を口にした。

「――今から、決闘デュエルしないか？」

言った瞬間、猛烈な後悔に襲われた。
そして、俺は天才などではなく、ただの馬鹿であるということを再認識した。

「……うわ、御免。忘れてくれ」

今言ったことを兎に角頭の中から消そうとする。あんな黒歴史確定な物、さっさと消しておいた事に損はない。

――その為だろうか。

「別に、いい……」

「へ？」

俺の馬鹿なお誘いに付き合ってくれた桜野に、俺が聞き返してしまったのは。

「……ここで、やろ……」

桜野に案内されたのは、図書室の奥にあった小さな決闘デュエルスペース。
まるで、俺達二人の為にあったかのような場所に座った俺は、服のポケットからデッキを取り出す。

まさかこの世界初のデュエルが普通の物とはな……

個人的には決闘盤のソリッドビジョンを是非とも使ってみたかったのだが――

「話、聞いている……?」

「うわあっ!?!」

いつの間にか桜野の顔が近くにあり、反射的に俺は数歩後退してしまふ。

……かなり焦ったぜ……

「……もう一度だけ説明する……ライフは4000、それ以外は普通のルールに従えばいい……そして、私がもし勝ったら……金輪際、貴方は私に近づいて来ないで……」

「へ……?」

急に宣言された事に驚いてしまう。そんな俺の動揺を知ってか知らずか、桜野は黙々とデッキを取り出し、シャッフルする。

「ちょっと待ってくれ。さっきの言葉、どういう意味だ」

「言葉通り……一切の接触を禁じさせて貰う……話す事や、私の席の周りに近づいたり……わかった……?」

「わかった、じゃねえよ。それに、そんな説明で納得出来るわけないだろうが」

「……兎に角、私の言葉には従って貰う……さ、構えて……」

わけのわからないまま、デッキをシャッフルし、カードを五枚引く。それを確認した桜野は軽く頷き、遊戯王開始の言葉を宣言した。

「決闘……!?!」
デュエル

過去編第二話 それはとっても嬉しいなって（後書き）

……綾香マジツンデレ、とか言わないであげてね。
気にしてるから。

過去編第三話 ローリングガール（前書き）

そろそろ副題のネタが切れてきました（汗）

……extendのローリングガールのエクスマジ鬼畜。

過去編第三話 ローリングール

「私のターン、ドロロー……魔法カード強欲な壺を発動し二枚ドロロー……さらに魔法カード昼夜の大火事を発動……800ポイントのダメージを受けて貰う……」

「な……っ！？手札のハネワタを捨てて効果発動！！このターンの効果ダメージを0にする！！」

……まさか、バーンデッキで来るとはな……

確かにこの世界のライフ4000でのバーンは非常に強力だ。いや、強力すぎる（・・・）。

そんなデッキでデュエルしたら、この世界では確実に嫌われるだろう。

あるいは——そうされた方がいい理由があるのか？

「……防がれた……モンスターをセット……さらにカードを三枚伏せてターンエンド……」

綾香

LP4000

場

セットモンスター×1

伏せカード三枚

手札6枚↓2枚

……厳しいな。

恐らくあのセットモンスターは、デス・コアラか何かと考えていい筈だ。あるいはマシユマロンか。

兎に角、このターン中に決着をつけた方がいい。

「俺のターン、ドロー！！魔法カード、天使の施しを発動！！カードを三枚引いて二枚捨てる！！さらに、魔法カード調律を発動！！デッキからジャンク・シンクロンを手札に加えてシャッフルし、デッキトップから一枚墓地に送る！！」

「……………！！ひょっとして、貴方も…………？」

……よし、これで墓地にはゾンビキャリアとボルト・ヘッジホッグ、グローアップ・パルプがある。いけるな。

「ジャンク・シンクロンを召喚！！効果で墓地のボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！！さらに、墓地からモンスターが特殊召喚されたことにより、ドッペル・ウォリアーを特殊召喚！！レベル2、ドッペル・ウォリアーにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング！！集いし知識が、新たな戦略の扉を開く！叡智の結晶を見せよ！！シンクロ召喚！！カモン、TGハイパー・ライブリアン！！」

現れるのは司書の形をした優秀すぎるシンクロモンスター。この口上、昔言ったら友人に『厨二乙』って言われたんだよな

……今は関係ないけど。

「ドッペル・ウォリアーの効果でドッペルトークンを2体生み出す。さらに、墓地のゾンビキャリアの効果、手札を一枚デッキトップに戻し、墓地から特殊召喚！！レベル2、ボルト・ヘッジホッグ、レベル1、ドッペルトークンにレベル2、ゾンビキャリアをチューニング！！集いし力が、正義となりて敵を討つ！！狂いし機械となれ！！シンクロ召喚！！起動せよ、A・O・Jカタストル！！」

そして、現れるのはもう一体のレベル5のシンクロモンスター。もうここまでくれば俺の狙いもわかるはずだ。

「ライブラリアンの効果でカードを一枚ドロ―!! さらに俺は、墓地のグローアップ・パルプの効果でグローアップ・パルプ自身を特殊召喚!! レベル1、ドッペルトークンにレベル1、グローアップ・パルプをチューニング!! 集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ! シンクロ召喚! 希望の力、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン!!」

「……まさか……1ターンであれを出す気なの……?」

桜野も気がついたみたいだ。だが、もう遅い。すでにあれを召喚する準備は整った。

「ライブラリアンの効果でカードをドロ―!! さらに、レベル5、TGハイパー・ライブラリアン、レベル5、A・O・Jカタストルにレベル2、フォーミュラ・シンクロンをチューニング!! 集いし星が1つになるとき、新たな絆が未来を照らす! 光さす道となれ! リミットオーバー・アクセルシンクロ! 進化の光、シューティング・クエーサー・ドラゴン!!」

口上全く思いつきません本当にありがとうございました。

「フォーミュラ・シンクロンの効果で一枚ドロ―!! 魔法カード抹殺の使徒を発動!! その伏せモンスターをゲームから除外する!!」

「……ッ……!! マシユマロン……」

……あつぶねー……攻撃前に除去しておいて正解だった……

だが、手札に桜野の魔法、罫を除去する手段は存在しない。ここで攻撃したら、手痛い反撃を食らう恐れもある。

けれど、ここで勝負をつけないければバーン効果で焼き殺されるだけだ。ここは攻撃するしかない。

「バトルだ!! シューティング・クエーサー・ドラゴンでダイレクタアタック!! 天地創造撃、ザ・クリエーションバースト!!」

「リバース罠、和睦の使者……」

「シューティング・クエーサー・ドラゴンの効果で無効にする!!」

シューティング・クエーサー・ドラゴンが強い理由は、ここにある。相手のリバース罠を無効にしながら連続攻撃が出来るという極悪さ、例え除去されても後続のシューティング・スター・ドラゴンを呼べるという万能さ。

そんなモンスターを出したという慢心か、はたまた和睦を無効に出来たという事実からか、俺は気づかなかった。

桜野が、小さな笑みを浮かべていたことに。

「それにチェーンして、リバース罠、魔法の筒……相手モンスター一体の攻撃を無効にし、相手にその攻撃力分のダメージを与える……」

「な……っ!?!」

既にシューティング・クエーサー・ドラゴンの効果を使ってしまった俺は、魔法の筒を無効にする術を持たない。

「……………そっ……………!!」

鏡夜

LP2800↓—1200

……油断した……

まさか魔法の筒を伏せているとは思ひもしなかったが、予想していなかったのは俺のミスだろう。

いや、それよりも――

「……私の勝ち……約束は守って貰う……」

——あそこまで周到な罠を仕掛けていた桜野を誉めるべきなのか。

「……わかった。けど、一つだけ聞きたい事がある」

未だにわからない、桜野が俺を拒絶した理由。それと、さっきのよ
うなバーンデッキを使った理由。

それを聞くと、桜野は何も言わずただ悲しそうな目で首を横に振っ
た。

——まるで、自分に関わると不幸になる、とでも言うかのよう
に。

「……頼む。それだけは教えてくれ」

誠意を込め、素直に頭を下げる。過去も頭を下げた事は多いが、こ
こまで誠意を込めた事は初めてだろう。

「——どうして、そんなに私に関わりたがるの……？」

「どうして、か……」

そう理由を聞かれると、今の俺にはない。

ただ、それを知りたい。今の俺の中にはそれだけがあった。

「……わかった……そのかわり、聞いたら、関わらない事を誓って
貰う……」

「それは、少し待ってくれ……」

「……別にいい……どうせ、貴方から私に関わらなくなるだけだか
ら……」

そう呆れたように言って、息を吐き、桜野は再度口を開いた。

過去編第三話 ローリングガール（後書き）

今回やりたかったのは、

クエーサーが出たのに敗北

です。

……初シンクロでクエーサーって……

今回の鏡夜のデッキはジャンクドッペル、綾香のデッキは連弾バーンです。シンクロは学園では出てこないようにはします。少なくとも、第二期までは……

感想等、お待ちしております。

では次回。いつになるかわかりませんがまたお会いしましょう。

過去編第四話 アンハッピーリフレイン（前書き）

まさしく『不幸の想起』です。

過去編第四話 アンハッピーリフレイン

……不思議な人……

それが、私が見た夜光鏡夜の第一印象だった……

見ず知らずの私を助けたかと思えば、私に見とれ、おまけに私に見とれるような、馬鹿な人……

それでいて、その一言一言に私を心配するような、そんな感じが含まれてる……

彼がシンクロを使った瞬間——私と同じ転生者だと知っても、私の出来てしまった気持ちは変わらなかった……

即ち、私が彼を好きだ、という気持ちは——。

でも……私の秘密を知ったら、今まで知った人のように、私を拒絶するのだろうか……

でも、それでいい……

私に関わって彼が傷つく位なら、私が嫌われた方がいい——

「貴方も転生者だから、転生云々はわかっているから、省くとして……その時に、特典とかなんだと言われて、私には変な能力が与え、いや、押し付けられた……」

「変な能力？」

「超能力——サイコデューリスト、と言えばわかりやすい……？」

……成る程な……そういうわけか。

だとすると、桜野が俺や人を過剰に避ける理由もわかりやすい。それは――

「未だに、制御出来ていない、ということか」

「そう……まるで、真祖の吸血衝動のように、零崎一族の殺人衝動のように、上条当麻の幻想殺しのように……未だに、私の能力はアンコントロールブルな能力……今回のデュエルで、デュエルディスクを使わなかったのも、それが原因……私がデュエルディスクを使うと、ダメージが実際の物として、プレイヤーを襲う……私は、そんなこと望んでなんかいないのに……!!」

桜野の悲痛な叫びが、図書室に響き渡る。幸いにも他の生徒に聞こえたような感じはないみたいだ。
それよりも――

「まだ、他にもある……私の、この世界の父と母は、現在囚監中……」

「はあっ!!!??」

一体何やったんだ、桜野の両親!?

「私を虐待していた癖に、私の能力――賽子が出る目がふる前にわかったりとか……ポーカーで相手の札がわかったりとか……そこをギャンブルに使えとわかった途端に手の平を返したように優しくして、違法ギャンブルで稼ぎまくって……それが警察にバレて……」

……馬鹿だろ、桜野の両親……

「それだけじゃない……他にも様々な違法行為をさせられて……人を傷つけたり、陥れたり……こんな能力、無かったら良かったの

に……!!」

ポタリ、て雫が落ちるような音がした。

「……これでわかったでしょう……？ 私に関わったら、貴方も傷つくことになる……だから、関わらないで……」

「……ざっけるな……」

……何に関わるなだよ。

親が犯罪者？ 超能力を持っている？ 傷つくかもしれない？
そんなのはな——

「——そんな理由なんか、関係無いだろ。俺は、お前と関わっていい。その何が悪い。お前は、何も悪くない」

「——ッ!!」

桜野が頬を真っ赤にする。何かしたか？ 俺？

だが、たぶんこれは願ってもないチャンスだ。今の内に、桜野の心が開いている内に——!!

「……どうして……そんなに私に関わりたがるの……？」

そんな事を思っていた頭が、急に冷却された。

どうしてだ？ 俺と桜野は赤の他人の筈だ。そう、決して前世で何かあったとか、そんな事は全くない、その筈なんだ。

だが、どうして——こんなに桜野の悲しむ顔が見たくないんだ。

桜野の、笑顔が見たいと思ってしまうんだ。

「何もないなら、関わらないで……所詮、貴方は部外者なんだから……」

その言葉だけを残して、桜野は姿を消した。そして、後には俺だけが残された。

「……なんでだろうな……」

わからない。

どうして桜野の事が気になるのか。俺は確かに部外者の筈だ。そう、そうに決まってる。

だが……

「守ってやりたい、と思うのはどうしてだろうな……」

わからない、何もかも。

過去編第四話 アンハッピーリフレイン（後書き）

ありふれた、それでいて本人には悲痛な過去。

それに縛られた女の子。過去編の綾香は元々そういうイメージでした。

では、また次回。いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

感想お待ちしております。

過去編第五話 矛盾螺旋（前書き）

（注：今回も少々重いテイストになっております）

過去編第五話 矛盾螺旋

……結局、家に帰っても問いの答えはわからなかった。

何故、俺が桜野の事をこんなに気にしているのか。近くにありそうな答えなのに、こんなにも遠くに感じる。もどかしかった。

「……とりあえず、神に貰った物を使うか……」

問いを頭の片隅に置き、取りあえず貰った便箋に桜野の事を書いてみる。

すると、文字が消え、新たに文字が現れた。

『何故、貴方はこれほどまでに彼女の事を気にするのですか？』

五秒くらいした後、また便箋は元の状態に戻る。しかし、そんなことはどうでもいい。

また、この問いか。俺は、俺自身を悩ませ続ける問いがこんな所でも出て来る事にもどかしさを感じた。

『そんな事自分でもわからないよ。桜野が苦しんでいるから助けるだけだ』

『アレは、彼女自身が欲した力ですよ』

……何だと!？

『どういう事だ!？』

『彼女が転生する時に、まず貴方と同じ物を与えたのですが、それともう一つ追加で『特別な力』を望んだのです。そう、まるで英雄

王の持つ『乖離剣』のような、赤き征裁が持つシニカルさのような、高木藤丸が持つ天性の発想力のような——そんな、たった一つ、彼女の為のモノ。私は、それを与えただけですよ』

『……なんで、そんなものを……』

そんなもの、よく考えたら意味のない重荷になるとわかっている筈なのに。

何故、そんなモノを。『それは、彼女の前世が原因でしょうね』

『前世？』

『ええ。彼女———現在は桜野ですが、前世は椿、まあ余談ですが桜野綾香は、最悪と言ってもよい家庭に生まれました。父親は酒飲みの穀潰し、母親はストレスに耐えきれずに桜野綾香を虐める。そんな毎日。その華奢な身体には数多の傷がつき、学校にも馴染めず、友人も出来ない。桜野綾香があんなに人を寄せ付けず、無口なのはそれが理由です。そして酒代や母親の買い物で借金が貯まっていく、そんな毎日。そして、彼女の両親は、そんな毎日に耐えかね、ある一計を図ったのです』

『……一計……？』

『ええ。桜野綾香が女であるという事を利用した、彼女の事を度外視した、最低と言われる一計を』

……女であること（……）を利用……？それってまさか——

『……ええ。彼女は、借金取りの慰み物にされたのです』

瞬間、俺の頭に、何か強い物で殴られたような感覚がした。

……そんな事も知らずに、俺は……

「アイツを助けるなんていうようなおこがましい事を思ってたってわけか……」

自分でも少し考えたらわかった筈だ。人を助けたいという思いは、ただの自己満足にすぎない。それでも彼女を、桜野助けたかった俺の本当の理由は――

『彼女が抵抗した為に処女膜を破られる前に殺されました。その為、不幸中の幸いか彼女自身は犯された記憶を持っていません』

『桜野の過去はもうどうでもいいんだ。やっとわかった。俺が、桜野の事を助けたい理由が』

『……ほう』

そう。答えは最初からあった。ただ、俺が見ていなかっただけで。

『ならば聞かせて貰いましょうか。どうして、貴方は桜野綾香の事を助けたがるのですか？』

『好きだからだ』

『……はい……？』

そう。初めてあったその日――いや、俺は、生まれる前から（・……・）

『彼女の事が、好きだったんだ』

『ふ……はははははははははは！面白、面白いぞ、人間――いや、夜光鏡夜！！好きな者の為に、貴重な権利を一つ無駄にするか！！』

『無駄なんかじゃないよ、この行為は』

『……ほう？なら聞かせて貰いましょうか。世界すら手に入れる事が出来る、そんな権利を、赤の他人の為に使う、その理由を』

『好きな者の為に、全てを捨てるのは男として当然だろう？』

『わかりませんね』

当たり前だ。神なんかにわかってたまるかよ。

彼女に会った時に気づいたモノ、気がついてから思う恋慕、彼女を自分の物にしたいと思う欲望、彼女が他の人と話してたら、と考えるだけで出て来る嫉妬心、そして——彼女を助けたい、と思う感情^{エゴ}。全て俺だけの物だ。

他の人間にさえわからない物が、天から見下ろすだけの神なんかに、わかるはずがない。

『……ただ、女である私を胸キュンさせた功績と、その想いを評価して、これを差し上げましょう』

そう書かれた瞬間、一瞬だけ激しい光が便箋から放たれ、それが収まった後、便箋の上に二つの指輪が置かれていた。

『それは、桜野綾香の能力を抑える効力を持った指輪です』

『……どうでもいいけど、なんで二つなんだ？一つでも十分だろ？』

『片方は私から貴方へのプレゼントですよ。両方ともプラチナ製なので婚約指輪にも最適です。ちなみにどちらも同じ物ですし、装者の指の大きさになるようにしてしますので、装着出来ない、という事はありませんのでご安心を』

『デメリットは？』

『あるわけないでしょう？』

それもそうか。

『では、今回はこれでさようならです。貴方のこれからの行動、期待していますよ』

そう書かれた瞬間、便箋はまるでそれ自体が元々無かったかのように消え去った。

それはいい。問題は――

『……これ、どうやって渡すんだよ……』

こんなん渡したら、『俺はお前の事が好きだ』って言っているのと同じじゃないか……

そして、結局その日は朝まで指輪の渡し方について悩んだ俺であった。

過去編第五話 矛盾螺旋（後書き）

というわけで、婚約指輪ゲットの回でした。

後一／＼二話で小学生編は終わるのですが、実は中学生編があったりするんですよ（汗）

なので、アンケートを取らせていただきます。

一、さっさとセスタ編行けよ！！というわけで原作に戻る。

二、デュエル無しでもいいから中学生編を読みたいぜ！！

正直自分のこんな駄文（笑）を読みたいなどという方がいるとは思いませんが、アンケートに答えていただけると嬉しいです。

では次回。いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

過去編第六話 全て遠き理想郷（前書き）

砂糖注意（笑）

過去編第六話 全て遠き理想郷

「……はあ……」

神から桜野の能力を抑える指輪を貰ってから一週間がたったが、未だに指輪を渡せてはいなかった。

ある意味当然だ。いつ声をかけても無視される。そんな相手に物を渡すなど無謀だろう。おまけにそれが指輪なのだ。どこの無理ゲーだ、と言いたくなる。

まあ――

「……さて、今日も無視られますか」

――今日も頑張って渡そうとするのだが。

side 綾香

「なあ、桜野」

……夜光は、馬鹿なの……？

一週間、ずっと無視し続けているのに……

ちゃんとあの時、私の過去まで言って関わらないと誓わせたはずなのに……

どうして、諦めずに私に関わろうとしてくるの……？
今までに見ないしつこさ……もう、馬鹿としか思えない……
それなのに——拒絶出来ない、いや、したくない……
拒絶したら私の望むように、また、一人になれるのに……

『……それは、違う……私が、望むのは、夜光と一緒に、過ごすこと……』

私自身の心は、そう言って来るし、理性は関わるべきではないと言ってくる……

……あれ……？

私が、本当に望んでいるのは、なんだっけ……？

side 綾香 end

「……夜光……」

「ん？どうした桜野？」

放課後。俺が話しかけようとする前に桜野に話しかけられた。高鳴る胸を抑え、桜野の言葉を待つ。

そして、桜野から放たれた言葉は——

「……もう一度だけ、私と決闘デュエルしよ……」

という、予想もしなかった言葉だった。

「……何故、屋上なんだ？」

五分後。桜野に連れられて屋上に出た俺は、決闘盤を構えて桜野と対峙していた。

「ここなら、人に見られ難いから……それよりも、この決闘では、ある一つのルールを定めさせて貰う……」

「ルール？」

「うん……勝者は敗者に、なんでも好きな命令を一つだけ聞かせる事が出来る……」

「な……っ!？」

——もし、それなら。

桜野を、俺の物にする事も可能なのではないか——。

そんな考えを一瞬だけしてしまい、即座にそれを切り捨てる。今俺がしなければいけないのは桜野に指輪をつけさせる事だけだ。彼女を自分の物にする事ではない。

「……前をお願いじゃあ効果がないみたいだったから、こうさせて貰う……」

「……な……っ!？」

待て。

じゃあ、桜野はもしかた俺に勝ったら、また自分に関わらないで、

と言うつもりなのか。

あんな過去を一人で抱えて。

変な、例え彼女が望んだにせよ使えない能力をその小さな身体に押し付けられ。

それなのに——相手のことだけを考え、彼女自身の事は勘定に入らず、またあんな事を言うつもりなのか。

「……わかったのなら、構えて……」

「……ああ」

桜野の指示に従い、決闘盤を構える。この決闘は、前の世界でやっていたような気楽な決闘とは違う。

俺は、そんなことは——

「じゃあ、始める……来なさい……」

「「決闘^{デュエル}(……)!!」

——絶対に、認めない。

俺の、全てをかけてでも。

「俺のターン、ドロー!! モンスターをセットし、カードを二枚セツト!! ターンエンドだ!!」

夜光鏡夜

LP4000

場

セットモンスター×1

伏せカード二枚

手札6枚↓3枚

俺にあっさりと先攻を与えた事から考えると、今回のデッキは前回のようなフルバーンでは無いのだろう。

だが、油断は全く出来ない。この決闘で、俺が桜野を救う事が出来るか否かが決まるから。

「私のターン、ドロー……マンジュ・ゴッドを召喚……効果で、デッキから高等儀式術を手札に加える……バトル、マンジュ・ゴッドで伏せモンスターに攻撃……」

「セットモンスターはライトロード・ハンターライコウ!! 効果でマンジュ・ゴッドを破壊し、デッキの上から三枚のカードを墓地に送る!!!」

落ちたのは――聖なるバリアー――ミラーフォースー、ジャンクシンクロン、ゾンビキヤリアか……聖バリがここで落ちるかよ……

「……カードを一枚伏せて、ターンエンド……」

桜野綾香

LP4000

場

伏せカード一枚

手札6枚↓4枚

高等儀式術ということは……まさか、あのデッキか……!?

となると、長期戦は俺に不利だ。下手をすると一ターンで勝負が決まる――!!

「俺のターン、ドロー!! 魔法カード調律を発動!! デッキからクイック・シンクロンを手札に加え、デッキトップのカードを一枚墓

地に送る!!」

落ちたのは——おろかな埋葬か。今は関係ない。

「手札を一枚捨てて、クイック・シンクロンを特殊召喚!!そして、墓地のレベル・ステイラーの効果発動!!クイック・シンクロンのレベルを一つ下げて特殊召喚!!レベル1、レベル・ステイラーにレベル4、クイック・シンクロンをチューニング!!集いし星が、新たな力を呼び覚ます!!光さす道となれ!!シンクロ召喚!!現れろ、ジャンク・ウォリアー!!」

現れるのは数あるシンクロモンスターの中でもトップクラスの知名度を誇るモンスター。

だが、場にはレベル2以下のモンスターは一体もないため、効果は発動出来ず攻撃力は元の2300のままだ。

おまけに、手札にはいいモンスターカードがないため、せっかくの召喚権を使う事が出来ない。その為、俺の狙いであったがそれでも、こいつを出せただけ幸いだろう。

「バトルだ!!ジャンク・ウォリアーでダイレクトアタック!!スクラップ・フィスト!!」

「リバーズ、カード、和睦の使者……このターン、私は戦闘ダメージを受けない……」

「……くそっ……ターンエンドだ!!」

夜光鏡夜

LP4000

場

ジャンク・ウォリアー（攻撃力3300）

伏せカード二枚

手札4枚↓2枚

「私のターン、ドロ―……来た……」

……来るか……っ!!

「手札から儀式魔法高等儀式術を発動……デッキのネオバグと甲虫甲冑騎士を墓地に送り、現れて、終焉の王、デミス……」

……来やがった……儀式モンスターの中でも最強クラス的能力を誇り、元の世界で暴れまわった、終焉の王が。

「デミスの効果、ライフを2000ポイント支払い、フィールド場の、全てのカードを破壊する……く……ああああああっ!!」

「桜野っ!!」

効果発動を宣言した瞬間、桜野が強烈な悲鳴を上げだした。予想でしか無いが、多分例の能力のせいで、身体的なダメージを受けてしまっているのだろう……くそっ、指輪さえ渡せば……!!

桜野綾香

LP4000↓2000

「……終焉の……嘆き……!!」

桜野が効果名を宣言する。そして、この瞬間こそ――

「リバースカード、オープン!!」

――俺の、反撃の始まりだ。

「罨カード、スターライト・ロード!! デミスの効果を無効にして

破壊する!!」

「……なん、ですって……?」

破壊されていく終焉の王。そして、まだスターライト・ロードの効果は続いている。

「スターライト・ロードのもう一つの効果、エクストラデッキからスターダスト・ドラゴン一体を特殊召喚出来る!! さあ、吹き荒べ!! スターダスト・ドラゴン!!」

フィールドに現れた瞬間、その美しい姿を見せつけた後、吠えて威嚇するスターダスト。こんな状況でなければ見入ってしまったであろう。それ程このモンスターは美しかった。

「……まだ私のメインフェイズは終了していない……!! 魔法カード、死者蘇生を発動し、デミスを蘇生させる……さらに、墓地の二体の昆虫族をゲームから除外し、デビルドローザーを特殊召喚……さらに、デビルドローザーを生贄に、偉大魔獣ガーゼットを召喚……装備魔法、デーモンの斧をデミスに装備させ、バトル……!! デミスで、スターダスト・ドラゴンに攻撃……!!」

「リバースカード、オープン!! 和睦の使者!! このターン、俺は戦闘ダメージを受けず、モンスターは戦闘では破壊されない!!」

……危ないな、本当に。

「ターンエンド……」

桜野綾香

LP2000

場

偉大魔獣ガーゼット（攻撃力5600）

終焉の王デミス（攻撃力2400）

「どうして……」

「え？」

「どうして、私に関わりたがるの……？ 同情のつもり……？ 馬鹿じゃないの……？ 私に関わっていいことなんて、何も無いのに……！ それなのに、どうして、貴方は私に関わろうとするの……？」

……答えるべき言葉は、意識せずに、自然に口から出ていた。

「お前の事が、好きだからだよ、桜野」

side 綾香

……へ……？

「……もう一回、言って……？」

「お前の事が、好きだからだよ、桜野」

……胸が、自然と高鳴る……。

嬉しい……凄く嬉しい……嬉しすぎて飛び上がってしまいそうなくらいに……。

けど、私は夜光の告白に答えるべき言葉を持っていない……例え両想いであったとしても、私と一緒にいればいつか必ず彼を傷つける。それは嫌だ……。

だから、さらに拒絶しようとした、その時だった……。

「俺は、お前の能力を抑える術を持っている」

そんな衝撃の事を言われ、一瞬心臓が止まりそうになる……

「俺をこの世界に送りこんだ神からお前の前世と今までの事を聞いた時にその術を貰った。はっきり言って俺なんかでは想像も出来ない程の苦しみをお前が味わって来たという事しかわからなかった」

……当たり前……あれは、誰にもわからないしわかって欲しくない……

特に、実の親に身を売られた事なんて、誰にもわかるわけがない……わかる、なんてのはエゴだ……

「でも、それを俺も背負う事は出来る。お前一人で苦しい時は、俺がずっと支えてやる。お前が悲しい時は、俺の胸を貸してやる、だから、お願いだから俺を頼ってくれ」

その言葉に、以前とは比べ物にならない程胸が高鳴る……や、やばい、そんな事言われたら……

夜光の顔、直視出来ないよ……

「だから、その為にも、お前に拒絶されない為にも、俺はお前を倒す！！俺のターン、ドロロー！！魔法カード、壺の中の魔導書を発動！！互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドロローする！！魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！！手札からダンディライオンを墓地に送り、デッキか救世竜セイヴァー・ドラゴンを特殊召喚！！さらに、墓地のダンディライオンの効果で、二体の綿毛トークンを特殊召喚！！」

レベル8、スターダスト・ドラゴン、レベル1、綿毛トークンに、

レベル1、セイヴァー・ドラゴンをチューニング！！救世の名を持ちし竜よ、一人の少女を救う為に力を貸せ！！シンクロ召喚！！生来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン！！」

わ、私を救う為、って……は、恥ずかしい口上……でも、嬉しい……

「まだだ！！カードガンナーを召喚！！さらに、魔法カード機械複製術を発動し、デッキからもう一体のカードガンナーを特殊召喚！！俺のデッキには、カードガンナーは二枚しか入っていない。そして、レベル3のカードガンナー二体をオーバーレイ！！二体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！！エクシーズ召喚！！現れろ、NO.17、リバイス・ドラゴン！！」

……あれは、私があげたカード……？

「桜野。このリバイスは、お前から貰ったカードだ」

……ずっと、持ってくれたんだ……

嬉しい……でも、こんな事で、嬉しく感じるなんて初めて……私、どうかしちやっみたい……

「リバイス・ドラゴンの効果、オーバーレイ・ユニットを一つ取り除き、攻撃力を500ポイント上昇させる。俺はカードガンナーを墓地に送る。さらにセイヴァー・スター・ドラゴンの効果、偉大魔獣ガーゼットの効果を無効にする！！サブリメーション・ドレイン！！」

……私の負け、ね……

「俺の勝ちだ！！リバイス・ドラゴンでガーゼットにバイス・スト

リーム!!」

桜野綾香

LP2000↓—500

「……で、だ桜野」

「……何……?」

「出来ればさっきの事、忘れてくれないか……?」

そう、真っ赤な顔で言う夜光……馬鹿にも程がある……
もう、私は――

「鏡夜……」

「……今、名前で……?」

――貴方を、逃がす気はないというのに。

「私も、貴方の事が好き……だから、あの告白、受ける事に……
…」

そう口にする、鏡夜ははじめぼかんとしたような顔をして、それから満面の笑みを浮かべてガッツポーズした……

「ようやくこれを渡すまともな理由が出来た……桜野」

「綾香……そう呼んで……」

「じゃ綾香。これを受け取ってくれるか?」

ガッツポーズし終わった後、鏡夜がプレゼント、という名目で私にくれたのは、一つの指輪だった……

でも、よく見るとものすごい力を感じる……もしかして、これが……？

「ああ。お前の能力を封じる術だ。しかもペア用のを。全く、なんで指輪型にしたんだよ、神の野郎は……」

そう頬をかきながら照れくさそうに言う鏡夜……そんな貴方が私は、愛しくてたまらない……

「綾香さえ良ければ、それを――」

鏡夜が何か言う前に自分自身の薬指につける……すると、今まで抑えきれ無かったナニカが急に消えた気がした……
まあ、そんな事ははどうでも良くて……

「……いいのか、綾香？」

「……何が……？」

「俺なんかが相手に、本当にいいのか？」

鏡夜の言葉には何も返さず、無言のまま彼の唇に私自身の唇をひつつけた……

そのまま流れにそって舌を絡ませあい、息が止まりそうになるまでその状態でいる。まるで、お互いを求め合う獣みたい……

約一分後、流石に耐えきれなくなった私は彼から唇を離す。そして、未だに茫然自失としている大馬鹿者に、こう宣告した……

「もう、一生離さないんだから……！！」

それを聞いて戻って来た鏡夜は、私の言葉を聞いた後、にっこりと笑い、彼の分の指輪を彼自身の左手の薬指にはめた。

「俺もだよ、綾香。お前を一生離さない。嫌って言ってもついて回るから覚悟しとけよ？」

「それは、私の台詞……絶対に、浮気だけはしないでね……？」

そう言って、二人で笑いあい——もう一度、同じ場所で私達はキスをした。

永遠の愛を誓うような、そんな——長い、長いキスを。

side 綾香 end

過去編第六話 全て遠き理想郷（後書き）

というわけで、セイヴァーさん登場でした。

……救いの竜としてセイヴァーさん、元々綾香のカードという事でリバイス・ドラゴンを出す事は当初から予定していたのですが……難しかったです（笑）

……最後は、作者ですら書いて砂糖が吐きたくなってくる程の甘さでした。反省も後悔もしていませんがね！！（↑駄目人間

次に小学生編エピソードっぽいのを投稿した後、中学生編に入っていきます。アンケートにご協力頂いた皆様、ありがとうございます御座いました。

感想お待ちしています。では、いつになるかわかりませんが、またお会いしましょう。

過去編 エピローグ フェアリーテイル (前書き)

……タイトル詐欺、レッツゴー☆

過去編エピローグ フェアリーテイル

「なあ、夜光」

「どうしたんですか、先生？」

先生の目線が恐い。俺は何もやっていないのに。理不尽だ。

「……桜野の事だが」

「……どうしたんですか、先生……？」

隣の綾香も首を傾げている。俺達は何もしていないのに、どうして先生は頬をひくつかせているんだ？わからん。

「どうしてお前に抱きつきながら（……………）授業を受けているんだ？」

「え？普通じゃないんですか？」

「どこがだ。授業の邪魔になるから夜光から離れろ、桜野」

「嫌です……これじゃないと、まともに授業を受ける気なんかしないから……」

「……はあ……昨日まではあんなに拒絶してたお前が、今日来たら急に夜光に抱きついていて砂糖が吐きそうなくらいの雰囲気醸し出しているとはな……何があったんだ、全く……」

昨日か。確か————

「私が拒絶したのに、馬鹿な鏡夜は私を受け入れると言ってくれて、そのまま婚約しただけですよ……」

——綾香が説明したようなことがあったはず。
ちなみにあの後中学に入るまではエッチなことはしないと決めた。
流石に今襲うのも考え物だったしな。

「……その省略した中で何をやったのが聞きたいのだが」

「……ただ、決闘デュエルしただけですよ……？」

「お、お前決闘出来たのか！！じゃあ俺と決闘しようぜ！！」

「黙っとれ優介。全く……桜野が変な話題をふるから、クラスの全員が反応しただろうが……」

先生の言葉に反応して周りを見ると、いつの間にやらデッキを取り出しているやつが数人、そうで無くても『へー、あの人が決闘出来るんだー』等の声が聞こえる。別にやってもいいが……泣きたいのか？

「ちなみに、私を倒す程の実力者……」

こういうと、ほぼ全員が手と膝を地面につける所謂orzのポーズをとった。

……何故だ？

「あの桜野に勝った、だと……？」

「私達全員対一人で、ただの一ダメージも受けずに勝った、あの桜野に……？」

「……私達の実力で、勝てるわけじゃない……」

「……綾香、何をやったんだ……？」

全員の言葉が怖くなって来たので、綾香に確認をとる。というか全員対一人で勝つとか……エクゾくらいしか知らんぞ……？

「別に……図書館エクゾで一ターンで揃えただけ……」

……図書館エクゾとか、そりゃ勝てるわけないな……しかもこの世界の禁止・制限だし。天使の施しと強欲な壺がさぞかし暴走したところだろう。

「……怒ってる……？」

綾香がシュンとしたような目で俺を見て来る。その姿が余りに可愛いので、思わずキスをしてしまう。

十五秒位の口付けの後、俺はゆっくりと口を離した。

「怒るわけないだろ。お前に先攻を与えたあいつらが悪いんだ」

「鏡夜……」

「……お前達、本当に小学生か……？年齢を偽ってるんじゃないのか……？」

全く、失礼な。俺は正真正銘小学生だ。精神年齢は大人だが。

「鏡夜……ぎゅっ、として……」

「全く、しょうがないな、綾香は」

「……この二人はほっというて、授業を再開する」

俺達が甘い空気を醸し出している教室の中に、先生の諦めたような声が響き渡った。

——昼休み。

「鏡夜、はい、あーん……」

「うん、美味しいよ、綾香」

「……すごいラブラブじゃない、あの二人……」

「昨日まではあんなに拒絶してたのにね……」

「一体何があったのかしら……ただ一つ確実に言えることは」

「「「「そろそろ自重しろバカップル!!」」「」」「」」

え？そんなにひどいことしてるかな。

俺はただ、綾香を膝の上にのせて『あーん』をやっているだけなの
だな。

「……その、なんで怒られているのかわからない、と言いたげな顔
がさらに腹立つわね……」

「こんなの漫画の中でも見たことないわよ……」

「砂糖吐きそうだわ……」

何故か女子が全員血の涙を流しそうな状態なのだが。
それに比べて男子は——

「俺のターン、ドロー!!よし、場のミノタウロスを生贄に捧げジ
ヤッジ・マンを召喚!!とどめだ!!ジャッジ・マンでダイレクト
アタック!!」「ちくしょう、また負けた……」

——やはりまだまだガキらしく決闘中だった。

しかし、ジャッジ・マンとか。せめてデーモンの召喚とか無いのか
？まあ、いいけど。

「なあ鏡夜、俺と決闘^{デュエル}してくれよ!!」

さっき勝ったらしい少年が笑いながら話しかけてくる。えっと、名前は――

「優介、だったか」

「お、覚えててくれたんだな!!」

「まあ、一番印象に残ってたしな」

そりゃあ、今日名前を呼ばれてた奴を忘れないだろうよ。

「それより、決闘、か。別にいいぞ」

「本当か!？」

「ああ」

決闘盤を構え、優介と向き合う。当然シンクロを使うデッキではない。あんなに使ったら世界が終わる。いろんな意味で。ま、今は――

「^{デュエル}決闘!!!」

こいつとの決闘を楽しみますか。

side 綾香

「桜野さん」

「……何……?」

いつもは私に話しかけては来ない女子が私に話しかけて来る……どうせ、鏡夜のことだろう……

「……なんで、あんなに夜光君と急に仲良くなったの……?」

……予想通りすぎて、何も言えない……

「俺のターン、ドロー。異次元の生還者を攻撃表示で召喚。カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

鏡夜

LP4000

場

異次元の生還者（攻撃力1800）
伏せカード二枚

「なんで、って言われても……」「お願い!! 私にも、好きな人がいるの!! だから、あんなにラブラブになる秘訣を教えて!!」

……教えて、と言われても……

「俺のターン、ドロー!!」

「リバースカード、オープン。マクロコスモス。墓地に送られるカードは全てゲームから除外される」

「除外?それがどうした!! 俺はブラッド・ヴォルスを召喚!! バトルだ!! ブラッド・ヴォルスで異次元の生還者に攻撃!! 魔人の一撃!!」

「……くっ……」

鏡夜

LP4000↓3900

「私は、何もしていない……全部、鏡夜のおかげなの……」

「そんな事ないでしょ！？そんなんじゃないじゃあんなにラブラブになれるわけじゃない！！」

「私は、貴方と同じ、いや貴方を超える位臆病者……私が鏡夜を拒絶していたのは、鏡夜を傷つけたく無かったから……」

「どういう、こと……?」

ちょっと、話しすぎちゃったかな……

「へへっ、どんなもんだい！！ターンを終了するぜ！！」

「エンドフェイズ時に異次元の生還者の効果発動。除外されている異次元の生還者自身を特殊召喚」

「なんだって！？そんな効果を持っている

モンスターがいたのか!？」

優介

LP4000

場

ブラッド・ヴォルス（攻撃力1900）

「優介。カードを伏せなかった事を後悔しろ！！俺のターン！！」

私は、ただの臆病者……鏡夜に助けて貰わないと一生あの場所から動く事が出来なかった、愚か者だから……

「私の話を聞いても、そんなに意味はない……」

「そう……」

「でも……貴方の恋を成就させる手伝いくら出来る……例えば、料理を教えるとかなら……」

「……え？」

——だからこそ、鏡夜に救われたからこそ、私はあの場所に戻ってはいけない……

それが私に出来る、鏡夜の思いに応えることだと思うから……

「魔法カード、封印の黄金櫃を発動！！ネクロフェイスを除外！！さらに、ネクロフェイスの効果で互いのプレイヤーはデッキの上からカードを五枚除外する！！」

「な、なんだって！！？」

「魔法カード、カオス・グリードを発動。デッキからカードを二枚ドロロー！！そして、俺は異次元の生還者を生贄に捧げ——遥かな天におわする帝王よ、その雷で敵の下僕を撃ち抜け！！現れろ、雷帝ザボルグ！！効果発動！！ブラッド・ヴォルスを破壊する！！」

「な、なんだって、うわっ！！」

「だから、一緒に頑張ろ……ね……？」

「……御免、今まで貴方のこと、誤解していたかも……」

「え？何々？桜野さんが料理を教えてくれるの？」

「お願い！！私にも教えて！！」

……料理で釣ったのが失敗かもしれない……私が料理出来ると知ってみんな集まって来た……

でも、私もクラスに溶け込んで来た、のかな……？

「バトルだ！！ザボルグでダイレクトアタック！！」

「く……くそっ……」

優介

LP4000↓1600

「へへっ、まだ終わってないぜ!!」

「リバーカード、オープン。D・D・ダイナマイト。お前がカードを除外している数一枚につき300ダメージを与える。お前が除外している枚数は6枚、合計1800ダメージを与える。終わりだよ、優介」

「な……なんだってえ!?!うわああああ!!」

優介

LP1600↓200

どうやら決着がついたみたい、ね……

「じゃあまた今度教えてよ!!」

「私は別にいつでもいい、だから適当に日を決めて私に教えてくれたらいつでも教えてあげる……だから、ちょっと御免……」

女子の環から抜け出し、鏡夜に抱きつく……少しでも離れていると、不安すぎて崩れ落ちそうになってしまう……

ああ、私はもう――

「……全く。どうしたんだ、お姫様?」

「なんでもない……でも、手は離さないで……」

「仰せのままに、ってか」

「馬鹿……」

もう、貴方から離れられない……

side ?

「兄サマ!!」

「どうしたモクバ。何かあったのか？」

「いや、違うよ。あのサーバーにデータが無かったカードなんだけど、I2社に問い合わせても、知らないって言われた。ペガサスも、あんなカードデザインしていないって言ってた」

「……行くぞ、モクバ」

「……まさか、会いに行く気なの？」 「ああ。俺達の知らないカード、そしてあの異質な召喚方法……俺自身の目で、確かめなければ気がすまん」

「はあ……兄サマだから仕方無い、か……」

side ? end

過去編エピソード フェアリーテイル（後書き）

これ書きながら聞いてた曲が『マジカル☆ぬこレンレン』でした（笑）

知らない方に言っておきますがこの曲はかなり女子向けです。それも腐った。耐性のない方にはお勧め出来ないかと（汗）

そして、今回使ったデッキは一応『次元帝』なのですが……イマイチだったのでまた使います。

感想等、お待ちしています。

後、もうすぐPVが500000を超えそう（現在490000）なんです、記念に何かやろうかな……迷う。

それはおいておいて、この作品（笑）を読んでいただいた全ての読者様に感謝を。正直、投稿した当初は『150000PV超えたらいいほうだな』と思っていたのですが……はい、素直に嬉しいです。

それでは、またお会いしましょう。

過去編EX ……社長、俺、何かしましたか？（前編）（前書き）

社長エ……

過去編EX ……社長、俺、何かしましたか？（前編）

「……えーと」

「ふうん。何か問題でもあるのか？夜光鏡夜……」

「いや、どうしてこうなったのかな、って思ったただけだ、海馬瀬人」

思い返す。どうしてこうなったのか。

そう、あれは確か――

――回想中――

「夜光鏡夜か」

「そうだけど？」

「私は磯野という。すまないが、一緒に海馬コーポレーションまで来て貰えないだろうか？」

「何故だ？」

「社長がお呼びなんだ。抵抗するのなら少々事を荒くしてもいいと言われている。だが、個人的には事を荒くしたくはないんだ」

「嫌だ面倒くさ――」

「鏡夜、行こ……？（乞い願うような目線＋上目使い）」

「というのは冗談ですすみませんでした早く連れてって下さいお願いします」

「あ、ああ……」

「……計画通り……」

――回想終了――

……あれ？

上手く綾香に乘せられた気がする。別にいいけど。

「……で、用って何だ？」

「決まっている。貴様の持つ我が社のデータベースにないカード、そしてかつてない召喚方法——それを、確かめさせてもらうのだ」

——やはり、か。

「それで、どうするんだ？無理やり聞き出すのか？」

「そうしてもいいが、それではつまらん。ここは、純粹にデュエルで決着をつけようではないか」

……なるほど、な。

「ようするに、俺と戦ってみたい、という所か」

「まあ、そんな所だ」

面白いな。

海馬は、自らが社長であるにも関わらず、俺と決闘デュエルをしたいと言っている。それは、本当に興味から来るものなのか、その圧倒的な自信からくるものなのか。

まあ、どちらにせよ——

「マッチで決着をつけようと思うのだが、どうだ？俺が勝てば詮索は無しと一つ言う事を聞いてもらう。お前が勝てば、お前が知りたいた事を全て教え、その上で欲しいカードを全てくれてやる。それでは不満か？」

「いいだろう。我が青眼の前には全てが無力であることを教えてやる」

「決闘^{デュエル}!!!」

——この社長を、ボコボコにしてやる。

「俺のターン、ドロー!!! ふ、海馬瀬人。お前に青眼の別の使い方を教えてやるよ」

「別の使い方だと、ふうん、青眼とは絶対的な力。それ以外の使い方などない!!! それに、青眼は俺の持つ三枚と俺が破り捨てた一枚だけだ。貴様が持っているはずがない」

確かに普通ならそうだろう。だがな、このデッキでは違うんだよ。それに、青眼持ってるし。

「王立魔法図書館を守備表示で召喚し、!!! さらに速攻魔法超再生能力を発動!!! このカードは、このターン手札から捨てるかりりーすしたドラゴン族の数だけ、デッキからカードをドロー出来る!!! そして、図書館に魔力カウンターが一つ乗る!!! 未来融合フューチャー・フュージョンを発動!!! デッキから、トライホーン・ドラゴン二枚、ブルーアイズ・トウーン・ドラゴン、デブリドラゴン二枚を墓地に送り、ニターン後の未来にF・G・Dを特殊召喚する!!!」

「……何を考えている……?」
「さあね。未来融合の発動により、図書館にカウンターが一つ乗る。魔法カード、調和の宝札を発動。伝説の白石を捨てて二枚ドロー。伝説の白石の効果、デッキから青眼の白龍を手札に加える」

「ブ、青眼だと? 何故貴様がそれを持っている!?!」

残念だけどそれは教えられないんだ。教えた場合色々と問題が生じ

るし。

「さてね。調和の宝札の発動により、図書館にカウンターが一つ乗る。王立魔法図書館の効果、魔力カウンターを三つ取り除いて一枚ドロ。魔法カード、トゥーンのもくじを発動し、デッキからトゥーンのもくじを手札に加える。魔法カードトゥーンのもくじを発動し、デッキからトゥーンのもくじを手札に加える。最後のトゥーンのもくじを発動し、デッキからブルーアイズ・トゥーン・ドラゴンを手札に加える。図書館の効果、三枚のもくじで溜まったカウンターを全て取り除いて一枚ドロ。魔法カードトレード・インを発動。手札のブルーアイズ・トゥーン・ドラゴンを捨てて二枚ドロ。魔法カード、調和の宝札を発動。手札の伝説の白石を捨てて二枚ドロ。伝説の白石の効果、デッキから青眼の白龍を手札に加える。二枚目の超再生能力を発動し、王立魔法図書館の効果発動。デッキからカードを一枚ドロ。魔法カード天使の施しを発動。カードを三枚引いて二枚捨てる。魔法カード埋葬呪文の宝札を発動。墓地の魔法カード三枚を取り除いて二枚ドロ。ターンエンド、この時超再生能力の効果発動、捨てたドラゴン族は全部で五枚、よって五枚ドロ!!……この

瞬間、俺の勝ち確定した!!手札にエクゾディアパーツが全て揃ったので、封印されしエクゾディアの効果で俺の勝ちとなる。焼き払え、古の巨人よ!!地獄の劫火、エクゾード・フレイム!!」
「な、なんだと!?!わ、僅かワンターンでエクゾディアを揃えたというのか!?!ぐああああ!!」

……うん、なんというソリティアゲー。この世界の最強デッキは下手をするとエクゾディアかもしれない。

これだから昔の遊戯王は『ジャンケンゲー』と言われたのか……

「まず一戦、俺の勝ちだ」

さて、次はどうするか……まあ、使うデツキは既に決まっているんだけど。

過去編EX ……社長、俺、何かしましたか？（前編）（後書き）

というけでジャンケンゲー（笑）でした。

次のデッキはもう決まっているので早めに更新出来ると……いいなあ……（遠い目）

では、次回またお会いしましょう。

感想お待ちしております。

過去編EX ……社長、俺、何かしましたか？（後）（前書き）

社長（笑）

過去編EX ……社長、俺、何かしましたか？（後）

「……さて」

さっきはかなり卑怯くさい方法で勝った。ドラゴンエクゾでワンキルとか、そりゃあ勝てないって。

まあ、次も——

「二戦目だ。行くぞ海馬」

「次こそ……俺の青眼の力を見せつけてやる！！来るがいい、夜光鏡夜！！」

——真面目に、ボッコボコにするのだが。

「先攻は譲ってやるよ」

「ふうん。貴様が何故青眼を持っているかは知らん。だが、真の所有者は俺であるということを見せてやる！！俺のターン、ドロー！！俺は、正義の味方カイバーマンを召喚し——」

社長がカイバーマンとか……ギャグか？

「……ぷっ……カイバーマン、って……」

見ろ。綾香も笑いを押し殺しというぞ？

「さらに、カイバーマンの効果、このカードをリリースし、手札から、青眼の白龍を攻撃表示で特殊召喚する！！フハハハ！！見ろがいい、これこそが真の最強モンスターの姿だ！！」

「わー、すごいなー、あこがれちゃうなー」

確かに強いと思うけどそれはサポートありきの事であって、本体だけならただのバニラモンスターだと思ってしまうのはしょうがないと思うんだ。

「舐めた口を……！！カードをセットし、ターンエンドだ！！」

海馬瀬人

LP4000

場

青眼の白龍（攻撃力3000）

伏せカード一枚

手札六枚↓三枚

「俺のターン、ドロー！！……ふむ」

さて。どうぼころうか……まあ、これでいいか。

「マジカル・コンダクターを召喚し、手札からフィールド魔法、魔法都市エンディミオンを発動する！！」

「なんだ、このフィールド魔法は……」

現れるのは、どう動いているのかわからない都市。このデッキのキーカードでもある。

「手札からワン・フォー・ワンを発動！！手札のブラック・マジシヤンを捨てて、デッキからチューナーモンスター、エフェクト・ヴェーラーを特殊召喚！！」

「チューナーモンスター……聞いた事のないカードだな……」

まあ当たり前です。未来のモンスターですから。

「そしてマジカル・コンダクターにカウンターが二つの。魔法カード、おろかな埋葬を発動し、デッキからブラック・マジシャン・ガールを墓地に送る。この時マジカル・コンダクターにカウンターが二つの。魔法カード、強欲な壺を発動！！デッキからカードを二枚ドロロー！！この時マジカル・コンダクターにカウンターが二つの！！マジカル・コンダクターの効果発動！！魔力カウンターを六つ取り除いて、墓地からブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚！！レベル六、ブラック・マジシャン・ガールにレベル一、エフ・エクト・ヴェーラーをチューニング！！集いし魔力を束ねし時、新たな魔術師の姿を現す。全てを撃ち抜く力を見せよ！！シンクロ召喚！！」

「シンクロ召喚……………だと…………？」

そうだ、海馬。

これこそが、お前が知りたかった召喚方法。

それこそが、シンクロ召喚——未来の召喚方法。

「新たな魔術師の力を見せろ、アーカナイト・マジシャン！！」

「な、なんだそのモンスターは！！」

なんか驚いてばかりだな、海馬。

「それが、お前が知りたかった物だろう？続けるぞ。アーカナイト・マジシャンの効果でこのカードに魔力カウンターを二つ載せる。さらに、魔力掌握を発動し、このカードに魔力カウンターを一つのせ、デッキから同名カードを一つ手札に加える。さらに、マジカル・コンダクターの効果でこのカードにカウンターが二つの。アーカナ

イト・マジシャンの効果、このカードの替わりに魔法都市エンディミオンの魔力カウンターを一つ取り除き、青眼の白龍を破壊する！」

「な、なんだと！？馬鹿な！！」

アーカナイト・マジシャンが手に持つ杖から、ってなんで星を出して撃ち出してるんだ！？しかも弾幕って……魔理沙かよ。

しかも破壊された瞬間『ぴちゅーん』って音がしたし……

そしてお前。精霊じゃあないだろ。なんで『テヘペロ☆』ってやってるんだ。

「……もう一度アーカナイト・マジシャンの効果発動。その伏せカードを破壊する」

「リバースカード、オープン！！和睦の使者！！このターン、俺は戦闘ダメージを受けない！！」

「ちっ、防がれたか……魔法カード一時休戦を発動。互いにカードを一枚ドロし、次の俺のターンまでお互いにダメージを受けない。カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

夜光鏡夜

LP4000

場

アーカナイト・マジシャン〔攻撃力3400（魔力カウンター×3）

〕

マジカル・コンダクター〔攻撃力1700（魔力カウンター×6）〕

伏せカード一枚

魔法都市エンディミオン（魔力カウンター×）

手札六枚↓一枚

さあ、どう来るか……詰め込みワンキルでも

「おのれええ、よくも俺の青眼を！！俺のターン、ドロー！！魔法カード天使の施しを発動！！デッキからカードを三枚引き、その後カードを二枚捨てる！！魔法カード、龍の鏡を発動！！墓地の青眼の白龍三枚をゲームから除外し、現れる、我が最強のしもべー青眼の究極竜！！魔法カード、次元融合を発動！！ライフを2000支払い、ゲームから除外されているモンスターを全て特殊召喚するがー残念ながら貴様には除外されているモンスターはいないようだな。よって、俺だけが特殊召喚出来る！！現れるがいい、青眼の白龍達よ！！ふはははは！！見るがいい夜光鏡夜！！これこそが真の最強モンスター達の姿だ！！」

やられる所だったよ、あつぶねえ……

つうかチートすぎだろ、そのドロール……一ターンで究極嫁と嫁が三体並ぶとか……しかも究極嫁は正規召喚だぞ……？

「一時休戦とやらの効果で戦闘ダメージは与えられないようだが、モンスターの破壊は出来る。バトルだ！！青眼の究極龍でアカナイト・マジシャンに攻撃イ！！アルティメット・バースト！！」

その三つの口から放たれる強大な閃光に適う訳もなく、一瞬で破壊されていくアカナイト・マジシャン。

……しかし、最後に箒を取り出したのは何故なのだろうか。

「まだ攻撃は残っている！！青眼の白龍で攻撃イ！！ジブリールよ、その雑魚モンスターを破壊しろ！！滅びのバーストストリーム！！」
「くっ……マジカル・コンダクター！！」

「ターンエンドだ。ふはははは、この状況、なすすべもありはしない！！」

海馬瀬人

LP4000↓2000

場

青眼の究極龍（攻撃力4500）

青眼の白龍×3（攻撃力3000）

……にやろう。

「俺のターン、ドロー！！魔法カード天よりの宝札を発動！！互いのプレイヤーはデッキから手札が六枚になるまでカードをドロースる！！」

「ここで天よりの宝札だと！！？」

よし、いける。社長、お前のターンは終わった。これからは――

「魔法カード早すぎた埋葬を発動し、墓地のアーカナイト・マジシヤンを特殊召喚！！さらに、リバース罠、バスター・モードを発動！！アーカナイト・マジシヤンを生贄に捧げ――秘めたる力を解き放ち時、新たな魔術が世界を照らす！！現れる、アーカナイト・マジシヤン／バスター！！」

――――ずっと俺のターンだ。

「さらに、魔法カードミラクルシンクロフュージョンを発動！！墓地のアーカナイト・マジシヤンとエフェクト・ヴェーラーをゲームから除外し――新たな力を得た魔導師が、世界を席卷する！！進化せよ、覇魔導師アーカナイト・マジシヤン！！アーカナイト・マジシヤン／バスターの効果、このカードに乗っている魔力カウンターを二つ取り除き、相手フィールド場の全てのカードを破壊する！！この時エンディミオンの効果で魔力カウンターはこのカードが肩代

わりする。さあ、やれアーカナイト・マジシャン／バスター!!」

そう言った瞬間、何故かアーカナイト・マジシャン／バスターが箒に飛び乗り、後ろにミニ八卦炉らしきものを構え——って事はアレか!? 言えってことか!?

「……ブレイジングスター!!」

言った瞬間、満足そうにウインクした奴は、そのまま箒で突撃して全てのカードを破壊した……なんとも言い難い光景だ……

「……………」

綾香も若干引いてるし。

「まだだ!! 魔法カード死者蘇生を発動!! 墓地に眠りし魔術師の魂を呼び起こせ!! 現れろ、ブラック・マジシャン!! バトル!! ブラック・マジシャンでダイレクトアタック!! 黒・魔・導!!」
「ぐわあああああ!!」

海馬

LP2000↓—500

過去編EX ……社長、俺、何かしましたか？（後）（後書き）

後で蛇足編を投稿する予定です。

さて……最後を飾ったのは黒魔術師。海馬との決着にはこれしかないですね。

ブラマジガールとヴェーラーという二大ヒロインをシンクロして出たのがアーカナイト・マジシャンさんでした。そして、彼女？にも暴走してもらいました。ちなみに攻撃名は、

通常……恋符マスタースパーク

／バス……恋心ダブルスパーク

覇魔……魔砲ファイナルマスタースパーク

です（笑）

感想お待ちしています。

それでは、次回またお会いしましょう。

過去編EX ……社長、俺、何かしましたか？（オマケ編）（前書き）

デュエル無しです。
すみません。

過去編EX ……社長、俺、何かしましたか？（オマケ編）

「……俺の勝ちだ、海馬」

「……まさか、俺が負けるとはな……」

海馬が、そう静かに呟く。

まあ仕方ないと思う。こっちは少しネタ入っているとはいえ、シンクロを使ってるんだ。

これで負けたら俺が逆に泣きたくなる。

「さて、俺の望みを聞いて貰おうか」

そして、一応ここまでは予定通り。嫁が三体と究極嫁が海馬の場に揃った時は泣きたくなかったけど、まあ勝てたからいい。

これで俺の望みを聞いて貰えない場合、俺の予定がだいぶ狂う事になったが——今考えてみれば運がいい。

海馬が俺の所に使いを寄越した事、上手く願いを聞いて貰えるように出来た事、そして——

「……鏡夜……」

「そんな心配そうな顔するなよ。俺が泣きたくなるだろ？」

——こんなに可愛い婚約者を手に入れる事が出来たこと、かな。

「……ふうん、まあいい。さあ、望みを言ってみせろ、夜光鏡夜」

「では遠慮なく。俺の願いは——」

さて。お話の時間だ。さっさと終わらせて綾香の機嫌が悪くならな

いうちにさっさと帰ろ。

side モクバ

……わからない。

あいつ——夜光鏡夜は、何故あんなことを叶えて欲しかったんだろう。

「どうした、モクバ」

「兄サマ……ちょっとひっかかって……」

「夜光鏡夜のことか……」

「うん」

アイツが言った願いは、

『人探しの達人、世界最高クラスのハッカー——まあ魔法使い級、最強の用心棒、戯言使い、最後はまあいたらでいいが最高の魔術師——封印指定かな？を全部合わせて十五名用意してくれ』

ということ。金でも、海馬コーポレーションの経営権やカードでもなく、そんな願いだった。

……戯言使いってなんだ？それに、魔術師って……わけがわからない……封印指定ってなんなんだよ……

「なんであんな願いを言ったのか、って思ってさ」

「……ふ、モクバ。奴の目を見なかったのか？」
「目？」

そういえば、なんか挑戦的な目をしているとは思ってたけど……兄
サマを相手にしても、全く物おじしたような様子を見せなかったし
……

「モクバ。覚えておけ。あれは、そこら辺に吐き捨てるようにいる
凡骨の目ではない。あれは、れっきとした捕食者の目だ」

「捕食者？」

「ああ。奴は、まず目から違う。奴の目を例えるのなら、空を飛び、
餌を狙うような鷹の目だろう。そして、今回は俺が餌だった、それ
だけの話だ。さあ、行くぞモクバ！！奴の望み、しかと叶えてやろ
うではないか！！」

「あ、うん……」

兄サマは何故か喜んでるけど……駄目だ、全くわからない……
夜光鏡夜……海馬コーポレーションに仇なす奴にまで成長しないと
いいけど……

side モクバ end

「……何を考えているの……？」

「ああ、やっぱり気になるか」

「当たり前……」

まあ、気になるよな。

普通ならあんな要求しないだろうし。

最寄りのベンチを見つけ、綾香を座らせた後、近くのコンビニで二つコーラを買う。そして、俺自身も腰かける。

「いい機会だから綾香にも話しておくよ。俺のこの世界に来た時に考えていたことを」

「……え……？」

綾香が驚いて、そして涙目に――って。

「どうして泣き出すんだよ!？」

「まだ、私に隠し事してた……」

「……別に話さなくてもいいか、って思ってたんだよ。完全に私事だからさ」

「……駄目……そういうのから、恋人の仲は崩れていくんだから……っ!!!」

ポロポロと涙を流していく綾香。その勢いは、俺が抱き締めても止まらない。

……あー、どうしたら泣きやんでくれるだろうか。なんというか、周りの目が痛い。

「……キス……」

「へ？」

「大人のキス……してくれたら許してあげる……」

……とんでもなくハードなの来ましたよ。いくら小四とはいえ、誰に見られてるかわからない場所でキスはちよっと、な……

「なら子作り……」

「小四で!？」

「嫌ならキス……」

……選択肢は最初から一つしかありませんでした。

しかもさっきの『子作り』の時、妙に本気っぽい感じがした……俺達まだ小四だぞ……? そういうのはせめて中学生になってからだ……

「……別に私のヴァージンを捧げる準備はいつでも出来てるのに……」

「なあ、綾香」

「……何? ご主人様……」

……ん? 今何かおかしかったような気が。しかもヴァージンとか。普段の綾香じゃ絶対に言わない台詞だ……もしかして、綾香って……炭酸で酔うのか……?

「綾香。聞きたいことが」

「……何……? ご主人様^{マスター}の事を思いながら自慰をした回数……? それとも、ご主人様^{マスター}の事を思っ^{マスター}てイっちゃった回数……? それとも、ご主人様^{マスター}に縛って」

「いや、なんでもない。勘違いだった」

……間違いない……

綾香は、炭酸で酔う……しかも、この酔い方は……酷いな……これからは綾香には炭酸を飲ませないようにしよう……

「とりあえず、目をつぶれ、綾香」
「ん……」

素直に目を閉じた綾香の唇に俺自身の唇を重ねる。……くそ、いつも味わっても柔らかいな、綾香の唇……

結局、離れたのは酸欠になりかける寸前だった。しょうがないよね。だって綾香が可愛すぎるんだもの。

「ハア、ハア……とりあえず話していくぞ……」

「うん……」

よし。綾香も落ち着いた。今のうちにさっさと話してしまおう。またあんな風に暴走されると困るし。

「俺の目的は――」

過去編EX ……社長、俺、何かしましたか？（オマケ編）（後書き）

さて、これで過去編は終了なのですが……
次回から中学生編に入っていきます！！！！

ですが、現在テスト期間中なので、更新の停滞が予想されます。
少なくとも今までのペースでは更新出来ないと思います。申し訳ありません。

それでは、次回、中学生編（起）でお会いしましょう。

ORCSをニパック買ったらブラックミストさん（レリーフ）が出て、

『こんなんよりもガガガールちゃん寄越せ！！』
とってしまった駄作者でした。

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9002w/>

遊戯王に転生？ そんな事より婚約者とイチャイチャしてたい。

2011年11月26日17時53分発行